

博士論文

カルナップ『世界の論理的構築』における「相互主観性」の問題

小川 雄

目次	1
序章	3
第1章 認知にかんする構成的把握	
はじめに	7
第1節 実在論者と観念論者の論争	8
第2節 日常的な言語の欠点	11
第3節 構成のねらい	15
第4節 所与からの合理的再構築	18
おわりに	22
第2章 認知にかんする関係的把握	
はじめに	25
第1節 体験的な所与	27
第2節 関係の記述	31
第3節 関係の形式的な局面	34
第4節 カルナップの新カント派的な企て	37
おわりに	41
第3章 相互主観性の基底	
はじめに	43
第1節 他人の心理状態にかんする認知	44
第2節 構造	47
第3節 「構成」の論理的な局面	51
第4節 物理学の任務	54

おわりに	57
第4章 物理学的な世界と知覚的な世界の同質性	
はじめに	59
第1節 相互主観的な対応	60
第2節 温かさの認知	63
第3節 二つの世界の統一的把握	66
第4節 検証	70
おわりに	73
終章	76
文献一覧	84

序章

本論の目的は、カルナップ(Rudolf Carnap. 1891-1970)の主著『世界の論理的構築』(*Der logische Aufbau der Welt*. 1928)¹に照準を絞り、認知を「構成」(Konstitution)(LAW 2, 1928)とするカルナップの見解を精査して、科学的な客観性を支えている、「相互主観性」(Intersubjektivität)(LAW 90, 1928)の実相に迫るところにある。

周知のとおり、C.I.ルイス(Clarence Irving Lewis. 1883-1964)やクワイン(Willard van Orman Quine. 1908-2000)は、カルナップの『世界の論理的構築』に対して、知識の本質を無媒介的な経験に置く発想である²とか、ヒューム以来の急進的な経験主義である(EN 18, 1969)³とかといった、カルナップを基礎づけ主義者とする描像を与えてきた。すなわち、こうした理解のもとでは、『世界の論理的構築』のカルナップは、経験の私秘性を知識の確実性の源泉として特定して、あらゆる知識をその個人的な経験に引き戻そうとしている。しかし、近年になって、『世界の論理的構築』を当時の時代状況に即して読み解く研究者たちの努力によって、このような見方は、説得力を失いつつある。たとえば、フリードマンは、カルナップをイギリス経験論の系譜ではなく、むしろ、新カント派の問題圏に位置づけようとしている⁴。すなわち、この見立てに従えば、カルナップは、わたしたちの手元には個人的な体験しかないにもかかわらず、なぜ、わたしたちは、客観的な知識を獲得できるのか、という問いに応答しようとしている。言い換えれば、フリードマンが理解しているカルナップは、「客観的な世界」(LAW 3, 1928)の樹立を志向している。とはいえ、カルナップは、いったい、なにのためにそのような領域を立ち上げようとしたのであろうか。カルナップは、新カント派の哲学者たちのように、科学的な知識の客観性を根拠づけようとしているのであろうか。あるいは、ツェーが主唱しているように、経験的な「検証」可能性の基礎として「客観性」を築こうとしているのであろうか(JCC 678, 2003)⁵。

その問いに答えるために、本論は、まず、『世界の論理的構築』を紐解いて、そこで打ち出しているカルナップの基本的な枠組みを、認知にかんする主観的な「構成」説として特徴づける。この考え方は、一見したところでは、認知的な対象はわたしたちじしんが「産出」しているという、いわゆる観念論であるように思える。しかしながら、「哲学における疑似問題」(“Scheinprobleme in der Philosophie.”1928)⁶という論考のなかのカルナップの言明に従えば、観念論も実在論も実りのない「疑似提題」(SP 35, 1928)である。だから、認知にかんするカルナップの考え方は、実在論とか観念論とかといった伝統的な哲学

の枠組みとは異なる観点から捉えなければならない。そこで、第1章では、实在論者と観念論者のあいだの論争を不毛であるとカルナップが言い切る論拠を析出させたうえで、なぜ、そのような論争がこれまで続いてきたのかと問う。その問いの究明をとおして明らかになるのは、カルナップが言明の「意味」(Sinn)(SP 35, 1928)を「事態の表象」(Sachverhaltsvorstellung)(SP 31, 1928)に求める理由である。すなわち、「事態の表象」は、わたしたちのあいだに合意を約束するので、言明の「意味」をかたちづくれる。

カルナップも認めているように、わたしたちの認知の発端は私秘的な体験である。とはいっても、カルナップは、その特質を、クワインが指摘していたような、絶対的な明証性としては理解していない。カルナップに従えば、体験の私秘性は、むしろ、認知的な空虚性を意味している。言い換えれば、所与としての体験は、それ自体では、わたしたちがほかの主観に伝達できる情報をなにも備えていない。第2章のねらいは、カルナップのこのような体験理解に則ったうえで、そのような体験から、どのようにして、さまざまな感覚が生じてくるのかを明らかにする。カルナップによれば、そのための鍵となるのは、「関連付けと比較」(LAW 92, 1928)である。とはいえ、カルナップのこのような枠組みは、わたしたちにどのような情報も開示しないはずの体験にさまざまな局面があることをすでに前提してしまっているように思える。この反論に応答するために、カルナップの言説に依拠しながら、関係を形式的に把握する視座を析出させる。

第2章の議論は、体験から感覚的な情報をどのように「構成」するのか、という問題に取り組んだ。しかし、わたしたちの認知は、そうした情報を駆使して、ほかのひとのこのありようも捉えている。そこで、第3章は、カルナップの枠組みのなかでほかのひとの心理状態にかんする認知がどのようにして可能であるのかを問う。その探索の結果、わたしたちのそのような認知を成立させているのは、ほかのひとの外形的な様子からみずからの感情にかんする表象を出力する、「表出関係」(Ausdrucksbeziehung)(LAW 184, 1928)である。「表出関係」のあり方は、わたしたちひとりひとりで異なっている。すると、異なる主観のあいだでは、「ほかのひとの心理的なもの」にかんする理解は一致しないはずである。しかし、カルナップは、たとえば、あるひとが喜んでいるかどうかにかんして、わたしたちは一致に至ると確言する。その理由を探るために、「ほかのひとの心理的なもの」にかんする認知の始まりに立ち返りながら、カルナップがそこで導入している、「世界点」(Welt-punkt) (LAW 165, 1928)という装置の認知的な意義を明らかにする。その考察をとおして、「世界点」が一对一の対応関係の保証として機能している点を際立たせな

がら、二人の主観がなぜ同じ事物を見ていると言えるのか、その理由を開示する。

第3章で確認したように、ほかのひとのこころのありようを認知するための「表出関係」は、異なる主観どうしではかならずしも一致しない。しかし、カルナップによれば、物理学が数学的に固めた自然法則には、ほかの主観にも通用する妥当性がある。この言説に従って、第4章では、カルナップが『世界の論理的構築』で描き出している、「物理学的な世界」(LAW 132, 1928)のありようを明晰にし、その領域をカルナップの言う「客観的な世界」として同定する。それでは、わたしたちは自然法則をどのようにして獲得しているのでしょうか。カルナップによれば、わたしたちは、手元にある経験に適合する微分方程式を自然法則として探っている。しかし、その探索は、わたしたちのある感覚的な情報に対してそれに合致する「数的な構造」が無数にあるという困難に直面する。カルナップは、このような困難に対して、実際的なある方法的な原理から応答しようとしている。とはいえ、こうしたカルナップの枠組みには、つぎのような疑念を提起できる。「知覚的な世界」には量では汲みつくせない特質があるのではないのか、と。もし、このような疑念が当たっていたとしたら、わたしたちは、「知覚的な世界」(*Ibid.*)を理解するにあたって、物理学を援用するのではなく、当の世界に踏みとどまらなければならない。カルナップはこのような反論に対してどのように応答するのであるだろうか。カルナップの言説に則りながら、わたしたちの温かさの感覚を解析し、わたしたちの知覚の機能を、形式的な関係を「現象の秩序」として把握するところに求める。このような視座に立てば、物理学と知覚を引き離して考える必要はない。というのも、カルナップによれば、知覚が捉えている秩序を、物理学は「数で名指している」からである。すると、物理学は自然の質を量に置き換えて、わたしたちが認知している出来事の本質的な局面を失わせているという批判に対しては、こう応答できる。わたしたちが熱さとか冷たさとかとして理解しているのは、それらが現れてくるときの知覚的過程にある関係的な違いであって、物理学は、質としてのそのような構造的差異を、数的連関に基づいて、定量的なやり方で精密に掴みとろうとしているのである、と。さいごに、これまで獲得した見地から、「知覚的な世界」と「物理学的な世界」との同質性を「相互主観性」の観点から際立たせる。

¹ Rudolf Carnap. *Der logische Aufbau der Welt*. 1928. Hamburg: Felix Meiner, 1998. 本著作からの引用と参照にかんしては、本著作を LAW と略記し、該当箇所の頁数を示して、出版年(1928)を併記する。

-
- ² Clarence Irving Lewis. “Experience and Meaning.” *American Philosophy Association*. Vol.7. 1933. p. 134.
- ³ Willard van Orman Quine. “Epistemology Naturalized.” 1969. Ed. Roger F. Gibson, Jr. *Quintessence: Basic Readings from the Philosophy of W.V. Quine*. Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press, 2008. 本論文からの引用と参照にかんしては、本論文を EN と略記し、該当箇所の頁数を示して、出版年(1969)を併記する。
- ⁴ Michael Friedman. “Carnap’s *Aufbau* Reconsidered.”1987. *Reconsidering Logical Positivism*. Cambridge: Cambridge University Press. 1999.本論文からの引用と参照にかんしては、本論文を CAR と略記し、該当箇所の頁数を示して、出版年（1987）を併記する。
- ⁵ Jonathan Y. Tsou. “The Justification of Concepts in Carnap’s *Aufbau*.” *Philosophy of Science*. Vol. 70, No. 4. 2003. 本論文からの引用と参照にかんしては、本論文を JCC と略記し、該当箇所の頁数を示して、出版年(2003)を併記する。
- ⁶ Rudolf Carnap. “Scheinprobleme in der Philosophie.” 1928. *Scheinprobleme in der Philosophie und andere metaphysikklitische Schriften*. Hrsg. Thomas Mormann. Hamburg: Felix Meiner, 2004. 本論文からの引用と参照にかんしては、本論文を SP と略記し、該当箇所の頁数を示して、出版年(1928)を併記する。

第1章 認知にかんする構成的把握

はじめに

本章の目的は、『世界の論理的構築』のなかでカルナップが唱えている、わたしたちの認知的な営為を主観の「構成」とする見解に照準を絞って、カルナップがそのような枠組みを提起しなければならない理由に言明の「意味」という観点から迫るところにある。

わたしたちの認知的な対象をわたしたち自身による主観的な「構成」の産物であるとする見解は、一見したところ、観念論という認識論の古典的な枠組みに親近的である。しかし、多くの研究者が指摘しているように、カルナップは、認識論を観念論とか実在論とかといったいわゆる形而上学から切り離そうとしている。たとえば、アーノルドは、カルナップ哲学の基調を「形而上学の削除」

¹とみなしているし、ガブリエルは、カルナップとフレーゲの思想を比較しながら、カルナップ哲学の特質を「言語の論理分析という手段による形而上学の完全な「削除」」²とさえ言い切っている。実際、カルナップは、「哲学における疑似問題」という論文のなかで、言明が「意味」をもつ条件を露にしながら、それに照らして、外的世界にかんして「実在性」を認める提題もその反対の提題も「無意味」(sinnlos)であるとして退けようとしている(SP 27, 1928)。すると、カルナップの言う「構成」は、観念論的な観点からではない視座から理解しなければならないことになる。しかし、なぜ、カルナップは、観念論とか実在論とかといった提題に「無意味」という評価を与えられるのであろうか。

第1節では、まず、『世界の論理的構築』を紐解きながら、カルナップがわたしたちの認知をどのように捉えているのかを概観して、カルナップのその把握を認知的な対象にかんする主観的な「構成」として描き出す。カルナップのこの枠組みは、一見したところ、観念論の教説に類似している。しかし、カルナップは、「哲学における疑似問題」のなかで、ある事物が実在するかどうかという問いにたいして、「肯定的な立場も否定的な立場も採ることはできない」(SP 35, 1928)と明言している。そこで、第2節では、その理由を、カルナップが言明の「意味」を「事態の表象」として特定しようとしている点に着目しながら、日常言語が「有意味」な言明と「無意味」な言明とを峻別できないところに求める。このようにカルナップが観念論的な枠組みを拒絶しなければならない論拠を明らかにした

上で、クワインがカルナップの言う「構成」をどのように理解しているのかを確認する。さいごに、クワインの見立てに対して反論を提起しながら、カルナップの「構成」という考え方の背景に心理学の「ゲシュタルト理論」(LAW 93, 1928)がある点を指摘する。

第1節 実在論者と観念論者の論争

わたしたちは、たとえば、「ルークス」という名前を、目の前の一匹の犬を指し示すために使用できる。この場合に、わたしたちがその名前の指示対象として想定しているのは、通例、ある毛並みの色とか一定の外形的な特徴とかを具備しているひとつの個体、言い換えれば、さまざまな特性を内属させているひとつの事物である。しかし、カルナップによれば、「ルークス」という名前が言い表している対象は、つぎのような「もろもろの点」(LAW 213, 1928)の集まりである。すなわち、それらは、ひとつの時間軸とみつつの空間座標をもつ座標系のなかに互いに隣り合うように配列された、もろもろの「世界点」であり、しかも、そうした点のそれぞれは、その瞬間に目に入った体毛の色とか体毛に触れたときの手の感触とかといった、もろもろの感覚が「割り当てられている」(LAW 165, 1928)。この事例が示しているように、カルナップにあっては、固有名の指示対象は、それ自体でひとつのまとまりとしてある存在者ではない。むしろ、その対象は、幾何学的な座標系のなかでさまざまな感覚の情報を映しだしている、もろもろの「世界点」の連なりである。

たとえば、わたしたちがいま直面しているある動物をがらがら蛇として同定している場面を考えてみよう(LAW 69, 1928)。うへの理解を踏まえれば、その認知は、つぎのように描き出せる。まず、ある視点から見えた対象を、幾何学的な座標のなかのもろもろの「世界点」の分布に置き換えながら、わたしたちがその瞬間に捉えたさまざまな視覚的な情報をそれぞれの点に投射していく(LAW 170, 1928)。つぎに、わたしたちは、そうした情報の集積を「めがねのかたちをした器官」(LAW 69, 1928)としてとりまとめて、当の対象を「目に入っている事物」(Sehding)(LAW 170, 1928)に成形する。わたしたちがすでに所持している知識を前提にすれば、「めがねのかたちをした器官」はがらがら蛇の徴表に合致する。その一致をもって、わたしたちは、当の「目に入っている事物」をがらがら蛇という「種類に分類する」(LAW 139, 1928)。このようにカルナップに従って、認知の過程を解析すると、ある個体にかんするわたしたちの感覚的な認知を支えているのは、当の対象を感覚的な情報と結びついている「世界点」の布置として仕立てたり、そのようにして生成した個体を一定の種類に同定したりする、主観の構成的な働きである。認知にかんして

認識主観の能動的な役割を強調するこのような発想は、カルナップも認めているように、「あらゆる認知の対象は思考によって産出される」(LAW 249, 1928)とする観念論と類比的である。

カルナップの特徴づけに俟つまでもなく、観念論は、实在論を反駁する教説である(LAW 246, 1928)。すなわち、实在論者は、ルークスとかがらが蛇とかにたいして「实在性」(Realität)(SP 36, 1928)、別言すれば、「認識している意識からの独立性」(LAW 245, 1928)を主唱するけれども、観念論者は、それに反対して、そうした事物がわたしたちの認知的な営為の所産であると力説する。だから、観念論者が事物の認知を主観による事物の「産出」として捉えようとしているとき、その捕捉のねらいは、实在論者の提題を否定して、外的な事物が認識主観からの働きかけに依存してはじめて存立できるという点を明確にするところにある。すると、カルナップは、事物の「实在性」を否定するために、事物の認知を主観による「構成」として描き出そうとしているのであろうか。

カルナップは、「哲学における疑似問題」のなかで、同じひとつの山を調査しているふたりの地理学者のそれぞれを实在論者と観念論者に見立てて、かれらのあいだで生じる論争をつぎのように描写している。すなわち、实在論者の地理学者は、「わたしたちがともに突きとめたこの山には、発見された地理的な特性が帰属しているだけではなく、それにくわえて、その山は、实在する」(SP 36, 1928)と主張する。それゆえ、この地理学者によれば、くだんの山は、わたしたちによる認知とは無関係に存立している。これに対して、観念論者の地理学者は、「その山そのものは实在しない」(*Ibid.*)と反論する。かれに言わせれば、目の前にある山は、主観的な認知的な作用の所産にほかならない。カルナップは、山の「实在性」をめぐるこのような論争にかんして、「肯定的な立場も否定的な立場も採ることはできない」(SP 35, 1928)、と主張している。カルナップに従えば、实在論と観念論のどちらの提題が正しいのかは、わたしたちには決定できないのである。

カルナップに倣って、あるインディアンが息子に「黒いバッファロー」という名前をつけているとしよう(SP 33-34, 1928)。そのとき、そのインディアンのところには、「黒いバッファロー」ということばが連想させる「随伴的な表象」(*Begleitvorstellung*)(SP 34, 1928)が生起している。すなわち、当のインディアンは、「黒いバッファロー」ということばをところに抱いたとき、かつて黒いバッファローに出会ったさいに感じた、「恐怖」(*Ibid.*)とか「敬意」(*Ibid.*)とかを再生している。「黒いバッファロー」ということばは、過去に出くわした黒いバッファローの心象を媒介にして、そうした感情と分かちがたく結びつ

いている。だからこそ、くだんのインディアンは、息子に「黒いバッファロー」と名づけたのである。別言すれば、そのインディアンは、息子が自分の名前を周囲のひとびとに告げたときに、かれらがその息子を怖れたり敬ったりすることを期待している。

この例から分かるように、カルナップの捉え方からすると、どのようなことばにもわたしたちの一定の心情が付帯している。しかも、うえて引いたカルナップの言い回しに従えば、そのような心の動きは、付随的である。カルナップの見方では、「実在」ということばは、こうした副次的な情感をもっぱら表示している。というのも、カルナップは、実在論者の地理学者が言い張っている、「その山は実在する」という発言の真意を、「その山にたいする隔絶感、すなわち、多くの点でわたしの思い通りにはならず、それどころか、わたしに逆らいさえするという感情」(SP 37, 1928)に求めているからである。換言すれば、実在論者の地理学者は、観念論者の地理学者に山の「実在性」を訴えているとき、その山を見たときに感じた不可侵性を強調している。

このような脈絡からすれば、観念論者の地理学者も、「その山そのものは実在しない」と述べ立てているとき、ある心情を吐露していることになる。すなわち、自分はくだんの山にたいして不可侵性を感じない、と。逆に言えば、観念論者は、目の前の山をわたしたちの意のままにできるという支配感を抱いている。このように、カルナップの立ち位置からすれば、山が実在するかどうかの論争は、同じひとつの山にたいしてふたりの地理学者がそれぞれに喚起している、かれらと当の山とのあいだに横たわっている距離の受けとめ方に起因しているにすぎない。

これまでの考察が露わにしているように、実在論と観念論のそれぞれは、「実在性」ということばをとおして、周囲の環境にたいするふたつの感情的な反応を言表している。カルナップの用語でこれを換言すれば、これらふたつの提題は、わたしたちが日常生活のなかで直面する、「環境とか、隣人とか、人間が取り組んでいる課題とか、人間が被っている試練とかへの感情的および意志的な順応にたいして、表現を与えている」(ÜM 105-106, 1932)³。だから、カルナップにあっては、たとえば、モーツァルトの音楽が調和の感覚を語り、ベートーヴェンの音楽が闘争的で雄々しい感情を歌い上げているように(ÜM 107, 1932)、実在論と観念論は、わたしたちの生活を形作っているさまざまなものごとにわたしたちが感情的に与えている彩りの一つの表現である(ÜM 106, 1932)。

平穏で秩序だった生き方を望むひとは、モーツァルトの音楽に惹かれるかもしれない。これとは反対に、英雄的で激動的な人生に憧れるひとは、ベートーヴェンの音楽を愛好す

るであろう。この例と同じように、わたしたちは、それぞれの日常生活のなかで遭遇する事物にたいしてどのような態度を採るのかに応じて、實在論を主唱したり、観念論を支持したりしている。この理解に立てば、わたしたちは、「實在論と観念論のどちらの提題が正しいのかという問い」(SP 34, 1928)を、つぎのような問いとして捉え直せる。すなわち、それらふたつのどちらがわたしたちの生活態度をいっそう適切に言い表しているのか、という問いである。カルナップが引き合いに出しているように、虫が激しくのたうち回っている場面に同じように出くわしても、わたしたちの反応はそれぞれで異なっている。たとえば、あるひとは、その虫に憐れみの念を覚えて、それを踏み潰さないように気をつけるかもしれないけれども、べつのひとは、まったくそのような感情を抱かないまま、躊躇なく踏み潰してしまうかもしれない(SP 41, 1928)。このように、周囲の事物にたいするわたしたちの感じ方はひとりひとり違う。「實在論」と「観念論」は、そのような主観的な情感を言い表すための道具としてある。だから、カルナップも述べているように、それらふたつの提題は、わたしたちを取り巻く環境にたいする「任意の恣意的な表現手段」(ÜM 106, 1932)である。それゆえ、わたしたちが「實在論」と「観念論」のどちらを正しいと認めるのかは、音楽の好みが一とそれぞれであるように、かならずしも合致しない。別言すれば、「實在論と観念論のどちらの提題が正しいのかという問い」は、わたしたちの心情にたいして相対的にしか決まらない。

第2節 日常的な言語の欠点

前節の考察に基づけば、山の「實在性」をめぐる、一方の地理学者がいくら自分の意見を力説しても、その正しさは、当の地理学者にとっての主観的な妥当性でしかない。逆に言えば、山が實在するかどうかという問いにかんしては、ふたりの地理学者に一律に当てはまる妥当性はわたしたちの手元に存在しない。この問いをめぐる起こる論争には決着がつかない。したがって、實在論者と観念論者とがたがいに論駁しあいながら、みずからの提題にたいする賛意を相手に求めるという状況は、「不毛」(ÜM 82, 1932)である。とはいえ、なぜそのような論争が哲学者たちのあいだでこれまで続いてきたのであろうか。

たとえば、「動物には靈魂がある」(GS 60, 1929)という言明について考えてみよう。カルナップによれば、「靈魂は、根源であり、そこから、思考と感覚のすべて、感情と意欲のすべて、それに加えて、身体と身体の有機的な過程が湧きでてくる」(GS 49, 1929)。この規定に従えば、「靈魂」は、心理的な過程とか身体的な生理的作用とかといった、生

物のあらゆる営みを成り立たせている。しかし、わたしたちは、「靈魂」が動物に宿っているのかどうかを知覚によっては確かめられない。なぜなら、「靈魂」は、有機体のさまざまな活動をその「背後」から生じさせている、「観察不可能なもの」であるからである (GS 60, 1929)。カルナップは、この点に鑑みて、「靈魂」にかんする教説を内容のない「無意味」な言明であると断じている (GS 61, 1929)。カルナップに言わせれば、「靈魂」についてなにごとかを語ろうとしているどのような主張も、「なにも述べていない」 (ÜM 86, 1932)。これに反して、カルナップによれば、「知覚的なもの」 (GS 60, 1929) をその中身として含んでいる言明、たとえば、「かくかくの髪の色をしているひとがいましかじかのあたりにいる」は、「有意味」である (SP 30, 1928)。そのような知覚可能な情報は、言い換えれば、わたしたちが観察をとおしてそれぞれの知覚から獲得できる心象である。カルナップは、その心象を「事態の表象」と呼称している。だから、カルナップはこう力説する。「事態の表象が、ある言明の内容をかたちづくれる」 (SP 31, 1928)、と。

カルナップも確認しているように、同じ一つの山を調査している二人の地理学者が目の前にある山の高さとかかたちとかにかんする意見では合意に至る (SP 35, 1928)。カルナップは、この事例を敷衍して、知覚的な圏域のなかでは「一致が支配的である」 (*Ibid.*) と主張している。すると、「事態の表象」という知覚可能な情報を伝えている「有意味」な言明にかんしては、わたしたちは、その内容の真偽にかんする判断を一致させられる。こうした言説を勘案すれば、言明にかんする「有意味」と「無意味」の分水嶺はつぎのところにある。すなわち、当該の言明の妥当性が発話者だけではなく「ほかの主観にとっても」 (LAW 90, 1928) 通用するかどうかという点である。

前節で明らかにしたように、カルナップの見方からすれば、「事態の表象」について言及している言明は、「有意味」である。すると、うえで述べた文法的な規則が指定していることばの組み合わせ、つまり、言明は、つねに「有意味な文字列」 (ÜM 91, 1932) であるように思える。実際、当の規則から逸脱している「カエサルはしかもである」からは、わたしたちは、カエサルという人物にかんするどのような知覚可能な情報も引き出せない。それゆえ、当のことばの連なりは「無意味」である (*Ibid.*)。ところが、カルナップに従えば、日常的な言語のなかでは、「ある言明は、文法的に異論の余地がないにもかかわらず、無意味であることがある」 (SP 27, 1928)。すなわち、日常的な言語の文法的な適格性は、言明が「有意味であること」 (SP 30, 1928) をかならずしも保証しない。

カルナップに倣って、「失われた生命はいまどこにあるのか」と問いかけてみよう (GS

51, 1929)。この問いは、文法的には瑕疵がない疑問文である。とはいえ、カルナップの指摘にあるように、わたしたちは、「どこにあるのか」ということばを、もっぱら、「物」(GS 50, 1929)との関連で使用する。なぜなら、知覚的に位置を突き止められるのは、たとえば、具体的な個体であるからである。なるほど、「生命」ということばは名詞であり、名詞は「物」(GS 51, 1929)を指し示すことばとして機能するから、一見したところでは、うへの問いかけは「どこにあるのか」の使用法にかなっている。とはいっても、「生命」ということばが実際に指しているのは、ある一定の有機的な過程であり、それゆえ、「状態」(*Ibid.*)である。わたしたちは、「状態」にたいして「どこにあるのか」と問われても、それがあるところをはっきりと限定できない。というのも、「状態」は、それが起こっているところを、「物」のように明確に知覚できないからである。すると、なんらかの「状態」が「どこにあるのか」という問いかけにたいしては、わたしたちは、「有意味」な言明では応答できないことになる。

平常文の場合でも事情は同じである。たとえば、あるひとが、ある三角形を見たときに、その三角形の様子から有徳さを感じとったとしよう(SP 27, 1928)。前節の考察を踏まえると、その感覚は、「事態の表象」ではなく、「随伴的な表象」である。言い換えれば、当の有徳さは、わたしたちのところに、くだんの三角形にかんする知覚的な心象、一例を挙げれば、三辺が等しいといった視覚的な感覚としては現われてはいない。むしろ、有徳さというくだんの感じは、そのような知覚に付随して生起してくる、当のひとに固有の主観的な心情である。だから、「この三角形は有徳である」(*Ibid.*)という文法的には正しい言明は、個人的でしかない「随伴的な表象」を述べている「無意味」な言明である。このように、日常的な言語の文法的な規則は、「無意味なことばの結合」をかならずしも排除していない(ÜM 91, 1932)。言い換えれば、日常的な言語のなかでは、文法的な正しさは言明が「有意味」であることを保証しない。だから、日常言語の観点から文法的に適格な文字列であったとしても、それは、「有意味」な言明であるかもしれないし、「無意味」な言明であるかもしれない。つまり、日常言語は、それら二つの言明に同じ適格性を与えて、それらを同じ水準に並べている。カルナップにしたがえば、わたしたちは、このような文法的な「類比」に「たやすく欺かれてしまう」(ÜM 94, 1932)。二人の地理学者にかんする事例で言えば、こうである。「実在」ということばは、高さとか大きさとかを表すことばのように、「この山」ということばに述語として正しく繋がる。それゆえ、「この山は実在する」と「この山そのものは実在しない」は、「この山はかくかくの高さである」

と「この山はしかじかの大きさである」と同じく、文法的に適格な言明である。後者の二つの言明に目を転じれば、それらは、「事態の表象」を記述しているので、「有意味」である。これらの情報から、二人の地理学者はつぎのように考えてしまう。「この山は実在する」と「この山そのものは実在しない」は、「有意味」な言明と同じ文法的な適格性を備えているから、それら二つの言明も「有意味」であるに違いない、と。

しかしながら、第一節で明らかにしたように、一方の「実在する」ということばにはもともと山への疎外感という私秘的な感情にしか結びついていないし、他方の「実在しない」ということばも、元来、山への個人的な親近感に根ざしている。だから、それらのことばが現われているくだんの二つの言明は、どちらも、眼前の山についてのどのような特性も語っていない。別言すれば、「この山は実在する」と「この山そのものは実在しない」は、「この山はかくかくの高さである」と「この山はしかじかの大きさである」とは違って、「事態の表象」から単離している。つまり、前者の二つの言明は、実際のところ、「無意味」である。

このように、日常的な言語が許容している「有意味な文字列と無意味な文字列とのあいだの文法的な形式の同等性」(*Ibid.*)は、「無意味」な言明があたかも「有意味」であるかのようにわたしたちを錯覚させる。別言すれば、日常的な言語は、「無意味」なことばの連なりに「有意味」なことばの組み合わせと同じ言語的な扮装を施して、当該の「無意味さ」(*Sinnlosigkeit*)(ÜM 98, 1932)を覆い隠してしまう。二人の地理学者は、このような擬装に誘い込まれて、主観的でしかないそれぞれの個人的な心情を、両者が合意できる知覚可能な情報として錯誤する。こうして、實在論者と観念論者がみずからの主張の正しさを相手に立証できると思い込んでしまうのは、日常的な言語の文法的な規則が「無意味」な文字列を排除できていないからである。

そこで、カルナップが『世界の論理的構築』のなかで提起しているのは、日常的な言語ではなく、記号論理学に準拠した言語の枠組みである(LAW 134, 1928)。すなわち、カルナップは、論理的な見地に立って、文法的な適格性と言明の有意味性を厳格に一致させようとしている。そのような「論理的構文論」(*logische Syntax*)(ÜP 92, 1932)を支配しているとり決めは、論理学の「命題関数」(*Aussagefunktion*)の知見を下敷きにしている(LAW 27, 1928)。すなわち、この見地では、たとえば、「ドイツの都市」ということばは、「 x はドイツの都市である」という「命題関数」を表示している記号である。真であったり、あるいは、偽であったりする言明は、その「命題関数」の空所に一定の「許された項」(*zu*

lässiges Argument) (*Ibid.*)、具体的には、さまざまな都市の名前を代入して、出てくる。だから、論理的な観点では、あるひとつのことばは、もろもろの言明を生成するための鋳型である。この発想のもとで、「論理的構文論」は、日常的な言語の文法規則のように、ことばを名詞とか接続詞とかにし分けるだけではなく、そのことばがどんな特性を表しているのかに応じた分類を導入する(ÜP 92, 1932)。たとえば、「物理的な事物」ということばが言い表しているのは、ある一定の時間と空間を占めていて、しかも、さまざまな可感的な特質を備えている、いわゆる「物体」である(LAW 23, 1928)。くだんの準拠枠は、この特質をつぎのように約定する。すなわち、「1」とか「喜び」とかといったことばが指している対象は「物理的な事物」にかんする特質を所持していないので、そうしたことばと「物理的な事物」とは結びつかない、と。だから、「1は物理的な事物である」と「喜びは物理的な事物である」は言明として欠格になり、これらの文字列の形成は許されなくなる。

しかも、カルナップの洞察にもあるように、命題関数を下敷きにした準拠枠を採用すれば、ある事物の位置を「その場所ではなく、ある物体のべつの物体への位置関係」(AN 70, 1930)⁴として規定できる。すなわち、当の枠組みのなかでは、位置は、単独の主体に帰属できる絶対的な概念(AN 68, 1930)ではなく、「二つか、あるいは、いっそう多くの諸対象(多くの主語概念と呼べもする)に付与される特性」(*Ibid.*)、相対的な概念である。このような理解に基づいてようやく、位置にかんする言明が「有意味」になる。というのも、わたしたちにとっては、いわゆるニュートンの「絶対空間」のような(AN 70, 1930)、ある単独の物体がそれ自身で占めている場所は測定不可能であり、「位置関係だけが突きとめられる」(*Ibid.*)からである。

第3節 構成のねらい

このようにして、カルナップは、記号論理学の助けを借りながら、「有意味」な言明だけをかたちづくれるように言語的な約定を整備しようとしている。しかも、記号論理学を下敷きにしている「論理的構文論」は、このようにして出来あがったもろもろの言明にたいして、論理的な「導出可能性を確立する」(ÜP 92, 1932)。すなわち、その枠組みのなかでは、言明から言明への推論は論理的に演繹できなければならない。

カルナップの指摘にもあるように、「あらゆる推論はトートロジー的である」(AN 78, 1930)。言い換えれば、論理的な推論のなかにある前提と結論のあいだには、つぎのような

関係が成立している。「結論の言明は、つねに前提と同じ(あるいは少ない)ことを、異なる言語的な形式で述べているにすぎない」(*Ibid.*)。だから、論理的な推論のなかでは、前提が述べている事柄を正しいとするのであれば、結論の内容も妥当でなければならない。こうして、わたしたちは、カルナップの「論理的構文論」に基づくかぎり、「無意味」な文字列を言明の集まりから完全に閉め出すことができる。とはいえ、このような論理的な装置のもとでわたしたちの認知を捕捉するというカルナップの企ては、いったいなにをねらっているのだろうか。

たとえば、植物学者がある植物の個体を見て、その種類を特定している場面を想定してみよう(LAW 138, 1928)。カルナップに従えば、当の認知にかんする一連の過程はこうである。その植物学者が目の中の植物を観察しているときには、かれには、さまざまな視覚的情報が与えられている。その植物学者は、それらをまとめながら、当の植物にかんする外形的な特徴を浮かび上がらせて、すでにもっている、ある種類の植物についての知識との一致を確認して、当の植物の種類を判別している。しかしながら、カルナップも指摘するように、そのような同定は、主観である植物学者にとっては、たやすく、迅速であり、しかも、明証的である(LAW 139, 1928)。それにもかかわらず、カルナップは、『世界の論理的構築』のなかで、「どのようにして、認知はある対象からべつの対象へと到達できるのか」(LAW 250, 1928)と問いかけ、わざわざ上述の解析を行っているのである。

植物学者の認知をうえのように解析すれば、カルナップの洞察にあるように、情報を「素材」(LAW 138, 1928)として受けとる部分と、そうした与件をある植物種にかんする特徴にまで「加工」(LAW 139, 1928)する部分の二つが浮かび上がってくる。この捉え方に基づく、植物学者は、目の前の対象を一定の植物種、たとえば、ばらに分類するための徴表を、手元にある感覚的な情報からかたちづくっている。すなわち、植物学者が認めている眼前のばらは、主観による「構成」の所産である。このような見地に立って、カルナップは、『世界の論理的構築』のなかでこう言明する。「みずからの心理的な基盤」(*eigen-psychische Basis*)(LAW 84, 1928)から、「科学以前の認知の対象と科学的な認知の対象すべてが構成されることになる」(LAW 93, 1928)、と。たしかに、わたしたちは、普段の生活や科学の現場では、あたかも「直観的に」(LAW 27, 1928)、ある動物をがらがら蛇として瞬時に見分けたり、ある一連の現象を熱平衡としてただちに特定したりしている。しかし、カルナップは、うえの言明にあるように、そうした日常的な認知を、わたしたちがみずからの経験を基にして一定の手順でつくりあげた、形成体として呈示しようとしてい

る。

カルナップが「知的自伝」のなかで告白しているように、『世界の論理的構築』は、「いくにんかの哲学者、とりわけ、マッハとラッセルの影響のもとに」⁵ある。『世界の論理的構築』の冒頭が、ラッセルの説く「科学的に哲学するさいの最高の格率」からの引用である点に鑑みれば(LAW 1, 1928)、カルナップの当の著作は、わけても、ラッセルから強い示唆を受けている。実際、視覚的な感覚とか聴覚的な感覚とかといった「みずからの心理的なもの」(Eigenpsychisches)(LAW 79, 1928)からほかの認知的な対象、たとえば、事物を「構成」というカルナップのころみは、ラッセルが『外部世界にかんするわたしたちの知識』(*Our knowledge of the external world as a field for scientific method in philosophy*. 1914)⁶のなかで展開している企図と類比的である。すなわち、ラッセルは、「感覚にかんする諸事実(わたしたち自身の感覚与件)」(OE 79, 1914)を土台にして、それ以外のさまざまな存在者、たとえば、事物とかほかのひとのころみとか物質とかの「構築」(construction)(OE 100, 1914)に着手している。

ラッセルの言う「構築」は、わたしたち自身が感覚的によく見知っている事柄をその射程に収めていない。というのも、ラッセルによれば、わたしたちは、その種の知識を、「もっとも明証的で、しかも、もっとも確かに」(OE 63, 1914)獲得できるからである。言い換えれば、ラッセルにあっては、感覚的な情報は、「問題の余地がもっともない」(OE 74, 1914)ので、それ以外の知識を導くための立脚地としてふさわしいのである。この点に着目すると、ラッセルは、常識的な信念とか物理学的な知見とかを感覚与件から組み立て直しながら、わたしたちが前者の知識を知っていると言える根拠を、後者のもつ「明証性」(*Id id.*)から盤石にしようとしている。ラッセルの「構築」のねらいは、常識とか科学的な知識とかを確固とした基礎で踏みかためるところにある。

すると、カルナップも、ラッセルと同じように、わたしたちの認知を明証的な経験でもって基礎づけようとしているのであろうか。カルナップは、『世界の論理的構築』のなかで、事物の様子とか、ほかのひとのころみのありようとか、物理学の知識とかを、疑う余地のない安全な地盤に繫留しようとしているのであろうか。クワインは、こうした問いに対して肯定的に応答している。すなわち、カルナップの『世界の論理的構築』は、科学を「感覚的な証拠」のもとで基礎づけて(EN 263, 1969)、「経験科学の立脚地が正当であることを立証」(EN 264, 1969)しようとしている。しかも、クワインによれば、このような企てを動機付けているのは、「確実性を求めるデカルト的な探究」(EN 263, 1969)であ

る。だから、クワインの描像のもとでのカルナップは、科学的な認知を知覚的な情報に結びつけながら、科学に、主観的な経験がもつ信頼性を付与しようとしている。クワインによるこの読解は、はたして正鵠を射ているのであろうか。

カルナップに倣って、つぎのような場面を考えてみよう。すなわち、わたしたちには銅のように見える茶色い棒がピボットのうえで釣りあっており、この棒の片方の端に炎が当てられたとしよう(SP 12, 1928)。すると、わたしたちは、現在の視覚的な知覚を銅にかんする熱膨張の知識と組み合わせて、こう言明できる。「炎が当てられている側の端が傾く」、と(*Ibid.*)。しかし、わたしたちの予測は当たらなかった。というのも、わたしたちは、傾くはずの棒の端が、逆に、持ちあがるのを観察したからである(*Ibid.*)。

このとき、わたしたちは、最後の否定的な観察結果によって、「さきに信じていたことのどれかを妥当ではないとして宣言することを強いられる」(*Ibid.*)。カルナップは、どの信念を改訂するのかにかんして、わたしたちには「さまざまな選択の自由がある」(*Ibid.*)と指摘している。たとえば、棒は銅ではないかもしれないし、銅は炎に当てられても膨張しないのかもしれないし、赤い光は炎ではないかもしれないし、そもそも幻覚を見ているかもしれない、等々(*Ibid.*)。すなわち、わたしたちが所持しているさまざまな経験的知識を棄却してよいし、その一方で、幻覚を見ていると考えて、わたしたちが遭遇している一連の体験を否定して、これまで獲得してきたすべての知識の妥当性を堅持できさえもする。これらの言説から分かるように、カルナップにあっては、熱膨張という科学的な知識をはじめ、現在直面している知覚でさえ誤りの可能性に開いている。すると、つぎのように言わなければならない。カルナップは、わたしたちの知覚を、ある認知のための絶対的な基盤となるような、無謬で特権的な信念として位置づけてはいない、と。とはいえ、つぎの問いがただちに浮上してくる。感覚的な経験の確かさでわたしたちの認知を根拠付けようとしていないのであれば、カルナップは、経験から認知の対象を主観的に「構成」という企てをとおして、いったいなにをもくろんでいるのであろうか。

第4節 所与からの合理的再構築

カルナップは、「構成」を、「合理的再構築」(rationale Nachkonstruktion) (LAW XVII, 1928)と言いつけている。カルナップによれば、「合理的再構築」は、わたしたちが日常的な場面では直観的に獲得している認知を、「無媒介的に与えられているものに言及している概念」(Ibid.)によって、捉え直すところみである。この述べ方からすると、カルナップの言う「構成」は、認知のための原初的な「素材」としての「所与」(LAW 3, 1928)にまで立ち返りながら、それを概念的に操作して、わたしたちが手に入れている認知を組み立てなおそうとするところみである。たとえば、わたしたちの目の前に鐘があり、その鐘が音を響かせているとしよう。そのとき、わたしたちは、その鐘の色とかたちを目で捉えながら、鐘の音を聞き取って、心地よさと寂しさが入り混じった情感を抱くかもしれない。カルナップに従えば、そのような経験はつぎのように記述できる。「当の体験は、ある鐘にかんする視覚的な知覚とある音にかんする聴覚的な知覚、ならびに、かくかくの種類の複雑な感情から成り立っている」(SP 5, 1928)。通例、この言明は、ある色合いとかある音の響きとかある情感とかがある瞬間の体験の「成分」(LAW 103, 1928)になっている、ということを申し立てている。言い換えれば、当の言明は、つぎのような見解を言い表している。すなわち、「感覚の質」(Sinnesqualität)(LAW 102, 1928)は、体験をかたちづくるためにあらかじめ与えられている「心理的な原子」(psychisches Atom)(LAW 92, 1928)である、と。

なるほど、すでに見たように、主観であるわたしたちにとっては、感覚的な情報は、一見したところでは、わたしたちのこころのなかで直接的に生起しているように思える。それゆえ、わたしたちがまず知覚するのはもろもろの「感覚の質」であり、体験の認知はその後に引き続く、という進みゆきは、たしかに、わたしたちの認知の進行にかんする自然な理解ではある。これにたいして、カルナップが『世界の論理的構築』で提起しているのは、「体験そのもの」(LAW 103, 1928)から「さまざまな感覚の質を構成する」(LAW 102, 1928)という考え方である。別言すれば、わたしたちの意識は、原初的には「混沌」⁷とした「体験の流れ」(LAW 90, 1928)のなかにあり、わたしたちは、そうした一連の体験を素材にしながら、もろもろの感覚を獲得している。すなわち、カルナップにあっては、意識的過程の全体である「体験そのもの」が個別的な感覚よりも認知の対象として先行している。この順序はわたしたちの一般的な理解とは逆である。なぜ、カルナップは、こうした経験的認知にかんして常識とは異なる見方を打ち出さなければならなかったのであろうか。

カルナップはこう語る。「心理学(この場合、とりわけゲシュタルト心理学)がわたしたちに教えているのは、全体の知覚がそれを「作りあげている」個別的な感覚に先立って体験される、ということである」(SP 6, 1928)。この言説から分かるように、カルナップは、意識の出来事全体である体験がさまざまな「感覚の質」よりも認知的に優先すると考えており、この知見は、心理学のある特定の理論に依拠している。しかも、カルナップによれば、「ゲシュタルト理論」は、「最近の心理学的な探究をとおして、ますますいっそう立証されている」(LAW 93, 1928)。このように、カルナップは、わたしたちの認知の基礎を全体的な体験に置くという考えを、心理学のゲシュタルト理論から引きだしている。それだけではない。カルナップはつぎのようにも述べている。「どのような認識論的な考え方であっても」(LAW 103, 1928)、体験を「基礎的な要素として選択することには、なんの妨げもない」(*Ibid.*)。それゆえ、カルナップに従えば、わたしたちは、わたしたちが採用する認識論的な枠組みに関係なく、意識的推移としての体験から、多様な「感覚の質」が産生する、という見方を主張できる。だから、「認知にかんする唯一の素材は、未加工の体験的な所与である」(LAW 105, 1928)と立言する「実証主義」の立場も、カルナップが提示している「ゲシュタルト理論」と齟齬を来さない。とはいえ、認知にかんして主観的な基礎を強調する「実証主義」にたいしては、つぎのような問いが持ち上がってくる。すなわち、どのようにして、「個人的な体験の流れ」から出発しながら「客観的なもの」に到達できるのか (LAW 90, 1928)、と。

カルナップも認めているように、「体験の流れ」は、それぞれの主観で「完全に異なっている」(*Ibid.*)。わたしたちの感覚がそのような私秘的な体験からできあがっているのであれば、わたしたちが「赤」とか「ドの音」とかといったことばで指し示しているのは、結局のところ、他の主観とは比較できない個人的な体験である。それゆえ、わたしたちは、「感覚の質」について具体的に言及している言明にかんして、合意に到達できないはずである。しかしながら、第2節ですでに確認したように、「経験的な領域では、合意が支配的である」(SP 35, 1928)。したがって、認知の出発点が「もろもろの体験の内容とそれらの編み合わせにあるにもかかわらず」(LAW 3, 1928)、わたしたちは、「概念的に把握でき、しかも、あらゆる主観にとって同一であるような、相互主観的な世界、言い換えれば、客観的な世界に到達」(*Ibid.*)できるのである。

とはいっても、「実証主義」にせよ「ゲシュタルト理論」にせよ、認知の源泉を私秘的な体験に求める考え方に対しては、やはり、こう尋ねざるをえない。なぜ、個人的な体

験から「相互主観的な世界」あるいは「客観的な世界」が現れるのか。というのも、「実証主義」と「ゲシュタルト理論」に従って、わたしたちの認知のための所与がわたしたちそれぞれの体験であるとすれば、わたしたちの認知的な営為は、「みずからの心理的」な過程にほかならないからである。

うえで見たように、カルナップは、わたしたちの認知の基礎である「体験の流れ」を「混沌」と言い表している。この述定を踏まえれば、「体験の流れ」のなかでは、たとえば、「ある視覚的な知覚と、それと同時にある、ある聴覚的な知覚」（LAW 92, 1928）は、元来、互いに入り交じっており、判然と区別できない。もろもろの「感覚の質」は、それぞれの瞬間の体験のなかに混和して溶け込んでしまっている。カルナップは、わたしたちの体験のこのような有り様を「分割できない統一」（LAW 103, 1928）として捕捉しようとしている。すなわち、諸感覚は、体験のなかでは、混ざり合って一体となっており、個別的な感覚には分離していない。この理解に立てば、わたしたちは、現在の体験それ自体からは、それがどのような具体的な感覚を含んでいるのかまったく知ることはできない。しかしながら、現実には、わたしたちは、ある瞬間の体験をさまざまな「感覚の質」からなる複合体として認知できている。それでは、なぜ、そのような感覚的な知覚が成立できるのであろうか。

カルナップによれば、物理的な刺激がわたしたちの感覚器官に入ってくると、「体験の流れ」のなかから、現在の体験が立ち現れながら、その体験に酷似している「一瞬前の体験」（LAW 110, 1928）が再び起こってきたり、当該の体験とよく似ている「すでに消え去った諸体験」（*Ibid.*）が甦ってきたりする。言い換えれば、わたしたちは、外界からの刺激を端緒に、「体験の流れ」のなかから、「類似性の想起」（Ähnlichkeitserinnerung）（LAW 112, 1928）をとおして、いまの体験とよく似た体験を記憶のなかから思い出している。このように考えると、わたしたちの意識に現われているいまの体験は、単離した一つの体験であるのではなく、むしろ、それと類似している従前のさまざまな体験に連なりながら生起している。

カルナップに倣って、これら一連の体験を「基本的体験」（Elementarerlebnis）（LAW 110, 1928）と呼称すれば、うえの考察から見て取れるように、「体験の流れ」のなかの一定の「位置」にある現在の「基本的体験」と、その同じ流れのなかでべつのもろもろの「位置」を占めている過去の「基本的体験」とのあいだには、「部分的な類似性という関係」（LAW 112, 1928）がある。しかし、それだけではない。カルナップによれば、それに加

えて、わたしたちは、従前のもろもろの「基本的体験」のなかにも「互いに部分的に類似している」(*Ibid.*)組を認める。すなわち、類似性は、「体験の流れ」のなかで、いまの体験と過ぎ去った一定の体験とを相関させながら、後者の記憶的な体験どうしも結び付けている。その結果、ある過去の体験は、現在の体験とともに、べつの過去の諸体験とつぎつぎに相互的な類似性をとおして繋がっていき、ひとつにまとまっていく。

カルナップは、このようにして「基本的体験」から生じてきた「類似性の円」(*Ähnlichkeitkreise*)(LAW 112, 1928)として特徴づけている。「類似性の円」では、「どの二つの基本的体験も互いに部分的に類似している」(*Ibid.*)。別言すれば、当の集合の成員となっているすべての「基本的体験」には相互的な「部分的類似性」(*Teilähnlichkeit*)(LAW 100, 1928)が成立している。「類似性の円」のこの特質に鑑みれば、その集合は、「その要素、だから、基本的体験がもつ共通性を表示している」(LAW 153, 1928)。カルナップは、このような共通性を「もろもろの感覚的な領域」にある具体的な質として同定している(LAW 108, 1928)。しかも、カルナップにあっては、「どのような感覚の質も、それが成分として生起するもろもろの基本的体験がもつ共通の特質として生み出されなければならない」(LAW 107, 1928)。だから、わたしたちは、「基本的体験」から作成した「類似性の円」という集合から、具体的な感覚を看取している。すなわち、過去の諸体験が互いに似かよっているという事態の感知がわたしたちの感覚的な知覚を引き起こしている。

おわりに

本章では、「意味」にかんするカルナップの理解から、カルナップの言う「構成」が観念論の教説ではないと論証して、認知を「構成」として捉える発想の土台に心理学の理説があることを示した。

第1節の考察に従って言えば、カルナップは、「事態の表象」という知覚的な情報を言明の「意味」として特定している。だから、カルナップの枠組みでは、わたしたちが経験可能な領域にかんしてなにごとかを主張する言明が「有意味」であり、そうではない言明、たとえば、観念論とか実在論とかは「無意味」となる。このような考え方に則っているから、カルナップは、第4節で確認したように、わたしたちの認知にかんする「構成」を体験という所与からの「合理的再構築」と言い換えているのである。しかし、だからといって、カルナップは、クワインが唱道しているような、経験を個人的な圏域と定位して、そ

れの私秘的な確実性を強調する見方を採っていない。むしろ、カルナップにあっては、経験は、異なる主観どうしがたがいに一致できる領野である。したがって、カルナップがある言明を「有意味」であるとして際立たせているとき、カルナップは、その述べ方によって、当の言明の妥当性をわたしたちは同じように評価できるという一律性を強調している。「意味」にかんするこのような把握を踏まえれば、観念論と実在論は「無意味」であるとか両者の論争は「不毛」であるとかというカルナップの主張の真意は、つぎのところにある。すなわち、観念論にせよ実在論にせよ、第1節で露わにしたように、当の提題の内実は発話者に固有の特定の情感にすぎないので、それらは、妥当性にかんしてわたしたちが一致に至るだけの「相互主観性」を備えていない。実際、カルナップは、いわゆる形而上学者に対してつぎのように述べている。すなわち、かれらは「論証によって自分の言明を弁護し、その内容に対する同意を要求」(ÜM 107, 1932)できると思い込んでいるけれども、それは不可能である。というのも、形而上学は、経験科学から離れて「事物の本質について」(*Ibid.*)探ろうとするので、わたしたちの経験、すなわち、「相互主観的」な領域から離れていってしまうからである、と。

なりほど、二人の地理学者の事例にあったように、わたしたちは、知覚的な水準では、一見したところでは、合意を形成できているかのように思える。とはいうものの、わたしたちが知覚している経験、カルナップのことばを借りれば、「事態の表象」は、それぞれの主観にとっては、やはり、「みずからの心理的なもの」にほかならない。すると、つぎのように考えるのが自然であるように思える。わたしたちの「事態の表象」は、おののに固有の心理的な出来事として、私秘的で、ほかの主観の「事態の表象」とは比べられない独自の表象である、と。すると、カルナップが際立たせている、わたしたちがほかのひとと同じ事物を観察でき、同じように感覚的な情報を受け取れるという「相互主観的」な状況は、いったい、どのようにして成立しているのでしょうか。

¹ Greg Frost Arnold. "The Large Scale Structure of Logical Empiricism: Unity of Science and the Elimination of Metaphysics." 2005. *Philosophy of Science*. Vol.72, No. 5. 2005. p. 826.

² Gottfried Gabriel. "Carnap and Frage." *The Cambridge Companion to Carnap*. Eds. Michael Friedman and Richard Creath. Cambridge: Cambridge University Press, 2007. p. 70.

³ Rudolf Carnap. "Überwindung der Metaphysik durch logische Analyse der Sprach." 1932. *Scheinprobleme in der Philosophie und andere metaphysikkritische*

Schriften. Hrsg. Thomas Mormann. Hamburg: Felix Meiner, 2004. 本論文からの引用と参照にかんしては、本論文を ÜM と略記し、該当箇所の頁数を示して、出版年(1932)を併記する。

- ⁴ Rudolf Carnap. “Die alte und neue Logik.” 1930. *Scheinprobleme in der Philosophie und andere metaphysikklitische Schriften*. Hrsg. Thomas Mormann. Hamburg: Felix Meiner, 2004. 本論文からの引用と参照にかんしては、本論文を AN と略記し、該当箇所の頁数を示して、出版年(1930)を併記する。
- ⁵ Rudolf Carnap. “Intellectual Autobiography.” *The Philosophy of Rudolf Carnap*. Ed. Paul Arthur Schilpp. La Salle: Open Court, 1963. p. 50.
- ⁶ Bertrand Russell. *Our knowledge of the External World as a Field for Scientific Method in Philosophy*. 5th edition. London: George Allen and Unwin, 1961. 本著作からの引用と参照にかんしては、本著作を OE と略記し、該当箇所の頁数を示して、出版年(1914)を併記する。
- ⁷ Rudolf Carnap. “Dreidimensionalität des Raumes und Kausalität. Eine Untersuchung über den logischen Zusammenhang zweiter Funktionen.” *Annalen der Philosophie und philosophischen Kritik*. Bd.4, H.3. 1924. S. 108.

第2章 認知にかんする関係的把握

はじめに

本章の目的は、カルナップの主著『世界の論理的構築』に照準を絞って、わたしたちの認知の基底にある関係的な局面を露わにするところにある。

カルナップが『世界の論理的構築』のなかで取り組んでいるのは、「どのようにして、認知は、ある対象からべつの対象に到達するのか」(LAW 250, 1928)という課題である。カルナップは、この問いを、わたしたちがある音をドミソの三和音として聞き分けている場面为例にとりながら究明している(LAW 98-99, 1928)。すなわち、いったいどのような仕方で、わたしたちは、耳に入ってきたその音をそのように聞き取っているのだろうか。

この問いに応答するために避けて通れないのは、わたしたちの認知の出発点をどこに置くのか、という問題である。カルナップが『世界の論理的構築』を著した20世紀初頭で主流であったのは、その出発点を「もっとも単純な感覚的知覚」(LAW 91, 1928)に求める見方である。すなわち、その枠組みに従えば、聞こえている音をドミソの三和音として判別しているとき、そのとき、わたしたちがなによりもまず受け取っているのは、当の音に含まれているドの音とかミの音とかソの音とかといった、個別的な聴覚的情報である。しかし、カルナップは、そうした「心理的な原子」(LAW 92, 1928)が「認知的に副次的なもの」(LAW 91, 1928)であると主張している。言い換えれば、カルナップにあっては、もろもろの感覚的な与件は、わたしたちに「無媒介的に与えられている」(LAW 131, 1928)わけではない。

カルナップがこのような見解に至った背景には、かれが『世界の論理的構築』を執筆していた頃のウィーンで醸成された一定の態度がある(LAW XV, 1928)。カルナップも触れているように、その態度は、当時のウィーンに興った「建築術」の動向によく表れている(*Ibid.*)。すなわち、その動向は、オーストリアの著名な建築家であるロース(Adolf Loos, 1870-1933)を嚆矢とする、モダニズム建築である。

ロースの建築の革新性は、非装飾性にある。たとえば、かれが 1911 年にウィーンの皇帝宮殿の真向かいに建てたロースハウスは、壮麗なドーム状の入り口を誇っている皇帝宮殿とは対照的に、ひさしにさえ装飾がなく、その簡素さは、古い町並みを破壊したかどでロースが誹謗を受けたほどである

¹。20 世紀初頭のウィーン文化の消息に詳しいジャニクは、このような徹底して非装飾的な建物を作り上げたロースの意図を、つぎのように説明している。すなわち、「実用品を設計する原理は、純粹に事実的で、それが果たすことになる機能によって決定されているべきである」²、と。この説明に従えば、ロースが始めたモダニズム建築を貫いているのは、建築をわたしたちの居住にかんする実際の有り様に調和させようとする態度である。逆に言えば、ロースをはじめとしたモダニストが洞察したのは、皇帝宮殿のような過剰な装飾が 20 世紀に生きるひとびとの暮らしに即していない、という事実である。

カルナップ自身が表明しているように、『世界の論理的構築』は、モダニズム建築に徹底しているこうした態度と「内的な親近性」(LAW XV, 1928)がある。すなわち、カルナップがさまざまな感覚的な与件を所与に位置づけながら認知の進み行きを説明しようとするやり方に反対しているのは、その図式がわたしたちの認知の実情に合致していないからである。実際、カルナップはこう主張する。「いわゆるもろもろの個別的な感覚が抽象をとおしてようやく獲得されるということ」(LAW 92, 1928)は、「最近の心理学的な探査によってますますいっそう立証されている」(LAW 93, 1928)。とはいえ、わたしたちの認知の端緒がもろもろの感覚的な情報の受容にはないとしたら、認知は、いったいどのようにして始まるのであろうか。

そこで、本章では、まず、カルナップの言説に則りながら、わたしたちの知覚の働きを探査する。その探査をとおして明らかになるのは、知覚の能動的な局面である。つぎに、その結果を踏まえながら、わたしたちの認知にかんする原初的な所与を特定して、知覚の能動性を關係的視座から把捉する。さいごに、この枠組みにたいして持ち上がってくる反論への応答をとおして、わたしたちの認知の実相に迫りたい。

第1節 体験的な所与

カルナップは、ある認知的な対象から出発してあらたな認知的な対象を「構成」するための一般的な定式を「構成的定義」と名づけている(LAW 47, 1928)。カルナップによれば、そうした対象を規定しているのは命題関数であり、「構成的定義」のなかでは、一方の命題関数と他方の命題関数とは同じ外延であるという結びつきで定義的に接合している(*Ibid.*)。たとえば、「 x は素数である」という命題関数と「 x は自然数であり、かつ、1 と x だけを約数としてもつ」という複合的な命題関数は、「構成的定義」のかたちで接続できる(*Ibid.*)。というのは、それら二つの命題関数は外延が一致しているからである。このように「構成」した素数をこんどは「構成的定義」の定義項とすれば、同じようにしてほかの概念も「構成」でき、この手順を繰り返し適用することで、段階的に「構成体系」を作り上げていける。

しかし、どのように「構成体系」を構築するにせよ、当該の体系にたどり着くには、その土台である「基底的对象」が要る。カルナップは、「基底的对象」として、認識主観が「体験の流れ」のなかで「類似性の想起」をとおして掴みとっている「基本的体験」を指定している。すなわち、カルナップに従えば、認知は、想起した表象と部分的に類似している体験から始まる(LAW 110, 1928)。この「基底的对象」は、認識主観の私秘的な体験に現れているから、カルナップの「構成体系」は、「みずからの心理的」な基礎を備えていると言える。

クワインは、なぜカルナップがこのような基礎を選択したのか、その意図をつぎのように解説している。すなわち、カルナップは、科学を無媒介的な経験にかんすることばに還元するという経験主義的な企てを遂行しようとしている³、と。たしかに、カルナップによれば、ある対象からべつの対象を「構成」できるときには、後者を前者に「還元」(*Zurückführung*)できるし(LAW 46, 1928)、しかも、そうした「還元」の目的は、「あらゆる概念にかんする体験的な導出」(LAW 81, 1928)にある。それゆえ、カルナップの「みずからの心理的」な体系は、世界を捉えるための科学的な概念を主観的な体験に依拠して把握しようとしている点で、フリードマンの指摘にもあるように、「現象主義的」である(C

AR 89, 1987)。だからこそ、『世界の論理的構築』は、クワインに従って、「外的世界を感覚与件に基づいた論理的構築物として説明する」(EN 18, 1969)という経験主義に帰属する哲学的企図と結びつくのである。

しかしながら、カルナップは、認知の進みゆきを、心理的な基礎からさまざまな対象に向かい、その対象を私秘的な体験にひき戻す「現象主義的」な方途だけに限定していない。すなわち、物理的な基礎から編成できる「構成体系」をとおして、「みずからの心理的な対象」を「構成」するし方もある(LAW 78, 1928)。だから、「現象主義的」な「還元」の達成だけが『世界の論理的構築』の目的地である、という理解は一面的にすぎると言わざるをえない。「構成」による「還元」というカルナップの企てをうえて述べたような古典的な経験主義の完遂として見なすという視点は、『世界の論理的構築』全体をとおしてカルナップがなにを果たそうとしているのかをかえって見えにくくしてしまう。とはいうものの、カルナップのもくろみを経験主義的な圏域に位置づけられないとしたら、わたしたちは、カルナップの「構成」をどのように理解すればよいのであろうか。

これまで見てきたように、カルナップの「構成」は、「基本的体験」という始点から科学的な概念を含めたさまざまな認知的な対象をつくりあげようとするところみである。しかも、カルナップは、そのようにしながら、認知的な対象の「基本的体験」への「還元」を図っている。カルナップがそのための方略として採用しているのは、うえて確認したように、ある認知的な対象と「基本的体験」とを命題関数を媒介にして定義的に接続するというやり方である。この方途に鑑みれば、「構成」による「還元」は、当の対象についての言明を「基本的体験」についての言明に翻訳していくところみであると言える。カルナップは、そのような手続きにかんしてつぎのように述べている。すなわち、当の翻訳は、その「構成」の標的になっている対象についての言明に「検証可能」な意味を与える(LAW 253, 1928)、と。だから、カルナップ研究者のツェーも指摘しているように、カルナップの「構成」は、ある認知的な対象についての「経験的な検査」を保証するためのところみである(JCC 681, 2003)。すなわち、ある認知的な対象の「構成」は、ある「構成体系」を支配している翻訳の規則に準拠して、当の対象とほかの諸対象とのあいだにある経験的な関係を

確定し (JCC 680, 2003)、そのようにして、くだんの対象にかんする言明は、「検証可能」な意味を獲得する。ツールの読解では、『世界の論理的構築』の要点は、このような仕方与えられる「検証可能」な意味が「構成体系」の組み立て方に「相対的である」 (JCC 686, 2003)というところにある。だから、「検証可能」な意味が具体的になにであるのかは、「構成体系」の成りたちに依拠してようやく定まる。

ツールの捉え方からすれば、カルナップは、わたしたちがさまざまな仕方で行える経験的な検査の可能性を「構成体系」という枠組みのなかで担保しながら、その検査の手順をひとつひとつの「構成」の手続きとして陽表化しようとしている。たしかに、ツールのこの見立ては、従来の古典的な経験主義の枠組みに囚われない仕方「構成」による「還元」のねらいを掬い取ろうとしている点では、意義深い。とはいえ、ツールのように、「構成体系」の相対性を前面に押し出してしまうと、なにを「構成体系」の「基底的对象」に選ぶのかという問題は、カルナップにあっては、副次的でなければならないはずである。それにもかかわらず、カルナップはこう言明している。もろもろの認知的な対象を「構成」という手続きは、「認知的な優先性」(erkenntnismäßige Primarität)(LAW 74, 1928)を表現していなければならない、と。他のあらゆる認知的な対象にたいしてわたしたちが優先して認めているのは「所与」であるので (LAW 92, 1928)、「認知的な優先性」は、原初として特定できる「所与」から他の諸対象をひとつひとつ「構成」という、「構成体系」が準拠しなければならない枠組みを指している。うえて示したように、カルナップにあっては、「所与」は、わたしたちの「基本的な体験」である。この理解は、第1章第4節の考究に基づけば、「ゲシュタルト心理学」に基づいている。だから、ここでの体験は、「統一的な全体」(LAW 98, 1928)としてのひとまとまりの体験である。カルナップは、この観点から、マッハの用いる「もっとも単純な感覚知覚」を「認知的に副次的ななににかである」 (LAW 91, 1928)と断定している。

すると、「現象主義的」な体系が採用している規則は、わたしたちが認知している対象についての言明を、主観がそれを認めるためにすでに所持している、最初の心理的な素材にかんする言明に翻訳するための枠組みであることになる。上述のように、この規則が言

明に「検証可能」な意味を付与するから、言明が「検証可能」であるという事態は、当の言明に現れている対象を「基本的体験」という、心理学的に、認知をその土台のところで支えている源泉から「構成」できることを示している。だから、「検証可能」な意味の相対性を認めようとするのであれば、「構成体系」にたいする相対性ではなく、つぎのところに力点を置かなければならない。すなわち、「検証可能」な意味の相対性は、むしろ、わたしたちが利用する心理学の妥当性と結びついており、それゆえ、「検証可能」な意味は、そのような心理学が被る改訂に伴ってしか変わらないのである。カルナップのことばを借りれば、「申し立てられている構成の土台にある事態が科学的に保持できないとき、そのとき、わたしたちは、その事態に代えて、科学のなかでそれにとって代わった事態を構成のことばで装って、当の構成体系のなかに適合させなければならない」(LAW 162, 1928)。それでは、カルナップは、このような枠組みのなかで、いったいどのようにして、わたしたちが日常的に認知している対象を「構成」するのであろうか。

たとえば、わたしたちがピアノから鳴り響いてきたある音をドミソの三和音として聞き分けている場面を考えてみよう(LAW 98-99, 1928)。カルナップも認めているように、その聞き取りは、たしかに、当人にとっては、たやすく、即座で、しかも、明証的でさえある(LAW 139, 1928)。このような実感から、わたしたちは、つぎのように考えてしまうかもしれない。すなわち、ある音がドとミとソの三つの音に分かれて聞こえるという印象は、わたしたちに「無媒介的に与えられている」(LAW 131, 1928)、と。別言すれば、一定の物理的な刺激がわたしたちの耳に入ってきたとき、わたしたちの知覚は、その刺激から音の「三分性」(LAW 98, 1928)というくだんの印象を直接的に受け取っている。とはいうものの、知覚の機能は、はたして、そのような受動的な作用に尽きるのであろうか。

カルナップは、開眼手術を受けたばかりのひとの行動について言及している(LAW 89, 1928)。カルナップに従えば、そのひとのふるまいは、手術によって視力を回復したにもかかわらず、「光学的な印象が依然として距離のように与えられていないことを示している」(Ibid.)。うえの考え方に基づけば、視力が回復したかつての盲人は、光の刺激が目に入ってくると同時に、その印象を当の距離感として知覚できなければならないはずである。しかし、この報告が明らかにしているように、感覚器官である目が光を正常に受容できるようになったとしても、距離感は、かならずしも生起しない。同じように、「ドミソの三

和音を聞いているひとであっても、そのひとが以前に一度も音楽のべつの音を聞いたことがなかったとすれば、そのひとは、当の和音を三つの部分に把握しようとはまずしないはずである」(LAW 99, 1928)。こうした事例から、わたしたちはこう立言できる。日常の認知の場面ではあたかも所与であるかのように思われているさまざまな感覚的な情報は、実際には、所与としてわたしたちに与えられていない、と。それでは、わたしたちは、いったい、どのようにして、そうした「感覚の質」に到達しているのでしょうか。

第2節 関係の記述

カルナップは、こう主張する。「音の類縁性」(LAW 98, 1928)が「知覚の特性にかんする決定に統覚的に (apperzeptiv)関わっている」(*Ibid.*)、と。カルナップに倣って、心理学的な見地で言い換えれば、わたしたちは、一定の音響的な刺激が感覚器官である耳に入ってくると、「わたしたちがすでに知っている無数の音」(*Ibid.*)のなかから、当の刺激が惹起する印象と親近的なもろもろの記憶的表象に注意を差し向けている。そうした表象は、わたしたちが通例ドの音とかミの音とかソの音とかと呼ぶ、三種類の単独の音、および、それら三つの音のなかからすくなくとも一つを備えている、二つ以上の和音である。

カルナップによれば、わたしたちは、つぎに、そのようにして選出したすべての音を、「三つの集合ドとミとソ」(*Ibid.*)にとりまとめる。すなわち、ドの集合には、単独のドの音と「ドを含む」(*Ibid.*)さまざまな和音が帰属しており、ミの集合の成員は、単独のミの音とさまざまな「ミを含む」(*Ibid.*)和音である。同じように、ソの集合をかたちづくっているのは、単独のソの音と「ソを含む」(*Ibid.*)さまざまな和音である。いま聞いている音は、これら三つの音の集まりのいずれにも所属する。だから、わたしたちは、当の音に対して、それはドの音もミの音もソの音も所持している、という特徴づけを与える。このようにして、わたしたちは、この音はドミソの三和音である、という把握に到達する。すなわち、カルナップが力説しているように、「当該の音がそれら三つの音の集合に帰属しており、このことが、その音の三分性にかんする印象を規定している」(*Ibid.*)のである。

うえの解析に則ると、聞こえてきたある音をドミソの三和音として聞き分ける過程は、つぎのように記述できる。わたしたちは、まず、その音にある点で類似しているもろもろの音を喚起して、それらの音をドの集合とミの集合とソの集合に仕分ける。耳元にあるこの音は、それら三つの集まりすべてにその要素として所属している。この事実に基づいて、わたしたちは、くだんの音をドミソの三和音として知覚する。カルナップは、こうし

た一連の手順のなかに、「関連付けと比較」という知覚の積極的な局面を見てとっている。耳に入ってきた音に親近的なもろもろの音を思い出している場面を考えてみよう。そのような想起が成立するためには、わたしたちが当の音にかんする印象と記憶のなかにある一定の音の表象とのあいだに類縁性を認めていなければならない。両者がそのような関係で結びつくのは、わたしたちが当の印象と記憶的な表象とを比べあわせて、それらがなんらかの点で一致していると気がついているからである。言い換えれば、いま聞いている音と過去に聞いた音とのあいだの「部分的な同等性」(Teilgleichheit)(LAW 101, 1928)を下敷きにして、わたしたちは、それらを親近的であると見なしている。

三つの音の集合を成形する場面では、わたしたちは、「ドを含む」とか「ミを含む」とか「ソを含む」とかといった共通性をもつように、思い起こしたもろもろの表象をそれぞれのまとまりに仕立てている。そうした共通性を浮かび上がらせているのは、わたしたちによる表象どうしの比較である。すると、そうして出来あがった音の集合のもろもろの要素のあいだには、たとえば、ドの集合にかんして言えば、ドという点での「部分的な同等性」が成立している。だから、わたしたちは、うえで述べた過去の音を想起している場面と同じように、当の同等性に基づいて、ドの集合に帰属しているすべての音をたがいに親近的な音として関連させることができる。

ドの集合の場合と同じ関連付けがミの集合とソの集合に対しても成立する。それゆえ、「音の集合全体」(LAW 98, 1928)には「相互的な音の類縁性」(*Ibid.*)が通底している。したがって、ある音が特定の集合のあらゆる成員のそれぞれと類縁的であれば、その音は当の集合の要素になれる。すでに確認したように、三つの音の集合を形成している音のそれぞれは、耳元にある音の印象と親近的な記憶的表象である。かくして、いま聞いている音は、三つの音の集合ドとミとソのそれぞれに帰属する。当の音は、ドミソの三和音としてわたしたちの耳に響いてくる。このように、たしかに、わたしたちは、もろもろの音を関連付けたり、比較したりする能動的な営みをとおして、いま聞いている音がドミソの三和音であるという認知に到達している。しかし、なぜ、カルナップは、わたしたちの知覚をこのような積極的な営みとして把握しなければならないのであろうか。

うえで述べたように、これまで目が見えていなかったひとや音楽の音を聞く機会がなかったひとは、光とか鍵盤を押し下げたときに発生する音響とかを、感覚的な情報として知覚できていない。カルナップは、こうした事態にかんして、つぎのように述べている。「知覚では、印象全体が第一義的なものであり、これに反して、感覚や個別的な感情等々は、

抽象化をすすめる分析によってようやく、生み出されるものである」(LAW 92, 1928)。カルナップによれば、わたしたちの知覚がはじめに捉える「印象全体」は、「まとまりのある統一」(*Ibid.*)という有り様をしている。逆に言えば、物理的な刺激が引き起こしている印象には、わたしたちが「感覚の質」として特定できる、どのような局面も存在していない。

このような理解に立てば、たとえば、わたしたちが聞き取っているある音は、「その感覚的な所与性に鑑みれば」(LAW 98, 1928)、「統一的な全体であり、もろもろの成素からは出来あがっていない」(*Ibid.*)。たしかに、当の音は、物理的な音響の見地から言えば、ピアノの特定の鍵盤を三つ同時に叩いて生じてきた音である。しかし、その音がわたしたちの耳に刺激として侵入してくると、その刺激が惹起する当の音にかんする印象は、ドとミとソに分節化されてはいない一つの全体という状態で、わたしたちに立ち現れてくる。すると、わたしたちは、いま聞いている音をドミソの三和音と見なすためのどんな徴表も、その音にかんする印象からは引き出せない。だから、わたしたちは、当の音を特定するための源泉を、手元にある音の印象とは異なるところに求めなければならない。

カルナップに倣って、「シュヴァルツヴァルトでもっとも高い山」と「フライブルクから東にかくかくキロメートルのところにある山」という二つの表現を対比してみよう(LAW 16, 1928)。これら二つの表現は、ともに、フェルドベルク山を指し示すためのことばである(*Ibid.*)。すなわち、前者の表現からすると、わたしたちは、シュヴァルツヴァルトにあるすべての山の高さの大小関係を調べ上げて、そのなかでもっとも大きい山をフェルドベルク山とみなせる。その一方で、後者の表現に基づけば、フライブルクを基準にして、そこから一定の方角と距離にある一つの山がフェルドベルク山である。

どちらの場合であっても、わたしたちは、フェルドベルク山が他の山々とか都市とかについて成立させている関係だけを手がかりにして、当の山の同定に至っている。この結果を敷衍して言えば、ある対象にかんする特徴づけは、「目下の対象が他の諸対象に対してもつ関係を申し立てる」(*Ibid.*)という、「関係の記述」(*Beziehungsbeschreibung*)(LAW 11, 1928)をとおして達成できる。しかも、うえの事例のなかでは、わたしたちは、フェルドベルク山の特定にあたって、その山にもっぱら内属していると思われる情報に依拠していない。すなわち、「関係の記述」の観点からある対象を突き止めるころみのなかでは、その対象に備わっている、いわゆる固有の性質にかんする知識は不要である。

第3節 関係の形式的な局面

第1節で述べたように、一つの全体としての音にかんする印象は、それ自体ではどのような情報もわたしたちには教えない。それゆえ、わたしたちは、いま耳にしている音の響きだけでは、その音がどのような音であるのかを特定できない。とはいえ、わたしたちは、当の印象について、なにも語れないわけではない。というのも、第2節で見たように、わたしたちは、「関係の記述」によって、「一つ一つの対象そのものについてはなにも言及しないままに」(LAW 11, 1928)、当該の対象を特徴づけることができるからである。この点に鑑みて、カルナップは、こう力説する。「分解できない統一についての言明」(LAW 95, 1928)を形成できるのは、「純粋な関係の記述だけである」(*Ibid.*)、と。

こうして、つぎのように述定してよい。物理的な音響的刺激だけではわたしたちは音を聞いていない。その刺激を音として認知するには、それと、わたしたちの記憶に音として残っている表象とのあいだに一定の結びつきが產生しなければならない。つまり、わたしたちは、他のもろもろの音と「相対的」(LAW 11, 1928)に定まってくる性質を当の音の徴表とみなしているのである。だから、カルナップは、こう主張する。わたしたちが通例ドミソの三和音の「部分音」(LAW 99, 1928)として認めているドは、「類縁性という関係をとおして構成された形成体」(LAW 103, 1928)である、と。

このように、「関係の記述」の見地に立てば、いま聞いている和音の特徴は、その音がわたしたちの記憶のなかにあるほかのもろもろの音とつながってはじめて際立ってくる。だから、ある音の印象をドミソの三和音として判別できているとき、その理由は、つぎのところにある。すなわち、「三つの異なる方向で、わたしたちは、当の和音から別のもろもろの音へと、詳しく言えば、音の相互的な類縁性をもつ音の集合の全体へと、進み続けることができる」(LAW 98, 1928)からである、と。

現在の体験を記憶的な音の表象に接続させたり、音の集合を形成したりするための手続きは、「関連付けと比較」である。だから、うえで述べた状況を成立させているのは、それら二つの知覚の能動的な働きである。この事実を踏まえれば、カルナップがわたしたちの知覚の積極的な局面を強調する根拠が露わになってくる。体験は、はじめから、ドの音とミの音とソの音から成り立っている、一定の複合体としてあるのではない。そうであるから、わたしたちは、「関係の記述」を下敷きにしながら、その体験を音の集合のなかにあるもろもろの音の表象に結びつけて、当の体験にかんする特徴を相対的な仕方で浮かび上がらせなければならない。

これまでの論述が明らかにしているように、わたしたちがある音にドという徴表を付与

するのは、その音がドという音の集合のなかにあるすべての音と親近的であるときである。しかも、ドの集合の要素となっているもろもろの音もたがいに親近的である。それゆえ、音の印象が一定の特徴を獲得する過程は、その印象が「音の類縁性」をとおして一定の記憶的な表象に接続しながら、同時に、そうした表象どうしも「音の類縁性」でたがいに結びついていくという、関係の連鎖的な生起である。

カルナップによれば、物理的な刺激がわたしたちの感覚器官に入ってくると、「体験の流れ」のなかから、現在の体験が立ち現れながら、その体験に酷似している「一瞬前の体験」(LAW 110, 1928)が再び起こってきたり、当該の体験とよく似ている「すでに消え去った諸体験」(*Ibid.*)が甦ってきたりする。言い換えれば、わたしたちは、外界からの刺激を端緒に、「体験の流れ」のなかから、「類似性の想起」をとおして、いまの体験とよく似た体験を記憶のなかから思い出している。体験が一定の過去の体験と「類似性の想起」をとおして繋がるためには、両者がある部分でよく似ていなければならない。言い換えれば、「類似性の想起」は、「部分的な類似性」を基礎にしてはじめて確立する。「音の類縁性」の場合も事情は同じである。たとえば、過去に聞いた音の記憶としてのもろもろの体験は、ある一定の点で互いに等しいから、互いに親近的になる。それゆえ、「音の類縁性」は、「部分的な同等性」を下敷きにしている。このように、「類似性の想起」であれ、「音の類縁性」であれ、わたしたちが諸体験を当の関係で関連させているとき、その接続のためには、体験どうしがある特定の部分ですでにつながっていなければならない。別言すれば、わたしたちは、もろもろの体験がどのような点でよく似ているのか、あるいは、同じであるのかを、具体的に分かっていなければならない。逆に言えば、ある体験は、ほかの体験とはかわりなく、類似性とか同等性とかを判定するための特徴をすでに内属させている。

ところが、「ひとまとまりの統一」としてある体験は、カルナップ自身が認めているように、「成素も、徴表も、さまざまな局面も示さない」(LAW 94, 1928)。すると、わたしたちは、ある体験がどのような点でほかの体験と近似しているのか、あるいは、合致しているのかを限定できないから、うえで述べた関係の連鎖は果たされないはずである。ここでこう問わなければならない。類似性と同等性にかんして、体験どうしの一致点をはっきりさせられないにもかかわらず、なぜ、わたしたちは両者を酷似しているとか親近的であるとかと感ぜられるのであろうか、と。

しかし、カルナップは、こう述定する。ある関係 R が「対称的であり、かつ、反射的である(だから、「類似性」(*Ähnlichkeit*)である)」(LAW 97, 1928)とき、そのとき、「 R は、

あたかも、ある成素の点での合致という意味をもっているかのようである」(*Ibid.*)、と。この言説から見てとれるように、カルナップは、「部分的な類似性」を、「反射的であり、対称的である」(LAW 152, 1928)関係として把握している。だから、わたしたちがみずからの記憶を通覧しながら、現前している体験とよく似ている表象を探り当てて、それらを「類似性の想起」で結びつけているとき、その一連の過程を支えているのは、両者のあいだにある反射性と対称性の看取である。

カルナップの洞察にあるように、対称性とか反射性とかといった関係性は、関係の方向性だけに関わる「形式的な特性」(LAW 13, 1928)である。対称性は、たとえば、ある人物がべつの人物と「同年齢」であるとき、そのとき、後者の人物は前者の人物と「同年齢」であるような、関係の双方向性である(LAW 13-14, 1928)。「同年齢」という結びつきは反射的でもある。すなわち、「同年齢」という関係は、ある人物は自分自身と「同年齢」であるという、回帰的な方向性を具備している(*Ibid.*)。それゆえ、こうした双方向性と回帰性を兼ね備えている「部分的な類似性」は、関係の成員のあいだを行き来したり、ある成員から出発してそれ自身に立ち返ったりする、二つの様態を示している。カルナップのうえの主張に基づけば、現在の体験と記憶的な表象とのあいだにこうした関係性を認められるから、わたしたちは、それらがよく似ていると感じられるのである。しかも、そのようにして現在の体験に似ているとして意識に浮かび上がってきたもろもろの表象のあいだに、ふたたび、対称性と反射性を認めれば、わたしたちは、それらどうしをたがいに類似している表象として一つにとりまとめる。すると、その集まりのなかにある諸表象は、音にかんする聴覚的な記憶として立ち現れてくる。

カルナップによれば、「部分的な同等性」は「推移的であり、対称的であり、反射的である(だから、「同等性」である)」(LAW 102, 1928)。推移性は、たとえば、A というひとが B というひとの「先祖」(LAW 13, 1928)であり、しかも、B が C というひとの「先祖」であるとき、はじめの人物 A はさいごの人物 C の「先祖」になるという、関係の一方的な遷移である。だから、わたしたちが諸体験のあいだに「部分的な同等性」を感知するのは、それらのあいだに対称性と反射性だけではなく、決まった方向でつぎつぎとある体験からべつの体験へと進んでいけるという「推移性」を認められるときである。この感知をとおして、一連の体験は、互いに親近的になり、たとえば、ドの音の集まりをかたちづくる。

かくして、ドはドミソの三和音の「成素」(LAW 98, 1928)ではないという、第2節で示

したカルナップの見解の真意は、つぎのように析出できる。すなわち、ドということばが指しているのは、体験や表象に個別的に備わっている実体的な「絶対的」(LAW 11, 1928)性質ではなく、体験と表象、あるいは、表象どうしが推移性と対称性と反射性を媒介にしながたがいに連関しているというあり方である、と。わたしたちの聴覚的な知覚の働きは、このような、「形式的」な諸関係の重合的な成立を、「部分的な類似性」とか「部分的な同等性」とかとして捕捉するところにある。だからこそ、たとえ体験が「分割不可能な統一という特性」(LAW 103, 1928)を保持していたとしても、わたしたちは、当の体験と一定の諸表象とのあいだに一致を認めて、両者を「類似性の想起」とか「音の類縁性」とかでつなぐことができるのである。

第4節 カルナップの新カント派的な企て

第3節の考察を踏まえれば、わたしたちがもろもろの音をドの音の集まりとしてまとめているとき、わたしたちは、ドという音質を実体化して、それをそれぞれの音に内属させているわけではない。あるいは、もろもろの音を単離させて、おのおのにドという音質を看取しているわけでもない。すなわち、わたしたちは、それぞれの音がドを含んでいるという個別的な把握に立脚してはいない。むしろ、わたしたちは、対称性とか反射性とか推移性とかといった「形式的」な諸関係の看取をとおして、もろもろの音を一定の「関係的な組織」(LAW 83, 1928)としてまとめあげながら、そうした音全体から「ドを含む」という共通性を浮かび上がらせているのである。第1節で例示したように、わたしたちの体験には音以外にも色をはじめとしたさまざまな感覚が生起している。うへの論述を踏まえれば、カルナップは、そうした「感覚の質」にかんする認知の成り立ちを、質の内容には立ち入らない仕方で説明しようとしている。とはいえ、そのような立場は、異なる知覚的な領域に帰属している「感覚の質」をどのようにして区別するのであろうか。

カルナップはこう主張する。「わたしたちがおよそ星々に気が付いているのならば、わたしたちは、それらを一定の位置で気が付いており、だから、そのときには、距離とか図形とか関係とかが必然的にともに与えられている」(LAW 224, 1928)。この事例が示しているように、カルナップの枠組みでは、わたしたちの意識に現われているいまの体験は、単離した一つの体験であるのではなく、むしろ、それと類似している従前のさまざまな体験に連なりながら生起している。カルナップに倣って、これら一連の体験を「基本的体験」と呼称すれば、うへの考察から見て取れるように、「体験の流れ」のなかの一定の「位置」

にある現在の「基本的体験」と、その同じ流れのなかでべつのもろもろの「位置」を占めている過去の「基本的体験」とのあいだには、「部分的な類似性という関係」(LAW 112, 1928)がある。しかし、それだけではない。カルナップによれば、それに加えて、わたしたちは、従前のもろもろの「基本的体験」のなかにも「互いに部分的に類似している」(*Ibid.*)組を認める。すなわち、類似性は、「体験の流れ」のなかで、いまの体験と過ぎ去った一定の体験とを相関させながら、後者の記憶的な体験どうしも結び付けている。その結果、ある過去の体験は、現在の体験とともに、べつの過去の諸体験とつぎつぎに相互的な類似性をとおして繋がっていき、ひとつにまとまっていく。

カルナップは、このようにして「基本的体験」から生じてきた集合を「類似性の円」として特徴づけている。「類似性の円」では、「どの二つの基本的体験も互いに部分的に類似している」(*Ibid.*)。別言すれば、当の集合の成員となっているすべての「基本的体験」には相互的な「部分的類似性」が成立している。「類似性の円」のこの特質に鑑みれば、その集合は、「その要素、だから、基本的体験がもつ共通性を表示している」(LAW 153, 1928)。カルナップは、このような共通性を「もろもろの感覚的な領域」にある具体的な質として同定している(LAW 108, 1928)。しかも、カルナップにあっては、「どのような感覚の質も、それが成分として生起するもろもろの基本的体験がもつ共通の特質として生み出されなければならない」(LAW 107, 1928)。だから、わたしたちは、「基本的体験」から作成した「類似性の円」という集合から、もろもろの具体的な感覚を看取している。すなわち、過去の諸体験が互いに似かよっているという事態の感知がわたしたちの感覚的な知覚を引き起こしている。

カルナップは、「類似性の円」を「可能なかぎり大きな集合」(LAW 96, 1928)として特徴づけている。言い換えれば、ある「類似性の円」は、一定の点でたがいによく似た体験を、わたしたちが覚えているかぎり、「体験の流れ」のなかから汲み尽くしている。カルナップによれば、ある体験が「類似性の円」のなかにその要素として入るのは、その体験が当の集合のすべての要素と「部分的な類似性」の関係にあるときである(LAW 98, 1928)。だから、カルナップの指摘にもあるように、ある「類似性の円」の外部に存在している体験のなかには、その集合のあらゆる要素のそれぞれと類似的である体験は「存在しない」(*Ibid.*)。うへの論述に従えば、わたしたちがある「基本的体験」を特定の「感覚の質」として認めるのは、その体験がある「類似性の円」の成員であるからである。逆に言えば、ある「類似性の円」の外側に位置している体験にたいしては、わたしたちは、その体験が当

該の集合が表示している「感覚の質」を所持していない、と判断できる。

このように、わたしたちは、「体験の流れ」のなかから一定の「基本的体験」をある「類似性の円」としてとりまとめながら、それらの体験にある「感覚の質」を述定する一方で、その要素にならない体験にも注意を向けて、その体験は当の質を具備していないと認める。とはいえ、当の体験は、くだんの「類似性の円」の要素にならないほかの一定の「基本的体験」とは「部分的な類似性」を取り持てる。すると、当該の体験がそのようにしてほかの諸体験と「類似性の円」をあらたにかたちづくる時、その集合の成員を占めているのは、はじめの「類似性の円」には帰属できない諸体験である。だから、わたしたちは、あらたに出来あがった第二の「類似性の円」にたいして、第一の「類似性の円」とは異なる「感覚の質」を割り当てなければならない。こうした弁別を土台にしているから、わたしたちは、当該の二つの「類似性の円」にかんして、たとえば、一方に聴覚的な知覚を指定し、他方を視覚的な知覚の領域として定めて、両者を区別できるのである。

クワインによれば、カルナップが『世界の論理的構築』で果たそうとしている企ては、「自然の真理に直接的な経験がもつ十全な権威を受ける」(EN 263, 1969)ことである。たしかに、第1節で確認したように、カルナップは、わたしたちの認知の発端である「体験の流れ」にまで遡ったうえで、その地点から、「感覚の質」にかんする認知をたどり直そうとしている。とはいえ、このころみは、クワインが述べているような体験的な所与にわたしたちの経験的な認知を基礎づけようとするものではない。もし、クワインの読解が正しければ、当の所与は、「主観的な経験のなかにある、いっそう堅固で、いっそう優先的ななものか」(EN 272, 1969)、言い換えれば、主観にとってはその生起を疑うことができないという意味合いでの、「確実性」(EN 263, 1969)とか「十全な権威」(*Ibid.*)とかを備えている、「無媒介的な経験」(*Ibid.*)でなければならないはずである。しかし、カルナップは、そのような理解を採っていない。すなわち、第1節で示したように、カルナップの枠組みでは、わたしたちの認知の出発点にある体験は、それ自体では、わたしたちにどのような感覚的な情報も伝えない。だから、カルナップにとっての体験的な所与は、ほかのさまざまな認知的な対象を「基礎づける」(*Ibid.*)ための立脚地として機能していない。むしろ、カルナップに従えば、体験は、「類似性の想起」とか「音の類縁性」とかといった関係的な概念によって「秩序づけられるもの」(LAW 223, 1928)である。カルナップが明言しているように、体験は、認知的には、関係に従属するという点で「二次的」(LAW 83, 1928)な存在者なのである。

こうして、「基本的体験」からさまざまな「感覚の質」を立ち上げるというカルナップの方途は、クワインの見立てとは異なり、わたしたちの体験の認知的な空虚性を暴きだしている。だから、第2節からこれまで示してきたように、カルナップは、知覚による認知かんして主観の働きを強調しているのである。言い換えれば、カルナップの枠組みでは、わたしたちが体験を類縁性とか同等性とかといった関係でたがいに結び合わせているから、わたしたちの意識に具体的な「感覚の質」が浮かび上がってくるのである。カルナップは、認識主観の能動的な役割をこのように強調しながら、つぎのように述べている。「超越論的な観念論、とりわけ、新カント派が正しくも強調しているのは」(LAW 105, 1928)、認知の成立のためには、わたしたちに与えられている印象とか表象とかだけでは「十分ではなく」(*Ibid.*)、「秩序の措定が付け加わらなければならない」(*Ibid.*)、と。

すでに確認したように、カルナップの枠組みでも、耳元にある体験は、それ単独では、ある特定の音としては聞こえてこない。その体験は、「音の類縁性」を媒介にして一定の諸表象と親近的になり、そうしたもろもろの表象からなる「音の集合」に帰属してはじめて、たとえば、ドミソの三和音のような、一定の種類の音になる。言い換えれば、体験とか表象とかが特定の「感覚の質」としてわたしたちの認知の対象となるためには、関係と集合という概念的な装置による秩序づけを経なければならない。だから、たしかに、新カント派による認知の理解は、カルナップの考え方と軌を一にしている。

フリードマンは、「構築における認識論」という論文のなかで、新カント派とカルナップとのあいだのこのような親和性に着目して(EA 125, 1992)、カルナップの『世界の論理的構築』を、新カント派のつぎのような問題圏から読み解こうとしている。すなわち、「どのようにして「客観的な判断」が可能であるのか」(EA 126, 1992)、と。たとえば、あるひとが目の前の対象を一瞥して、「それはがらがら蛇である」と語ったとしよう。フリードマンの指摘では、その言明が言い表している認知は、そのひとの視覚的な印象、言い換えれば、「無媒介的な感覚的与件から始まっている」(*Ibid.*)。すると、そのような与件は個人の体験であるから、「それはがらがら蛇である」という申し立ては、一見したところ、「私秘的な、主観的な感覚印象」(*Ibid.*)を立言しているにすぎないことになる。だから、当の言明の発話者以外は誰も、その内容に接近できないはずである。

ところが、わたしたちは、「それはがらがら蛇である」という主張がなにを申し立てているのかを理解して、その言明が妥当であるかどうかを決定している。別言すれば、「それはがらがら蛇である」という言明が「真であるか、あるいは、偽であるか」(*Ibid.*)の判定

は、当の言明の認知的内容が発話者自身の体験に基づいているにもかかわらず、発話者とは異なる主観であっても、同じように可能である。フリードマンによれば、その理由の解明が新カント派とカルナップの共通の課題である。すなわち、かれらのもくろみは、わたしたちの認知的な営みの端緒が主観的である一方で、その所産は客観的、あるいは、「相互主観的」とであるという認知の懸隔を架橋するところにある。

おわりに

本章では、カルナップに従って、「混沌」とした体験から具体的な諸感覚がどのように生起するのかを問い、その成立のための要諦を、関係の「形式的」な局面を捉える働きとして明らかにした。

第1節は、所与を「体験の流れ」とするカルナップの着想がゲシュタルト理論に根ざしている点を確認し、カルナップの言う体験には分節化された「感覚の質」が最初から存在しているわけではないと主張した。とはいえ、その見解に基づくと、わたしたちが日常的に知覚しているさまざまな「感覚の質」がどのようにして意識に現われてくるのか、という問題に直面せざるをえない。第2節では、その問題に応答するために、カルナップが知覚の働きをどのように捉えているのかを精査した。その過程で明らかになるのは、わたしたちが知覚している「感覚の質」が体験にかんする「関連付けと比較」からの所産である、という事実である。カルナップによれば、その営為は、類縁性とか同等性とかの感知を前提している。すると、体験をそうした関係で結びつけようと思えば、わたしたちは、体験どうしが具体的にどのような点で類似しているのか、あるいは、同じであるのかを、あらかじめ分かっているように思える。しかし、ゲシュタルト理論を採用するカルナップにあっては、体験にはそのような局面が存在していない。第3節では、その困難をカルナップがどのように解決するのを明らかにした。すなわち、わたしたちは、二つの体験のあいだに似ている点とか同じ部分とかを発見しているから、それらのあいだに類縁性とか同等性とかを認めているわけではない。むしろ、二つの体験がたがいに対称性と反射性という「形式的」な結びつきのなかでつながりあっているから、わたしたちは、それらのあいだの部分的な一致とかに気がつくのである。さいごに、これまで述べてきた枠組みのもとで、なぜ、感覚の弁別が可能であるのかを問い、その鍵を「類似性の円」の特質に求めた。

たしかに、カルナップは、『世界の論理的構築』のなかで、体験という所与からさまざ

まな認知的な対象を「構成」して、後者を前者に「還元」しようとしている。この取り組みは、一見したところでは、たとえば「感覚の質」を、私秘的な個人の体験の内容に差し戻そうとしているかのように思える。しかしながら、本章で一貫して主張してきたのは、カルナップの「還元」を体験という所与への基礎付けという見方では捉えられないという点である。むしろ、第2節と第3節で明らかにしたように、カルナップが「構成」という見地から際立たせているのはつぎの事実である。すなわち、諸体験を一定の「形式的」な関係性で結びつけるという知覚の積極的な働きをとおして、ようやく、さまざまな「感覚の質」が意識に立ち現われてくる、と。この考え方からすると、認知的には、「感覚の質」の実質は、体験のなかにすでにある一定の成素ではなく、むしろ、対称性とか反射性とかといった、体験を組織化する論理的な形式である。

¹ Adolf Loos. “Zwei Aufsätze und eine Zuschrift über das Haus auf dem Michaelerplatz.” Hrsg. Franz Glück. *Sämtliche Schriften*. Wien: Herold, 1962. S. 300.

² Allan Janik and Stephen Toulmin. *Wittgenstein's Vienna*. New York: Simon and Schuster, 1973. p. 99.

³ Willard van Orman Quine. “Two Dogmas of Empiricism.” 1951. Ed. Roger F. Gibson, Jr. *Quintessence: Basic Readings from the Philosophy of W.V. Quine*. Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press, 2008. p. 39.

第3章 相互主観性の基底

はじめに

本章の目的は、カルナップの言う「相互主観性」の基礎を「構造」(Struktur)(LAW 13, 1928)という「形式的」な秩序として析出させながら、物理学の任務を数学的な装置による「構造」の捕捉として位置づけるところにある。

第2章第1節で指摘したように、カルナップは、『世界の論理的構築』のなかでわたしたちの認知的な対象を体験から「構成」して、前者を後者に「還元」しようとしている。そのねらいにかんするひとつの理解は、世界を感覚と論理学で説明して、わたしたちが認知しているさまざまな対象をわたしたち自身の体験の内容に引き戻そうとするところみとして捉えるという見方である。しかし、これまでの考察を踏まえれば、この描像に対してこう論難できる。すなわち、「ゲシュタルト理論」を採っているカルナップにあっては、所与としての体験は、そもそも、分節化されたさまざまな成素からなる複合体というありかたをしていない。むしろ、カルナップは、「構成」をとおして、わたしたちの認知的な対象を諸体験のあいだにある「形式的」な関係性として捕捉しようとしている、と。

従来のカルナップ理解に則れば、『世界の論理的構築』は、認知的な対象を体験の内容に引き戻して、体験の確実性を認知的な対象に付与しようとしている。しかし、「構成」による「還元」をうえで述べたように捉えなおせば、そのような古典的な経験主義の枠組みのもとで『世界の論理的構築』を読解するという仕方は断念しなければならない。そこで、第2章第4節で提示したのは、フリードマンが提起している、新カント派の問題圏にカルナップを位置づけるという観点である。この見方に追随するアラン・リチャードソンは、『世界の論理的構築』を貫いている問題意識をつぎのように言い表している。すなわち、カルナップにとっての問いは、「どのようにして、わたしたちは、秘私的な感覚のなかの経験的な知識の主観的な源泉にもかかわらず、科学のなかの客観的な知識に到達するのか」¹にある、と。

リチャードソンのこの理解は、カルナップのつぎの言説を踏まえている。すなわち、「あらゆる認知の主観的な出発点がもろもろの体験の内容とそれらの編み合わせにあるにもかかわらず」(LAW 3, 1928)、依然として可能であるのは、「概念的に把握でき、しかも、あらゆる主観にとって同一であるような、相互主観的な世界、言い換えれば、客観的な世界に到達することである」(Ibid.)。だから、たしかに、リチャードソンが申し立てているよう

に、『世界の論理的構築』は、わたしたちの主観的な体験的圏域と客観的な領域とのあいだを架橋することをねらっていると言える。本章は、このような読解に基本的には準拠しながらも、カルナップが「相互主観性」として見定めているのはいったいなにであるのかを突き止めて、カルナップが『世界の論理的構築』のなかで展開している「構成」の真意に迫りたい。

そのためにまず、カルナップの事例に基づきながら、他人の心理状態にかんするわたしたちの認知がなぜ一致に至るのかを明らかにする。その過程で露わになるのは、当の認知のつぎのような一連の過程である。すなわち、カルナップに従えば、わたしたちは、まず、「世界点」の集積として他人の身体をかたちづくり、そのうえで、わたしたち自身の表象を当の身体に投射している。つぎに、この枠組みを踏まえながら、わたしたちが同じ対象を認められるという状況を「世界点」どうしの一対一対応として提示したうえで、「感覚の質」どうしの一致がどのようにして成立するのかを、カルナップの言う「構造」に着目して解き明かす。さいごに、これまでの考察から獲得した視座に立って、物理学という科学的な認知の役割を、そのような「構造」としてある「論理的な対象」を掴み取ることに求める。

第1節 他人の心理状態にかんする認知

カルナップに倣って、二人の心理学者が、A氏という人物にかんして、かれが喜んでいるのか、それとも、そのような振りをしているにすぎないのかを調べているとしよう(SP 22, 1928)。その調査の過程で、一方の心理学者のこころのなかに、「喜びの感情にかんする表象」(SP 38, 1928)が生起してきたとしよう。すると、かれは「A氏はいま喜んでいる」と確信する。これに反して、他方の心理学者は、そのような表象を経験しなかったので、A氏が喜んでいることに懐疑的である。このような想定のもとでは、第一の心理学者は、第二の心理学者に「A氏はいま喜んでいる」(SP 37, 1928)と力説しながら、その主張の論拠として、「わたしはあきらかにそのように体験したとか、わたしははっきりとそう感じたとか」(SP 22, 1928)と述べ立てるかもしれない。

とはいえ、カルナップの事例にもあるように、ベンチを観察しているわたしたちのこころのなかに、「一定の音楽の音にかんする表象」とか「ある楽しい気持ちにかんする表象」とかが、前後の脈絡なく突発的に生じもする(SP 32, 1928)。あるいは、「火の熱さを経験したことも理論的に学んだこともないひと」が生まれて初めて火を見たときであっても、

そのひとのこころのなかに「それは熱いという表象」が出し抜けに現われてくるかもしれない(SP 20, 1928)。これらの事例が示しているように、わたしたちの日常的な体験のなかでは、表象は、しばしば、それを条件づける事柄から離れてひとりで生起してくる。それゆえ、ある心理学者がA氏の顔つきからにこやかであるとか嬉しげであるとかといった印象を強く受けたとしても、そのような感じは、A氏が抱いている実際の感情とはまったく無関係に、たまたま当の心理学者のこころに現われただけかもしれない。だから、そうした印象を抛りどころにしながら、くだんの心理学者が「A氏はいま喜んでいる」といくら申し立てたところで、べつの心理学者は、その申し立てに「満足しないはずである」(SP 22, 1928)。第一の心理学者が第二の心理学者を得心させようと思えば、かれは、べつの手立てを講じなければならない。カルナップが提起している方策はこうである。すなわち、A氏がいま喜んでいると推論できる「観察された表情」を他方の心理学者に示す(*Ibid.*)。

第1章の考察を踏まえれば、わたしたちは、体験という「みずからの心理的なもの」からさまざまな認知的な対象をかたちづくっている。カルナップの考えでは、わたしたちがほかのひとのこころの状態を捉える場合であっても、事情は同じである。換言すれば、わたしたちは、体験という基礎から「ほかのひとの心理的なものにかんする構成」(LAW 186 1928)を遂行している。カルナップによれば、その「構成」は、わたしたちが「ほかのひとの身体」(*Ibid.*)に「みずからの心理的なもの」を「付与すること」(*Ibid.*)である。

目の前のひとに一定の表情を認めたとき、わたしたちは、まず、それと同じような顔つきをしていたときの感情、たとえば、怒りを思い起こしている。言い換えれば、その顔の様子は、わたしたちにとって、当の感情を「表出」(Ausdruck)(LAW 184, 1928)している。そのためには、わたしたちの記憶のなかで、それらのあいだに「表出関係」がすでに成立していなければならない。それは、たとえば、「ひとの額がかくかくのかたちをしている際には、怒りの態度が予期できる」(SP 20, 1928)という一般的な含意の形式で確立している。これが媒介となって、目の前にいるひとから読み取ったかくかくの額のかたちは、怒りにかんするわたしたちの表象に接続する。このようにして、わたしたちは、過去の記憶から喚起した「みずからの心理的なもの」に基づいて、「ほかのひとのこころ」を模っているのである。

この解析を踏まえれば、わたしたちは、ほかのひとのこころのありようをつぎのようにして推察している。まず、そのひとの表情を観察し、その結果から、すでに知っている「表出関係」を手がかりにしながら、わたしたち自身の一定の感情を喚起する。次に、この結

びつきに依拠して、特定の感情にかんするわたしたちの表象を当のひとに投影する。かくして、かれは当の感情を抱いているという判断が帰結する。「ほかのひとの心理的なもの」にかんする認知をこのように理解すると、その認知の発端は、ほかのひとの顔の様子のある視点から見て取るところにある。カルナップは、「ほかのひとの身体」を、ルークスとかがながら蛇の個体とかのような、「物理的な事物」(LAW 183, 1928)と見なしている。第1章第1節で例示したように、わたしたちが認めているそうした対象は、幾何学的な点の集積体である。それゆえ、このような捉え方に従えば、わたしたちがあるひとの顔を目で見ているときに知覚しているのは、「ある視点から見られているもろもろの世界点の集合」(LAW 170, 1928)にほかならない。しかし、なぜ、カルナップは、そのような点を導入しなければならなかったのであろうか。

カルナップに倣って、わたしたちが馴染みのある一軒の家をその家の外から眺めているとしよう (LAW 138, 1928)。なるほど、わたしたちの立ち位置からは家の全容を見とおすことはできない。それにもかかわらず、当の家は、わたしたちの意識のなかで「立体的な対象として」(*Ibid.*)立ち現れている。すなわち、そのときのわたしたちは、家をただ見ているだけではなく、記憶をもとに「知覚されていない家の背面」の様子を意識のなかで復元している(*Ibid.*)。そうしながら、わたしたちは、くだんの家を、「拡がりのある空間の切片を占めている」(LAW 23, 1928)一つの事物として再認している。これが可能となるためには、カルナップの指摘にあるように、目に入っていないところも観察にかかわらず存続している、という想定が要る (LAW 170, 1928)。その考え方は、一見したところ、家の裏側を認識主観に依存せずに存立できる実体として仮定しているように思える。

しかしながら、第1章で確認したように、カルナップにあっては、主観みずからが認知の対象を「構成」している。実際、カルナップはこう主張する。「ある事物の知覚されていない点と状態」(LAW 164, 1928)は、「構成される」(*Ibid.*)、と。カルナップによれば、その方法は「類比による付与」(LAW 179, 1928)である。すなわち、うへの事例のように、「すでに一度知覚された事物のある空間的な部分が同じ、あるいは、類似した仕方で知覚されている一方で、残りの空間的な領域が観察されないままであるとき」(LAW 180, 1928)、わたしたちは、当の視認されていない部分にたいして、過去に取得したさまざまな視覚的な表象を覚えていくかぎり同じように配分している。だから、わたしたちは、記憶を頼りに壁の色とか模様とかを視覚にはない空間に「補充」(*Ergänzung*)(*Ibid.*)して、その部分の姿有り様を主観的にかたちづくっている。このような「類比による付与」では、「ま

とまりのある一つの空間的な領域」(LAW 214, 1928)は、感覚的な情報の投射先に位置している。カルナップの「構成」的な見地からすれば、そのような空間的な拡がりも、わたしたちがかたちづくっていなければならない。

カルナップは、ある事物の見えていない表面と見えている表面のそれぞれにかんして、こう述定する。すなわち、前者は、「見ることはできるけれども、(わたしには)見られていないもろもろの世界点」(LAW 169, 1928)であり、後者は、「当該の視点から見られているもろもろの世界点」である(LAW 167, 1928)、と。これらの言説から分かるように、カルナップの理解では、平面というひとまとまりの空間は、一定の仕方でたがいに隣接しているもろもろの点の集まりである。幾何学的には、「直線」とか「平面」とかといった「もろもろの空間の形状」(räumliche Gestalten) (LAW 166, 1928)は、点どうしをどのように配列するかによって決まる。カルナップの述べているところに従えば、点の布置は「数の関係をとおして」定義できる(*Ibid.*)。すなわち、各点を、一つの「時間座標」(Zeitkoordinate)と三つの「空間座標」(Raumkoordinaten)からなる座標系の特定の位置に結びつけて (LAW 165, 1928)、それぞれの点の位置を四つ組みの数で表示すれば、そうした点の配置は、「もろもろの数のあいだの代数的な関係だけ」(LAW 166, 1928)で規定できる。というのも、たとえば、特定の時間に直線上に並んでいる点は、定まった方程式で表現できるので、そうした点の配列は、数の算術に従うからである。

このように、まとまりのある一定の空間は、カルナップの言う「世界点」にかかわる数学的な操作によって生成する。うえて見たように、わたしたちがもろもろの感覚を配分しているのは、空間的な領域である。すると、「世界点」は、そうした情報をあてがうための「基盤に用いられている」(LAW 165, 1928)ことになる。だから、「構成」的な見地からすれば、わたしたちがある事物の見えていない部分の様子を思い浮かべているとき、その認知の基礎にあるのは、当の空間的な領域をもろもろの「世界点」からなる一定の幾何学的な対象としてかたちづくる手続き、たとえば、平面の方程式である。わたしたちは、その方程式を満たす「世界点」のそれぞれにある一定の色を配分しながら、当の事物の全体像を描き出して、それを一つの「知覚的な事物」(Wahrnehmungsdinge)(LAW 179, 1928)として捕捉している。

第2節 構造

これまでの論述を踏まえて、二人の心理学者の事例を捉えなおしてみよう。一方の心理

学者が観察している A 氏の顔は、上述の考察に従えば、かれの視点から見えているもろもろの「世界点」の集まりであり、そうした点のそれぞれは、その視点を基準点とする座標系のなかで所定の「空間的な位置」(räumliche Lage) (LAW 166,1928)にある。別言すれば、一定の表情を一方の心理学者に見せている A 氏の顔は、その心理学者にとっては、幾何学的な点の集合体としてかれの「空間的時間的な世界」(Raum-Zeit-Welt)(LAW 165, 1928)のなかで特定の場所を占めている。同じように、他方の心理学者も、A 氏の顔をみずからの立ち位置から観察しなければならない。言い換えれば、この心理学者にとっても、A 氏の顔の様子は、当の心理学者に固有の「空間的時間的な世界」のなかで一定の点の配列として現われている。このように、二人の心理学者は、それぞれに異なる「空間的時間的な世界」に A 氏の顔を位置づけていることになる。それゆえ、「空間的時間的な世界」からすれば、ことによると、かれらは、同一人物の顔を見てはいないのかもしれない。

とはいえ、一方の心理学者が他方の心理学者を視界のなかに捉えているとき、他方の心理学者は、A 氏の顔と同じように、「世界点」の集積として、一方の心理学者の「空間的時間的な世界」のなかの所定の場所にある。しかも、カルナップも述べているように、「 n 次元の数の空間では、ピタゴラス的な距離の算定に基づく、ユークリッド的な測定が妥当する」(LAW 166, 1928)。言い換えれば、幾何学的な座標系としてある「空間的時間的な世界」では、その世界のなかにある任意の点にかんして、その位置が分かれば、原点から当の点までの距離を一定の方程式に基づいて算出できる。それゆえ、一方の心理学者の「空間的時間的な世界」のなかでは、二つの線分の長さを決定できる。すなわち、それらは、一つは、原点にあるその心理学者の視点と A 氏の顔とを結ぶ線分の長さであり、もう一つは、原点にある一方の心理学者の視点と他方の心理学者の視点を結ぶ線分の長さである。これら二つの線分の長さにかんする情報に加えて、それらのなす角の大きさが分かれば、余弦定理を援用して、他方の心理学者と A 氏の顔を結ぶ線分の長さが分かる。

このようにして、一方の心理学者は、自分が見ている A 氏の顔が他方の心理学者からどれくらい離れたところにあるのかを、みずからの世界に留まったまま算術的に割り出せる。言い換えれば、一方の心理学者は、こう予測できる。他方の心理学者の視点からかくかくの距離にある対象は、自分の視点からしかじかの距離にある A 氏の顔に違いない、と。したがって、このとき、他方の心理学者が、かれの見ている対象とかれとのあいだに上述の距離がある、と報告すれば、一方の心理学者は、他方の心理学者も同じ A 氏の顔を見ていると判断できる。しかも、他方の心理学者の「空間的時間的な世界」にも「ピタゴラス的

な距離の算定に基づく、ユークリッド的な測定」が成り立つとすれば、やはり、かれも、同じ仕方で距離の算定を行い、つぎのことを知る。すなわち、かれが見ている対象を、一方の心理学者は A 氏の顔であると申し立てている、と。

かくして、二人の心理学者は、それぞれの「空間的時間的な世界」がどちらも幾何学的に測量可能な領域であるとき、かれらは、同じ数学的な手続きを下敷きにしながら、それぞれもう一方の心理学者が言及している対象を、たがいに、自分がいま知覚している A 氏の顔として同定できる。別言すれば、その二人の「空間的時間的な世界」がともに均質な幾何学的な座標系であるという前提のもと、どちらの心理学者も、一定の数学的な方程式を媒介にして、もう一方がその「空間的時間的な世界」のなかで特定の場所に置いている A 氏の顔を、自分の「空間的時間的な世界」のなかにある A 氏の顔に互いに「転換できる」(übertragbar)(LAW 198, 1928)。この転移については、その逆も成立する。しかも、カルナップの想定している「空間的時間的な世界」の位置は、数学的に一意的に定まる。だから、そのような相互的な「転換」は、幾何学的な座標系のなかにある対象を「世界点」の集まりとするカルナップの枠組みからすると、異なる主観に帰属している「世界点」どうしの「一対一の割り当て」(eineindeutige Zuordnung)(LAW 195, 1928)である。

これまでの考究に基づけば、二人の心理学者が A 氏の顔という「「同じ」対象」(*Ibid.*)について語れるのは、おのおのの「目に入っている事物」が二つの幾何学的な座標のそれぞれのなかにある「世界点」として一対一に対応しているからである。すなわち、当の二人は、一律の数学的な操作に則りながら、それぞれの「空間的時間的な世界」にある「世界点」を互いに転移させあい、そうした「世界点」からなる二つの対象を、同じ A 氏の顔として互いに確認し合っている。

なるほど、うえのやり方で、たしかに、二人の心理学者は、それぞれの「世界点」を、たがいの「空間的時間的な世界」のなかで一対一に相関させられるかもしれない。とはいえ、こうした対応で果たせるのは、A 氏の顔という対象がどこにあるのかという点での合致である。第 1 節で確認したように、カルナップによれば、二人の心理学者は、A 氏の顔の表情にかんしても同意に到達できる。カルナップの枠組みでは、A 氏の顔つきをかたちづけているのは、さまざまな視覚的な情報である。だから、当の同意が成立するためには、二人の心理学者は、おのおのの「世界点」に結びついている視覚的な「感覚の質」にかんしても、一致を見なければならないはずである。

いま手もとにヨーロッパアジア間の鉄道路線図があったとしよう(LAW 17, 1928)。し

かも、その路線図は、それぞれの駅を、名前ではなく一つの点としてしか示しておらず、そればかりか、縮尺がかなりの程度で歪んでいるとしよう(*Ibid.*)。だから、わたしたちが手元の路線図でもっとも長く続いている線路を見つけたとしても、わたしたちは、その情報から、その線路を実際の最長の線路、つまり、シベリア鉄道として同定できない。カルナップは、このような悪条件にもかかわらず、手もとにある路線図と実際の鉄道網とを見比べて、路線図上にある駅の名前一つ一つを確定できるという(*Ibid.*)。

カルナップが着目しているのは、どちらの鉄道地図であれ、「隣接している停車駅という関係」(LAW 18, 1928)は同じであるという事実である。たとえば、本来の鉄道網のなかに、A という接続駅に八つの最寄り駅があったとしよう。そのとき、その地図の線路のかたちと長さが変わったとしても、駅の位置は入れ替わることはない。だから、そのような縮尺の変化は、くだんの接続駅 A が周りの八つの駅と「隣接している」という結びつきを壊しはしない。この事実に鑑みれば、つぎのように言える。すなわち、わたしたちが歪んだ路線図のなかで、たとえば、八つの隣りあう駅をもつ接続駅を見つけたとすれば、そのような接続駅は、もともとの鉄道網のなかにも存在していなければならない、と。実際、カルナップによれば、隣接する駅が八つある接続駅は、もともとの鉄道網でも確認できる。とはいえ、そうした駅は二十個存在している(LAW 17, 1928)。すると、わたしたちが手元の路線図で見つけたくだんの接続駅は、その二十の駅のどれであるのか。

カルナップによればその特定の方法はこうである。実際の鉄道網上にあるそれら二十の接続駅のそれぞれについて、その駅から分岐している八本の線路を一つ一つ辿りながら、各々の線路上に当の接続駅からつぎの接続駅までにいくつ駅があるのかを数え上げる(*Ibid.*)。すなわち、わたしたちは、特定の接続駅からべつの接続駅を目指して、その出発点からつぎつぎと隣の駅へと進みながら、そのように通過していった駅の数枚を枚挙する。別言すれば、二つの接続駅を「隣接している停車駅という関係」の連鎖的な適用によって結び付ける操作のなかで、当の数え上げは成立する。うえで見たように、駅が隣り合っているという結びつきは、実際の鉄道網のなかでも、歪んだ路線図のなかでも、等しく存立している。だから、こうした数え上げは、わたしたちの手元にある路線図でも、同じように実行できるし、数え上げの結果は、二つの鉄道地図で一致する。しかも、カルナップによれば、本来の鉄道網で行った数え上げは、わたしたちに「これら二十の点のうち、八つの数すべてで一致するのは二つとない」(*Ibid.*)ことを教える。言い換えれば、わたしたちは、そうした二十の接続駅それぞれにたいして、固有の八組の数を付与できる。したがっ

て、わたしたちが歪んだ路線図のなかで発見した接続駅にかんしても、うえで述べたのと同じ手順で数え上げを行えば、その八つ組みの数は、本来の鉄道網のなかですでに決定した 20 通りの数の組み合わせのどれかひとつと合致する。このようにして、もともとの鉄道網は駅名を表示しているから、わたしたちは、この対応に依拠して、わたしたちの路線図のなかで発見した、八つの最寄り駅をもつ接続駅の名前を確定できる。

わたしたちの「体験の流れ」も、二つの鉄道路線図のあいだで縮尺が異なっているように、それぞれの「内実はまったく違っている」(LAW 90, 1928)。しかし、カルナップはつぎのように主張する。一方の路線図にある特定の数的な組織を他方の路線図の数的な組織に対応させられるように、「一定の構造的な特性はあらゆる体験の流れで一致する」(LAW 91, 1928)、と。カルナップは、「構造」を「ある関係がもつすべての形式的な特性の総体」として規定している(LAW 13, 1928)。第 2 章第 3 節で確認したように、たとえば、「部分的な類似性」には対称性と反射性という「形式的な特性」が備わっているから、当の関係の「構造」は、対称的で、しかも、反射的でもあるという二様の関係性である。第 2 章の考究を踏まえれば、わたしたちは、一定の諸体験のあいだにそのような「構造」を捉えているから、それらのあいだに類似性を感知して、それらをひとつの集まりに取りまとめながら、ある「感覚の質」を浮かび上がらせることができる。カルナップのうえの主張に従えば、そのような仕方それぞれの体験を編成し、感覚的な知覚を成立させるための機構は、主観の違いを越えて、わたしたちに同じように備わっている。

第 3 節 「構成」の論理的な局面

第 2 節の考究をわたしたちの二人の心理学者に当てはめれば、こうである。たしかに、かれらは、それぞれの「世界点」に結びつけている「感覚の質」を、当人が直接的に感じた二つの質として比べあわせたり、合致させたりすることはできない。しかし、おのこの「感覚の質」を生成している、対称性とか反射性とか推移性とかといった「形式的」な関係性は、二人の心理学者の「体験の流れ」を一様に貫いている。だから、二人の心理学者は、それぞれの立ち位置で A 氏の表情から受け取っている視覚的な情報が「体験の流れ」からどのような関係的な「構造」をとおして生じてきたのかを明らかにすることで、そうした視覚的な「感覚の質」をたがいにやりとりできるようになる。こうして、第 1 章で提示した、わたしたちが経験的な水準で到達している合意を支えているのは、わたしたちの体験を編成している論理的な秩序にかんする同等性である。こうして、カルナップが『世

界の論理的構築』のなかで強調している「相互主観性」の内実をつぎのように析出させられる。すなわち、それは、わたしたちそれぞれの「体験の流れ」を支配している「構造」の同型性である。

カルナップのこのような立論を下支えしているのは、「ゲシュタルト理論」に由来する知見、言い換えれば、体験は「成素も、徴表も、さまざまな局面も示さない」という考えである。これに基づけば、「感覚の質」とか「知覚的な事物」とかといったわたしたちが日常的に経験している諸対象は、あらかじめ体験の成素としては存在していないことになる。そこで、カルナップはこう主張する。もろもろの体験のあいだに存立している一定の関係的な組織がわたしたちの知覚的な対象である、と。しかも、わたしたちの体験はいわば「性質が欠如している点」(LAW 95, 1928)のような存在者であるから、当の組織をかたちづくっている結びつきは、第2章第3節で示したように、対称性とか反射性とか推移性とかといった「形式的」な関係性でなければならない。したがって、わたしたちの経験のなかに生起してくる諸対象の実相は、そうした関係的な「構造」であり、その「構造」が同じであるからこそ、経験の水準で同意を固められるのである。こうして、カルナップの「構成」による「還元」は、わたしたちの諸体験をとりまとめているこうした「構造」を露わにしながら、経験的に確認できる「相互主観性」の理論的な基礎を特定しようともくろんでいる。

カルナップはこう語る。わたしたちが「相互主観的に妥当する言明」(LAW 90, 1928)を獲得できるのは、「科学的な認知」(*Ibid.*)のなかである、と。カルナップは、科学的な認知の典型を物理学と見なしているから(LAW 20, 1928)、この言説に従えば、わたしたちの経験に「相互主観性」を付与している関係的な秩序の探査は、物理学の任務である。逆に言えば、日常的な知覚的認知に留まっても、そのような「構造」には到達できないことになる。しかし、なぜ、わたしたちの知覚ではわたしたちの経験の実相に迫ることができないのであろうか。カルナップは、物理学的な認知と知覚的な認知とのあいだにいったいどのような違を見てとっているのであろうか。

カルナップによれば、物理学の基礎にある、時間と空間にかんする規定は、どちらも、抽象的な幾何学的な枠組みを備えている。すなわち、空間的な測定の基準である剛体は、わたしたちの身の回りにある物体ではなく、「一組の物理学的な点のあいだの間隔」(AP 91, 1923)²であり、時間のための尺度は「二つの物理学的な点の接触」(AP 92, 1923)である。しかも、感覚にかかわることばで物理学を語るという「単純ではあるけれども、不精確な

言語使用」(AP 99, 1923)を中止すれば、自然法則は、「数学的に把握可能な法則」(LAW 180, 1928)になる。この視点に立って、カルナップは、さまざまな物理学の枠組みを「公理的な体系」(AP 97, 1923)として特徴づけている。すなわち、物理学は、たとえば、ユークリッド幾何学とかニュートンの運動法則とかマクスウェルの基礎方程式とかを一群の「公理」(*Ibid.*)と位置づけて、そこから、「好きなだけ多くの命題を純粹に論理的に導出する」(*Ibid.*)。つまり、カルナップは、物理学の領野を「純粹な数の世界」(LAW 181, 1928)として描き出そうとしているのである。

物理学をこのように数学化すると、たとえば、「血液は赤い」という一般的な言明は、マクスウェルの第二基礎方程式という特定の微分方程式で定式化できる。すなわち、この方程式に従って、血液がある一定の時間と場所を占めているという事態を電場にかんする一定の空間的配分に置きかえ、それを時間で微分すると、磁場にかんする一定の変化の速度、別言すれば、サイン波として伝わる、この磁場の特定の波長を、赤い光として算出できる。「血液は赤い」をこのような仕方でひとたび定式化してしまえば、任意の時点と場所にある当該の血液にかんして、電場の配分をある具体的な数値としてマクスウェルの方程式に入力すれば、その血液が備える赤さを数値で出力できる。しかも、ある量が決めれば、それに対応して、別の量が確定するとき、後者は、前者の関数である。「血液は赤い」という一般的な言明は、論理的には、ある対象が血液であるとき、そのとき、それは赤い、という含意的な関係を申し立てている。それゆえ、「血液は赤い」は、物理学的には、ある「物理的状态量」(*physikalische Zustandsgrößen*)(LAW 180, 1928)にはその微分量としてべつの特定の「物理的状态量」が相関しているという、数学的な関数的連関を立言している。このように、物理学のなかでは、自然法則は、もろもろの「物理的状态量」のあいだで成立している「関数的依存性」(*funktionale Abhängigkeit*)(LAW 229, 1928)を記述している。

カルナップが洞察しているように、ある「物理的状态量」から「その状態量にかんする極限值」(*Ibid.*)としてべつの「物理的状态量」を導き出せるとき、その導出は、「厳密で例外のない」(LAW 230, 1928)含意的関係に従っている。ある数にかんして、その数を微分すれば、それがどの数になるのかは、一意的に決まる。だから、ある「世界点」とその近傍にある「世界点」のそれぞれに自然法則をとおして「物理的状态量」を付与していけば、「一貫した合法則性」(LAW 175, 1928)が行きわたっていく。前章の第4節で証示したように、わたしたちは、たがいの「世界点」を一対一に対応させることができる。すると、

つぎのように言える。ある主観が一定の自然法則に則って「世界点」に「物理的状態量」を配分しているとき、わたしたちがその主観と同じ自然法則を携えているとすれば、わたしたちは、当の「世界点」に対応しているそれぞれの「世界点」に対して、当の自然法則がもつ関数的連関を堅持するように、状態量を布置できなければならない、と。別言すれば、物理学的な自然法則は、「物理的状態量」を「世界点」に付与する仕方を、ある特定の主観の世界のなかだけではなく、ほかのあらゆる主観の世界それぞれのなかで、一律に規定している。

その一方で、カルナップの洞察にもあるように、わたしたちは、たとえ同じ事物を観察していたとしても、場合によっては、それぞれで違った反応をする(LAW 177, 1928)。たとえば、わたしたちがある手紙を読んでころを痛めたとしても、ほかのひとはそのように感じないかもしれない(*Ibid.*)。目の前の樹木を捉えるときも、わたしたちはそれをただの木であるとみなせもするけれども、その樹木がふさぎこんでいると理解するひともいる(*Ibid.*)。こうした事例が示しているように、わたしたちが一定の「知覚的な事物」にどのような感情を割り当てるのか、すなわち、「表出関係」の内実は、わたしたちのあいだではかならずしも一致していない。だから、わたしたちの二人の心理学者の場合でも、かれらは、A氏の顔つきにかんしては一致をみるかもしれないけれども、その顔の様子に対して、ともに「喜び」の感情を投げかけられるとはかぎらない。

第4節 物理学の任務

しかも、カルナップによれば、そうした不一致は、程度の差こそあるものの、色とか音とかといった「感覚の質」にかんする配分でも生じている(LAW 178, 1928)。すなわち、「世界点」にどのような質を割り振るべきかを厳格に定める規則は、わたしたちの日常的な認知の過程のなかには存在していないか、すくなくとも、そのような規則の発見は困難である(LAW 181, 1928)。だから、カルナップが喝破しているように、「このような感覚的な領域に所属しているもろもろの質にかんする割りあては、主観ごとで異なっており、それゆえ、一義的で矛盾のないし方では貫徹できない」(LAW 178, 1928)。

第3節で見たように、物理学が数学的に固めた自然法則には、「ほかのもろもろの主観にも通用する妥当性」(LAW 90, 1928)がある。しかし、これに反して、事物の外形的な様子に一定の感情を繋いでいる「表出関係」をはじめとした、知覚的な領域のなかで存立している法則性は、わたしたちがどのような経験を積んできたかに応じて、それぞれ異なっ

ている(LAW 180, 1928)。カルナップは、この違いに鑑みて、つぎのように唱道する。わたしたちの知覚的な認知的営為は、「認識の進展のなかで、厳密で一意的な、しかも、まったく質のない物理学的な世界に場所を譲らなければならない」(LAW 178, 1928)、と。だから、わたしたちは、日常的な認知のなかでもろもろの「感覚の質」のあいだに看取している諸法則を、一意的な「関数的依存性」を備えている数量的な自然法則として語り直さなければならない。それでは、わたしたちは、そのような自然法則を、いったい、どのようにして獲得しているのでしょうか。

カルナップは、つぎのように語っている。「「知覚的な世界」の助けを借りて「物理学的な世界」を構成する」(LAW 132, 1928)、と。カルナップによれば、「知覚的な世界」(Wahrnehmungswelt)(LAW 179, 1928)は、「感覚の質の個々の世界点への付与を伴った空間的時間的な世界の全体」(*Ibid.*)であり、その一方の「物理学的な世界」は、当のそうした「世界点」に「もっぱら数だけを、すなわち、物理的状态量を付与することによって」(LAW 180, 1928)出来上がる。カルナップのこうした言説を踏まえれば、自然法則で以て幾何学的な座標系のなかの「世界点」につぎつぎと「物理的状态量」を配分していく手続きは、その端緒に、第1章で詳述した、そうした「世界点」のそれぞれに「感覚の質」を与えていく過程を置いている。別言すれば、わたしたちは、まず、一定の時間と場所で生起した一連の出来事を知覚し、それから、その同じ時間と場所に、たがいに関数的な関係にある数の系列を付加して、経験した事象の生起を一定の「(純粋な数の)構造」(LAW 182, 1928)から説明しようとしている。この理解に従えば、わたしたちは、手元にある経験に適合する微分方程式を探り出して、自然法則を手に入れている。だからこそ、カルナップは、一般的な法則の発見とかそれに基づく個別的事例の包摂的説明とかといった知識の拡張を、物理学的な探究の本分として位置づけているのである(LAW 81, 1928)。ところが、カルナップはこう主張する。わたしたちは、一定の「感覚の質」を投射したもろもろの「世界点」にどのような「単一の状態量の構造」(LAW 182, 1928)を結びつけるべきかを、一意的には決定できない(*Ibid.*)、と。たとえば、わたしたちは、物理学の力学的な知見に則り、ある時間とある場所で感じた一定の温かさを、その時間とその場所のなかにある一群の分子がもつ「一定の平均運動エネルギー」(AP 100, 1923)として言表できはする。

しかし、そうした分子全体がその平均運動エネルギーを備えている有り様は、それぞれの分子がどれくらいの量とどの方向で動くのかにかんしてさまざまな可能性があるので、無数に存在する。しかも、カルナップに従えば、わたしたちは、そうした運動の様子の一

一つ一つを特定の微分方程式で定式化して、それぞれの運動に固有の「速度分布」(AP 100, 1923)を記述できる。それらの「速度分布」は、分子の運動がもつ「量と方向の点で」(*Ibid.*)たがいに異なっているけれども、くだんの「平均的運動エネルギー」と「同じ平均値を産生する」(*Ibid.*)。だから、わたしたちは、「同じある温かさの感覚」(*Ibid.*)に、さまざまな数的な「構造」を相関させられる。このように、一定の「感覚の質」に対応するのは、カルナップが主張しているように、「単一の状態量の構造」ではなく、むしろ、「その構造が帰属するある集合」(LAW 182, 1928)にほかならない。

すると、経験的に認知した事象の継起を記述するために最適な自然法則を見つけ出すという課題には、あらかじめ決まった答えがないことになる。そこで、カルナップは、つぎのような方略を提案する。すなわち、わたしたちの「知覚的な世界」に現れる事象にあわせて自然法則を絞りこんでいく過程を、「方法論的な原理」(LAW 181, 1928)に委ねるのである。換言すれば、わたしたちは、可能なかぎり単純さを追求しながら、事象を説明するのにさしあたって都合がよいと思われる自然法則を選び、次に続く探究のなかでその選択の妥当性を確かめていく(*Ibid.*)。

このときにわたしたちが取り組んでいるのは、「もっとも単純であることの要求」という手引きのもとで、わたしたちの見知っている事態をうまく説明できる一定の微分方程式を暫定的に選び出し、それを使って「知覚的な世界」を数学的に秩序づけるという企てである。すなわち、この処置によって、わたしたちは、「知覚的な事物」のふるまいを関数的な連関のなかで記述し、「知覚的な世界」を「純粋な数の世界」として記述しようとしている。こうして、わたしたちは、二つの世界のあいだの結びつきを実際的な手引きで固めながら、前者で生起している知覚的な事象と後者の数のふるまいとのあいだに、いわば「辞書」(AP 99, 1923)的な対応関係をつくる。その結果、たとえば、「任意の時点と場所で、ある周波数によって表示できる電子の運動が生起している」という文は、「任意の時点と場所で、ある青色が生起している」にいつでも変換できるようになる。このように、わたしたちは、「知覚的な世界」を理解するにあたって、完全には整合的ではない経験的な方途に代えて、数学的な「一意的合法則性」を備えている物理学的な言明の助けを借りながら、「知覚的な世界」の実相を捕捉しようとしている。

「物理学的世界」では、「世界点」の「物理学的状态量」にかんする決定は、すでに見たように、自然法則という数学的な秩序が固めており、この法則が適切であるかぎり、そ

の決定は一意的である。自然法則は、「関数的依存性」を保有しているので、同じひとつの前提から異なる二つの値を一度に出力することはできない。これに反して、前述のように、わたしたちの「知覚の世界」には、「感覚的性質」を「世界点」に置いていくための確かな規則はなく、同じ時間に同じ場所で生起した事象を他の主観といっしょに確認したとしても、それぞれの報告に食い違いの生じる場合がある。

そこで、カルナップは、これまでの考察で明らかにしたように、「物理学的な世界」を数学的な領域として築いたうえで、実際の指針に従いながら、その世界に特有の「関数的な依存性」を「知覚的な世界」の特性として同定し、「感覚の質」を「世界点」に厳格に配分しようとしている。カルナップによれば、物理学の役割は、「知覚的な世界」にこのような仕方で関わる場所にある。すなわち、「物理学の任務は、感覚的に知覚可能な対象を概念的に取り扱うところに、言い換えれば、知覚を体系的に秩序づけて、手元にある知覚から将来の知覚を推論するところにある」(PB 4, 1926)³。

おわりに

本章は、カルナップの言う「相互主観性」の内実を、体験を組織化している「構造」の同型性として析出させながら、物理学の任務を、そうした「構造」の数学的な把握に求めた。

第2章第3節ですでに述べたように、わたしたちが「感覚の質」を感受できるのは、わたしたちが印象と一定の諸表象とのあいだに、反射性と対称性という二つの「形式的」な結びつきを看取できるからである。言い換えれば、わたしたちが知覚をとおしてそのような二様の関係性を「部分的な同等性」として感知しているので、いま手元にある印象と過去のもろもろの表象との共通性が浮かび上がってくる。わたしたちは、その共通性に、たとえば「ド」という名前をつけて、もろもろの「感覚の質」を形成している。だから、そうした質の水準でわたしたちのあいだに一致が成立とすれば、その一致は、反射性と対称性がかたちづくる関係的な「構造」がそれぞれの「体験の流れ」に備わっているからである。

「感覚の質」は、第2節で証示したように、もろもろの「世界点」に結びついて、「知覚的な事物」となる。別言すれば、わたしたちは、さまざまな「感覚の質」を映しだしている幾何学的な点の集まりを、ある一つの事物として捉えている。事物の認知にかんする

このような把握に基づけば、わたしたちがそれぞれ異なる認識主観であるにもかかわらず、「同じ」対象について互いにやりとりできるのは、つぎの理由からである。すなわち、もろもろの「世界点」がたとえ別々の主観の「空間的時間的な世界」に帰属していたとしても、そうした世界のおおのが等しい幾何学的な領域であるとすれば、わたしたちは、ユークリッド的な距離にかんする一定の計算を媒介にして、たがいの「世界点」を一対一に対応させられるからである。「世界点」どうしのこのような「一対一の割り当て」をとおして、わたしたちは、みずからが観察している一定の事物をほかの主観が言及している対象に転移させて、主観的对象の対応的一致をもくろんでいるのである。

こうして、わたしたちが経験のなかで確認している「相互主観性」を成立させているのは、体験とか「世界点」とかを編成している論理的な関係とか数学的な装置とかの同等性である。カルナップによれば、「相互主観性」を支えているこのような秩序の発見は、わたしたちの日常的な知覚的認知をとおしては困難である。その任務は、科学的な探究、よりわけ、物理学による数学的な探査に俟たなければならない。

¹ Alan W. Richardson. *Carnap's Construction of the World*. Cambridge: Cambridge University Press, 1998. p. 28.

² Rudolf Carnap. “Über die Aufgabe der Physik und die Anwendung des Grundsatzes der Einfachstheit.” *Kant-Studien*. Bd. 28, H. 1. 1923. 本論文からの引用と参照にかんしては、本論文を AP と略記し、該当箇所の変数を示して、出版年(1923)を併記する。

³ Rudolf Carnap. *Physikalische Begriffsbildung*. Karlsruhe: Braun, 1926. 本著作からの引用と参照にかんしては、本著作を PB と略記し、該当箇所の変数を示して、出版年(1926)を併記する。

第4章 物理学的な世界と知覚的な世界の同質性

はじめに

本章の目的は、カルナップの「検証」を「相互主観性」の観点から精査しながら、「物理学的世界」と「知覚的な世界」の同質性を証示するところにある。

カルナップの「検証」にたいしては、これまで多くの研究者がさまざまな描像を与えてきた。たとえば、クワインによれば、「検証」は、世界を感覚と論理学で説明するという経験主義的なところみ (EN 18, 1969) である。このような描像は、第3章で提示した読解、すなわち、リチャードソンらが提起している、知識の客観性の保障を強調する読み方からすれば、退けなければならない見方である。とはいえ、クワインの観点がすべて誤っていると判断するのは早計である。というのも、第3章までの考究に基づけば、クワインが強調している「検証」という見方を、クワインとは異なった仕方ではあるけれども、『世界の論理的構築』の中心点に位置づけられるからである。

カルナップの指摘にもあるように、わたしたちは、みずからの認知が他の主観にとっても到達可能であることを示すために、その認知を「知覚と比較できる」(LAW 139, 1928) ようにする。たとえば、ある音をドミソの三和音として聞き分けられたとき、わたしたちは、自分が聞いた音をなんらかの手段で他のひとびとにも聞かせて、みずからの当の認知を他の主観と共有しようとする。このところみは、わたしたちが獲得しているもろもろの可感的な情報に他の主観も同じように接近できるという前提に基づいている。とはいえ、カルナップが「哲学における疑似問題」という論文のなかで指摘しているように、その前提は、通例、「实际的に採用されている」(SP 15, 1928) にすぎない。逆に言えば、わたしたちは、なぜ、可感的な情報にかんして相互主観的な一致が成立するのか、その理論的な基礎づけが欠如したまま、認知の共有を行っている。

感覚的な知覚を対称性と反射性の感知から説明しようとする視座は、くだんの基礎をつぎのように提供できる。すなわち、そうした二つの関係性はわたしたちの体験の「構造」であり、しかも、「構造的な性質は、あらゆる体験の流れで一致する」。別言すれば、知覚した可感的な情報が「相互主観的」に妥当するのは、双方向性と回帰性の看取があらゆる認識主観それぞれの知覚の働きに共通しているからである。

カルナップは、『世界の論理的構築』のなかで、わたしたちが通例個別的に捉えているひとつひとつの事物をさまざまな可感的な情報に引き戻したうえで、そうした情報がどの

ようにして成立するのかを解明しようとしている。このような枠組みの背景には、クワインが指摘していたように、一見したところ、外界の事物にかんする知識を私秘的で確実な感覚的与件に基礎づけるという発想があるように思える。

しかし、これまでの論述が露わにしているのは、そうした認知のもろもろの知覚的な内容への「還元」は、カルナップにあっては、むしろ、わたしたちが獲得した認知を他の認識主観にも接近できるようにするところみである、という点である。カルナップが『世界の論理的構築』でわたしたちに提示しているのは、そのような「相互主観性」を成立させている理論的な根拠がつぎのような知覚の働きにあるということである。ツーは、このような見方をこう言い表している。すなわち、『世界の論理的構築』のねらいは、知識の正当化のための経験的方法を提供するという意味合いでの「検証」にある(JCC 678, 2003)、と。

そこで、本章では、カルナップの言う「検証」の実相に迫るために、「認知の正当化」という観点から「検証」を精査する。つぎに、「物理学的な世界」と「知覚的な世界」とが一見したところではたがいに切り離されているようにしかし、カルナップは、「「知覚的な世界」の助けを借りて「物理学的な世界」を構成する」(LAW 132, 1928)と宣言しているから、かれがこれらふたつの世界をどのように結びつけているのかを究明しなければならない。さいごに、これまでの考察を踏まえて、カルナップの「検証」がこれらふたつの世界が一体となって機能してようやく達成できるということを論証して、カルナップが「物理学の世界」と「知覚の世界」のそれぞれに与えている役割を明晰にしたい。

第1節 相互主観的な対応

これまでの考察はつぎのように要約できる。わたしたちは、「知覚的な世界」のなかで、「感覚の質」と「知覚的な事物」、および、「ほかのひとのこころ」のそれぞれを、つぎのように「構成」している。すなわち、わたしたちは、まず、切れ目なく連続している「体験の流れ」から対称性とか反射性とか推移性とかを捉えて、現在の体験とある点で似ていたり、同じであったりする過去の諸体験を呼び起こしながら、特定の色のような具体的な「感覚の質」を浮かび上がらせている。そのような質を、こんどは、「空間的時間的な世界」のなかにある一定の「世界点」に投げかけて、たとえば、一定の表情をしたA氏の顔という「知覚的な事物」を幾何学的な点の集合体に仕立てる。さいごに、そのようにして出来あがったA氏の顔のありようにたいして、「表出関係」に従って、みずからの感情、たと

えば、「喜びの感情にかんする表象」を接続させ、「A 氏がいま喜んでいる」と認めるに至る。

わたしたちは、物理学の領域を立ち上げるために、実際的な観点から「物理的状态量」を「感覚の質」に割りつけながら、両者をいわば「辞書」的に対応させ、「物理学的な世界」と「知覚的な世界」とを相関させている。

カルナップによれば、物理学的な「世界点」のあいだの「時間的空間的および(付与に基づいて成立する)性質的な諸関係」は、ある主観の「物理学的な世界」と任意のべつの主観の「物理学的な世界」のそれぞれに等しく妥当する (LAW 195, 1928)。すなわち、わたしたちの「物理学的な世界」にある、物理学的な「世界点」どうしの結びつきは、ほかのひとの「物理学的な世界」のなかでも確認できる。しかも、わたしたちが、そうしたもろもろの「世界点」に割り当てた「物理的状态量」に適合する一定の「感覚の質」を発見できたとき、わたしたちは、そうした「感覚の質」を、みずからの当該の「世界点」に対応する、ほかのひとの「物理学的な世界」の「世界点」に対しても述定できる。

カルナップは、異なる主観どうしの「物理学的な世界」のなかで確認できるこうした相関関係を、「相互主観的な対応」(Intersubjective Zuordnung)(*Ibid.*)と呼称している。この対応に基づけば、わたしたちは、ほかの主観の、時間と空間にかんするある一定の関係で繋がっているもろもろの「世界点」に、わたしたちの世界のなかにある、それ同じ関係にあるもろもろの「世界点」を対応させられる。それゆえ、そのひとが指定している同じ時間と場所を、わたしたちの「物理学的な世界」の側で特定できる。しかも、その時間と場所にたいして、その主観が、ある自然法則に基づいて一定の感覚的性質を当てはめているとき、わたしたちもまた、特定したその時間と場所にその性質を付加できる。

うえで述べた考察に従えば、わたしたちは、「物理学的な世界」のなかでは、将来の時点のある場所で特定の可感的な事象を確認できるといった言明について、ほかの認識主観と同じように、真偽を等しく判定できる。というのも、わたしたちが同じ自然法則に従っていれば、「相互主観的な対応」によって、認識主観のそれぞれが「物理学的な世界」のなかで、主観どうしで一対一対応する世界点にそれぞれと共通の感覚の性質を指定することになるので、指定された時点がきたときに、わたしたちのその言明にたいする評価は一致するからである。このように、わたしたちは、「物理学的な世界」のなかでは、他の主観と「同じ」ことがらを経験することになるのである。

このような同一性を支えているのは、物理学を数学的に捉える視座である。というのも、

認識主観それぞれの「物理学的な世界」を数の世界に見立てて、その数の世界の法則性を「関数的依存性」として掴みとる観点があってこそ、あらゆる「物理学的な世界」に同じ自然法則が行き渡っていると確言できるからである。わたしたちは、「もっとも単純であることの要求」という実的な約定のもとで、厳密な数学的な法則性に知覚を順応させ、「知覚の世界」のなかには見いだせなかった、あらゆる認識主観にとって共通な、「感覚の質」を「世界点」に配列していくための一般的な規則を獲得できるのである。

とはいえ、これまでの枠組みにはつぎのような疑念を提起できる。「知覚的な世界」には「物理学の量的な方法では捉えられない特質」(PB 46, 1926)があるのではないのか、と。あるいは、物理学をとおして「知覚的な世界」を理解しようとするところみは、いわば「色とりどりの対象を白黒写真で表現すること」(PB 61, 1926)であり、「知覚的な世界」に固有の「本質的なもの」(*Ibid.*)を捨象してしまっているのではないのか、と。こうした疑念が的を射ているとすれば、わたしたちが「知覚的な世界」の実相に至るためには、「数学的な計算」(PB 52, 1926)のような「人工的な手段」(*Ibid.*)を差し控えて、むしろ、「もろもろの感覚の質それ自体からなる領域に留まって、それらのあいだに存立している法則性を突きとめなければならない」(LAW 181, 1928)。それでは、カルナップは、このような反論に対してどのように応答するのであろうか。

たしかに、「知覚の領野」(AP 99, 1923)と「物理学的な理論の対象をかたちづくっている領野」(*Ibid.*)にかんしては、一見したところでは、つぎのような違いがあるように思える。すなわち、前者の領域には「感覚の質」という知覚的な対象が現われる一方で、後者を占めているのは、数とか幾何学的な装置とかとかといった数学的な対象である、と。言い換えれば、「知覚的な世界」と「物理学的な世界」とのあいだには、当の世界を構成している成員にかんして、質と数という相違があるように思える。

カルナップは、数学が「論理学の分派をかたちづくっている」(LAW 149, 1928)と主張している。たとえば、基数は、要素が一对一で対応しているあらゆる集合の集合として定義できる (LAW 54, 1928)。というのは、もろもろの集合の要素のあいだに一对一の対応関係をつけるという操作は、そうした集合が要素の個数にかんして一致していることの確認であり、この手続きは、要素の数え上げに等価であるからである。しかも、カルナップに従えば、集合は、「ある一定の命題関数を充足するもろもろの対象について一般的に語れるようにするのに役立つ補助装置」(LAW 44, 1928)である。すなわち、集合は、ある命題関数を充足する対象をひとつひとつ枚挙せずに、それらすべてについてなにごとかを語るた

めの便宜的な手段である。それゆえ、命題関数が記号論理学の基本的な装置である点に鑑みれば、命題関数から派生して出てくる集合も、やはり、記号論理学の道具である。このように、カルナップにあっては、算術が取り扱う数は、命題関数とか集合とかといった論理的な装置の導入によって定義できる「論理的な対象」である。

幾何学的な座標の任意の位置は、もろもろの数で表示できる。うえて見たように、数は「論理的な対象」であるから、幾何学的な座標のなかにあるもろもろの点は、数と同じように、「純粹に論理的な対象である」(LAW 166, 1928)。このように、カルナップに従えば、数であれ幾何学的な装置であれ、物理学が取り扱う対象は「論理的な対象」である。「知覚的な世界」のなかに立ち現れてくるさまざまな認知的な対象は、なるほど、一見したところでは、わたしたちそれぞれに固有の体験の内容である。しかし、第2章と第3章の考究で明らかにしてきたように、わたしたちが「感覚の質」とか「知覚的な事物」とかを認めているとき、実際には、わたしたちは、その認知をとおして、そうした対象を、体験や「知覚的な世界」に帰属する「世界点」を一定の仕方で構造化する秩序として捉えている。すでに見たように、その秩序は、反射性とか対称性とかといった「形式的」な関係性と、ピタゴラスの定理とか余弦定理とかといった数学的な方程式である。カルナップは、「形式的」な関係性を「論理的な対象」に数えいれている(LAW 150, 1928)。すでに確認したように、数学的な対象もカルナップにあっては「論理的な対象」である。だから、わたしたちが常識的に体験の中身として受け取っている、さまざまな知覚的な認知対象は、「論理的な対象」にほかならない。これまでの論述から見て取れるように、「物理学的な世界」は、「論理的な対象」がつくる圏域であり、「知覚的な世界」を組成している対象もその実相は「論理的な対象」である。すると、このような同質性に鑑みればつぎのように言える。物理学は、わたしたちが体験のなかで獲得している「構造」を、微分方程式のなかで、数として、実際の経験に俟たずに、つくりだしている、と。

第2節 温かさの認知

カルナップに倣って、「熱さと冷たさにかんするさまざまな感覚」(PB 16, 1926)について考えてみよう。わたしたちは、いろいろな状況でもろもろの物体に触れていくなかで、二つの物体が接触している場合に感じる熱さとか冷たさとかにかんして、つぎのような現象を観察する。すなわち、わたしたちがそのような二つの物体のどちらについても「温かさの変化」を認めているとき(PB 17, 1926)、そのとき、それぞれの変化は、一方では「熱

くなり」、他方では「冷たくなる」というように、つねに「反対の方向で」進む(PB 17, 1926)。しかも、熱くなっていく物体は、つねに、もう一つの物体よりも「いっそう冷たい」物体であり、逆に、冷めたくなくなっていく物体は、つねに、もう一つの物体よりも「いっそう熱い」物体である(PB 17, 1926)。このような仕方で進行する「温かさの変化」は、接触している当の二つの物体が同じくらいの温かさになるまで続く(PB 18, 1926)。

こうした「経験的事実」(PB 19, 1926)から、わたしたちはこう主張できる。温かさの異なる二つの物体が接触すると、熱い物体から冷たい物体へと温かさが伝わっていき、その結果、両者の温かさが最終的に等しくなる、と。すなわち、二つの物体の接触は「温かさの均一化」(Wärmausgleich) (PB 17, 1926)を惹起させている。わたしたちは、この法則に、「知覚的な世界」の有り様を綿密に観察するだけで到達している。すると、一見したところでは、二つの異なる温かさが一定の条件のもとでたがいに均一になるように変化するという法則性は、「知覚的な世界」に内属する「本質的なもの」であるように思える。しかし、カルナップに従えば、「温かさの均一化」のなかで生起しているもろもろの「感覚の質」は、「無媒介的な直観」(PB 52, 1926)の対象ではない。というのも、第1章の第1節で明らかにしたように、感官に入ってきた印象がある特定の「感覚の質」としてわたしたちの意識にのぼってくるのは、その印象ともろもろの記憶的表象とがたとえば「音の類縁性」を媒介にしてたがいに結びつきあうからである。第1章第2節の考究に従えば、わたしたちは、「音の類縁性」という結びつきを、対称性とか反射性とかといった形式的な観点から捉えている。わたしたちの知覚の働きは、さまざまな印象を一つのまとまりに導く、たとえば「音の類縁性」の関係がもつ「形式的な特質」(PB 18, 1926)の感知にある。だから、「温かさの均一化」を経験している場合でも、わたしたちが捉えているのは、「温かさの均一化」を認知的に成立させる関係の形式的な局面である。とはいえ、「温かさの均一化」には、いったい、どのような関係が伴っているのでしょうか。

すでに確認したように、「温かさの均一化」は、ある物体がそれに触れている物体よりもいっそう熱ければ、両者の温かさが平衡するまで、前者は冷えていき、後者は熱くなっていくという事象である。接触している二つの物体から二つの異なる温かさを受け取って、それらの情報からどちらか一方の物体をいっそう熱いと認めるためには、わたしたちは、当の二つの温かさを比較できなければならない。カルナップによれば、その比較の指標は、「感覚の質」としての強さの程度である(PB 17, 1926)。言い換えれば、一方の物体から伝わってくる温かさが他方の物体の温かさよりもいっそう強くわたしたちに迫ってくるから、

わたしたちは、前者の物体を後者の物体よりもいっそう熱いと感じる。

カルナップが述べているように、二つの温かさ a と b にかんして、 a が b よりも「いっそう強い」とき、そのとき、 b が a よりも「いっそう強い」ことはない(PB 18, 1926)。言い換えれば、ある「感覚の質」がべつの「感覚の質」よりも「いっそう強い」(PB 17, 1926)のは、一方向的にしか成り立たない「非対称的」(asymmetrisch)(PB 18, 1926)な関係がそこで生起しているからである。第2章第4節で確認したように、カルナップにあっては、関係の方向性は関係の「形式的な特質」にほかならない。それゆえ、非対称性は、対称性と反射性と同じように、関係の内実的な部分ではなく、関係の形式に帰属している。カルナップの枠組みでは、わたしたちの知覚の実相は、関係の形式的な把握、言い換えれば、関係の方向性にかんする感知である。したがって、一方の物体を他方の物体よりもいっそう熱いとみなしているとき、わたしたちはつぎの事態を知覚している。すなわち、前者に起因する温かさは後者が惹起する温かさに対して接続していく一方で、その逆向きの相関は成立しない、という非対称的な関係としての「いっそう強い」である。

うえの解析に従えば、ある物体が各瞬間にさまざまな温かさを伝えてくるとき、わたしたちは、それらの温かさのあいだにある非対称的な繋がりを感じとりながら、どの温かさがどの温かさよりも「いっそう強い」のかをつぎつぎと特定している。しかも、カルナップが指摘しているように、「いっそう強い」という非対称的な結びつきは、「推移性」(PB 19, 1926)を保っている。言い換えれば、ある瞬間の温かさがつぎの瞬間の温かさよりも「いっそう強い」と判明し、しかも、第二の温かさがそのつぎの瞬間にくる温かさよりも「いっそう強い」とき、わたしたちは、はじめの温かさがさいごの温かさよりも「いっそう強い」と感知する。このような知覚の働きの結果、同じ物体から継起的に生じるもろもろの温かさは、一定の「系列のかたち」(*Ibid.*)をとる。たとえば、一連の温かさは、時間的に後にくる温かさがそれ以前のどの温かさよりもつねに「いっそう強い」という序列で並んでいるかもしれない。このような非対称的で推移的な系列が意識のなかに立ち現れてくるからこそ、わたしたちは、手元にある物体が熱くなっていると分かるのである。

「温かさの均一化」を経験しているとき、わたしたちは、物体が「熱くなること」(PB 18, 1926)だけではなく、物体が「冷えていくこと」(*Ibid.*)も感じとっている。「熱くなること」が温かさの強まりであるとすれば、後者の過程は、温かさの弱まりとして理解できる。一見したところ、温かさの弱まりは、温かさの強まりとは質的に異なっているように思える。しかし、カルナップによれば、両者の違いは、非対称的な関係である「いっそう強い」が

「ある方向か、あるいは、べつの方向で」(PB 19, 1926)存立しているという点にしかない。すなわち、ある瞬間の温かさ a とつぎの瞬間の温かさ b にかんして、 b から a にしか繋がらないとき、わたしたちは、温かさが強まったとみなす。それとは逆に、 a から b にしか結びつかないとき、わたしたちは、それを温かさの弱まりとして認知する。だから、接触している二つの物体のうち一方が熱くなり、他方が冷たくなるという二様の「温かさの変化」は、たがいに逆向きの二つの非対称的で推移的な関係がかたちづくる、温かさにかんする二つの系列である。

このようにして、「温かさの均一化」は、認知的には、もろもろの温かさが非対称的で推移的な関係をとおして生起してくるという事態である。別言すれば、「温かさの均一化」ということばは、そのような形式的な関係としての一定の「現象の秩序」(PB 47, 1926)を言い表している。

カルナップによれば、そのような秩序を、物理学は「数で名指している」(PB 51, 1926)。たとえば、物理学が「「いっそう高い温度」という概念」(PB 35, 1926)に基づいて定量的に記述しているのは、物体が熱くなっていくという「推移的で非対称的な関係」(PB 35, 1926)である。この理解に立てば、もろもろの「世界点」に対して、「感覚の質」を配列していく場合であれ、「物理的状態量」を割り振っていく場合であれ、わたしたちが当の付与をとおして描き出そうとしているのは、「ある性質のさまざまな出現形態(程度、局面)」(PB 51, 1926)、すなわち、一定の形式的な関係が打ち立てている組織的な連絡である。すると、「数学的に機能している物理学は知覚可能な自然の質を量に置き換えて、それによって、出来事の本質的な局面が喪失する」(PB 47, 1926)という冒頭の批判に対しては、こう応答できる。わたしたちが熱さとか冷たさとかとして理解しているのは、それらが現れてくるときの知覚的過程にある関係的な違いであって、物理学は、質としてのそのような構造的差異を、数的連関に基づいて、いわば「量的な方法」(*Ibid.*)で精密に掴みとろうとしているのである、と。

第3節 二つの世界の統一的把握

わたしたちは、「知覚的な世界」のなかでは、知覚的な対象は、体験の「構造」としてそれ単独では存在していない。言い換えれば、わたしたちが日常的に捉えているそうした対象は、諸体験が一定の論理的な関係のもとで関連しあっている、体験の組織体として立ち

現れている。これに反して、「物理学的な世界」のなかでは、経験のそうした「構造」を数として言い表すことで、体験を秩序づけている組織だけに照準を定めている。いわば、物理学的な認知は、経験の「構造」を体験から純化させて取り出そうとしている。このような違いに鑑みれば、「知覚の領野」(AP 99, 1923)と「物理学的な理論の対象をかたちづけている領野」(*Ibid.*)にかんして、たしかに、つぎのように力説できもする。「これら二つの領域がまったく別々であるということは、いくら強調してもしすぎることはない」(*Ibid.*)と。

とはいえ、これまで唱道してきたように、認知的な観点からすれば、「感覚の質」とか「知覚的な事物」とかといった対象の実質、別言すれば、そうした対象の認知を成立させている要因は、「形式的」な関係性からなる秩序であり、それに秩序づけられている体験は、副次的である。だから、認知的な視点に立てば、わたしたちは、やはり、「知覚的な世界」と「物理学的な世界」とのあいだに同質性を認めなければならない。

こうした視角から、これまでの考究を振り返ってみよう。カルナップは、わたしたちの認知的な営為を主観による「構成」として、体験という素材から組み立てなおそうとしている。そのための準拠枠としてカルナップが援用しているのは、命題関数の知見である。すなわち、カルナップが『世界の論理的構築』でこころみているのは、ゲシュタルト理論と記号論理学の観点から、わたしたちが経験的に知覚している諸対象を認知する過程を追跡している。たとえば、わたしたちの体験は、まず、「 x と y は部分的に類似している」(LAW 109, 1928)という命題関数を充足する組としてわたしたちの意識に現れてくる。すると、わたしたちは、そうしたもろもろの体験をある具体的な「感覚の質」としてひとつに括ることができる。というのも、わたしたちは、当該の体験のあいだに成立している反射性と対称性に鑑みて、それらに一定の類似した可感的性質を認めているからである。

カルナップは、このような「構成」を繰り返し行い、ひとつの「構成体系」を打ち立てようとしている。すると、「構成体系」のなかでは、たとえば、「赤」とか「ド」とかといったことばが指し示している対象の違いは、わたしたちの体験という同じ「基底的对象」をとりまとめる秩序の相違として現れてくる。だから、「構成体系」の見地からすれば、本来的に存在しているのは体験だけであるから、カルナップは、存在論にかんしては、「ただひとつだけの対象領域」(LAW 4, 1928)を主張する一元論をとるけれども、当の体験を編成する仕方にかんしてはさまざまな種類を容認している点で多元論的である。

体験を秩序づけるための形式を発見するのは、科学、とりわけ、物理学の仕事である。

すなわち、物理学は、原因となる事象とそれに引き続いて起こる事象を自然法則のなかで定量的に記述し、そのようにして獲得した状態量を「物理学の世界」の「世界点」に割り当てながら、わたしたちの体験を組織化している「構造」の候補を数学的な仕方で明らかにしていく。第1節ですでに指摘したように、物理学的な「世界点」のあいだにある時間的關係、および、空間的關係は、ある主観の「物理学的な世界」と任意のべつの主観の「物理学的な世界」のそれぞれに等しく妥当する。というのも、それぞれの主観が同じひとつの数学的な装置を下敷きにすると取り決めれば、おのおのの「物理学的な世界」の時間と空間の測量にかんする基準を一律にできるからである。すると、わたしたちは、この「相互主観的な対応」を礎にすることによって、他の主観が予測した因果的な事象を、つぎのような手順を踏んで「検証」できる。まず、その主観が「辞書」の助けを借りて、原因となる事象とそれに引き続いて起こる事象を自然法則のなかで定量的に記述し、そのようにして獲得した状態量を、かれの「物理学の世界」の「世界点」に割り当てる。つぎに、こんどは、わたしたちが、「相互主観的な対応」に基づいて、当該の「世界点」をおのおのの「物理学的な世界」にある「世界点」に一致させながら、かれと同じ自然法則を援用して、わたしたちが帰属している「物理学的な世界」の「世界点」に状態量を配分する。他の主観が割り当てる状態量とわたしたちが配分した状態量は同一である。というのも、第2節で証示したように、自然法則は「関数的依存性」を内蔵しているので、入力された状態量が同じ値であるとき、そのとき、その値から出力できる値は、かならず等しくなるからである。かくして、わたしたちは、「辞書」による変換をとおして状態量を感覚の概念に書き換え、その概念を「基本的体験」から「構成」し直して、わたしたちにとってもっとも原初的に与えられている「基本的体験」にたどり着く。この一連の過程が、カルナップの言う「検証」である。

うえの解析が露わにしているように、カルナップの「検証」は、ある主観が「知覚的な世界」のなかで所持している個人的な経験を他の認識主観が共有していくための方法である。この「検証」を成立させているのは、カルナップのふたつの着想である。すなわち、「物理学的な世界」を厳密に首尾一貫している数学的な世界に仕立てあげる「脱主観化」と、その世界を「知覚的な世界」に結びつけるための「辞書」という発想である。これらふたつが連動してようやく、わたしたちは、主観的な「知覚の世界」から完全に「相互主観的」である「物理学的な世界」に移行し、他の主観の経験をわたしたちの「知覚的な世界」に取り込めるようになるのである。

第2章で述べたように、わたしたちが赤さとか硬さとかと呼んでいる概念は、もろもろの「基本的体験」を「類似性の想起」によってひとつのあつまりにして「構成」できる、形成体である。言いかえれば、カルナップにあっては、さまざまな「感覚的性質」は、ある一定の点で類似している「基本的体験」をひとまとめにして呼称するための、「秩序の形式」(Ordnungsformen)(LAW 223, 1928)である。すると、「辞書」の働きは、「知覚の世界」のなかで秩序づけられている「基本的体験」を、「物理学の世界」に帰属している自然法則のなかであらためて関係づけ直したり、その逆を可能にさせたりするための装置として理解できる。

この視点からすれば、「物理学的な世界」と「知覚的な世界」のどちらが実在であるのかという問いは浮上してこない(AP 100, 1923)。というのも、これらふたつの世界は、「検証」の脈絡では、それぞれのし方で「基本的体験」を組織化するための場として等価に機能しているからである。だからこそ、カルナップは、「基本的体験」を星に見立てながら、「感覚的性質」とか「物理的状态量」とかといったもろもろの科学の対象を「星座になぞらえているのである」(LAW 224, 1928)。つまり、それらのどちらも、「構造」であり、体験を秩序付ける側にある。

カルナップの言う「検証」は、私秘的で個人的な営みではない。実際、カルナップの事例にあるように、わたしたちが「12時にここで雷鳴が轟く」とほかのひとに予報した場合、わたしたちとそのひとは、当の言明とともに肯定、あるいは、否定できる(SP 27, 1928)。すなわち、「検証」は、「相互主観的」である。この事実、これまでの論究から以下のように説明できる。わたしたちが通例個人の経験的な内容として理解している、さまざまな「感覚の質」は、もろもろの体験を秩序づけている関係の「構造」である。たとえば、対称的でもあり、反射的でもあるとか、推移的でもあり、対称的でもあり、反射的でもある、とかである。しかも、カルナップの言説からすでに確認したように、こうした関係の形式によって「体験の流れ」を秩序づける働きは、それぞれの主観で共通している。だから、わたしたちはこう主張できる。たとえば、わたしたちがピアノから響いてきた一定の音響的な刺激を受容したとしよう。そのとき、わたしたちは、おのものの「体験の流れ」を同じ仕方で組織化しているから、同じ音を聞き取れるのである。あるいは、わたしたちが「12時にここで雷鳴が轟く」とほかのひとに予報した場合で言えば、わたしたちとそのひとが当の言明とともに肯定、あるいは、否定できるのは、12時に互いの体験のなかで起こった秩序づけが一致をみたからである。このように、わたしたちの体験が同じ関係的な特性を

もてるという前提があるからこそ、知覚による検査、言い換えれば、「検証」が成立する。

第4節 検証

カルナップに倣って、あるひとが、そのひとの経験から「ラッパの赤(Drommetenrot)という色がある」(SP 28, 1928)と語ったとしよう。この言明は、一見したところ、その発話者の体験に固有のなんらかの質を名指している。それゆえ、当のひとにしか「ラッパの赤」があるかどうかは確かめようがないように思える。しかし、これまでの考察を踏まえれば、わたしたちは、つぎのような手順で、「ラッパの赤」という「感覚の質」を、体験を束ねている一定の関係がもつ、ある「構造」として同定できる。「ラッパの赤」は、赤色の系統に所属している。それゆえ、当の「構造」をもつ関係は、つぎのような体験のあいだにある、類縁性である。すなわち、発話者が赤色とみなしている「類似性の円」に所属している、一定の体験である。第2章第4節で明らかにしたように、そのような親近的な結びつきが確立するのは、当該の体験どうしが推移的であり、かつ、対称的であり、かつ、反射的であるという「構造」のなかで関係しあっているからである。だから、「ラッパの赤」は、そのような関係的な秩序としての「構造」である。なるほど、その「構造」が「基本的体験」をどのように組織化しているのかを具体的に描き出すのは困難である。しかし、将来的に、わたしたちがその有り様を明確にできれば、わたしたちは、「ラッパの赤という色がある」という言明が真になる条件をつぎのように約定できる。すなわち、かくかくの「構造」が「体験の流れ」を秩序づけて、しかじかの「基本的体験」のあいだに類縁関係が生起するとき、そのとき、「ラッパの赤という色がある」は真である、と。うえで述べたように、わたしたちがこの種の規則を取り決めることができたとき、言明は「検証」に服する。このように、わたしたちは、「ラッパの赤という色がある」にかんして、「いつかは当の言明が真である、あるいは、偽であると認められると、すくなくとも考えることができる」(SP 29, 1928)。かくして、くだんの言明は、発話者だけではなく、わたしたちにとっても、知覚的な検査に開いている。

しかも、先述したように、形式的な関係性は論理的な特質を備えている。すなわち、反射性とか対称性とか推移性とかといった特性は、記号の操作にかんする一定の方途として把握できる。それゆえ、わたしたちが「感覚の質」として掴んでいる「構造」は、根本的には、記号を運用するための諸規則である。この点に鑑みれば、わたしたちの経験と論理は、ばらばらに分かれているわけではない。わたしたちは、認識主観としては、「体験の流れ」

のなかで関係の形式を捉えているけれども、ひとたび論理学のなかに移れば、そのような形式を、記号の操作法として学習できる。

ツーは、「検証」を、「経験主義、意味論、および、存在論」(“Empiricism, Semantics, and Ontology.” 1950)でカルナップが唱道している「内的な問い」と「外的な問い」の区分に引き付けて把握しようとしている。ツーによれば、「検証」は、「内的な問い」のように、ある体系のなかでの有意味な解答可能性を問題にしている(JCC 687, 2003)。すなわち、カルナップの正当化にたいする考え方では、ある知識の正当性をめぐって立てられた問いにたいして明らかにしなければならないのは、なんらかの「構成体系」のなかに組みこまれたうえでのその知識にたいする経験的な解答可能性であり、しかも、この可能性はその体系のなかの論理的な関係を分析することによって露わになる。それゆえ、この問いは、確立された体系を支配している規則に照らして有意味に答えられる「内的な問い」の範疇に当てはまる。その一方で、カルナップの正当化は、「構成体系」の基礎の選択にかんする段階では、「实际的」な基準によってしか決められない「外的な問い」として処理できる(*Ibid.*)。すると、カルナップの「検証」には、体系の内側で定まる経験的な局面と体系の外側の要因が関わる協約的な局面とがあることになる。

ツーの言う協約的な局面は、本論がこれまで獲得してきた視座からすれば、物理学がさまざまな数学的な公理体系を打ち立てて、そのなかからわたしたちの経験にもっとも適合する枠組みを選択するという場面である。そのような状況に際して、カルナップは、つぎのふたつの考え方を提案する。ひとつは、「多くの関連していない質の領域は将来の時点では現れない」という申し立てである。第二に、「ひとつの性質の領域の限界を可能なかぎり狭めるということである」(AP 103, 1923)。前者の方針に従えば、わたしたちは、一定の時間に観察されたがいに無関係な性質を捨象することになる。第二の指針が目指しているのは、残った感覚的性質にある共通性の絞り込みである。そこで、カルナップは、つぎのふたつの考え方を提案する。ひとつは、「多くの関連していない質の領域は将来の時点では現れない」という申し立てである。第二に、「ひとつの性質の領域の限界を可能なかぎり狭めるということである」(*Ibid.*)。前者の方針に従えば、わたしたちは、一定の時間に

観察されたがいに関係な性質を捨象することになる。第二の指針が目指しているのは、残った「感覚の質」にある共通性の絞り込みである。ある自然法則が「物理学的な世界」の特定の「世界点」とその近傍に、一定の「物理的状态量」をあてはめているとしよう。わたしたちは、その時間と場所で、類似してたいくつかの色は見たけれども、それ以外にはそれぞれ結びつかない雑多な感覚しか確認できなければ、はじめの指示に則って、色以外の感覚を閉めだす。つぎに、類似性の幅をできるだけ小さくして、特定の色、たとえば、赤に焦点を絞る。ある自然法則が「物理学的な世界」の特定の世界点とその近傍に、一定の状态量をあてはめているとしよう。わたしたちは、その時間と場所で、類似してたいくつかの色は見たけれども、それ以外にはそれぞれ結びつかない雑多な感覚しか確認できなければ、はじめの指示に則って、色以外の感覚を閉めだす。つぎに、類似性の幅をできるだけ小さくして、特定の色、たとえば、赤に焦点を絞る。

このように、たしかに、カルナップの「検証」の過程は協約的な要素を含みこんでいる。しかし、それと同時に、強調しなければならないのは、物理学的な認知と知覚的な認知とが捉えようとしている対象は、どちらも同じであるという点である。つまり、「物理学的な世界」と「知覚的な世界」とのあいだの同質性である。というのも、ツーのように、カルナップの「検証」にかんして、協約性ばかりを前面に押し出してしまえば、カルナップの枠組みは、第2節で提起したように、つぎの批判に曝されてしまうからである。「物理学的な世界」と「知覚的な世界」とのあいだの相関がまったくの協約的な結びつきにすぎないとすれば、二つの世界はまったく異質の領域であるように思える。すると、物理学をとおして「知覚的な世界」を理解しようとするところみは、いわば「色とりどりの対象を白黒写真で表現すること」であり、「知覚的な世界」に固有の「本質的なもの」を捨象してしまっているのではないのか。そこで、本論は、ツーの主張をつぎのように和らげたい。すなわち、たしかに、物理学が用意するさまざまな微分方程式のどれがわたしたちの「知覚的な世界」のありようをうまく描写できるのか、という問題にかんしては、さまざまな実的な原理を駆使して、探究のなかで便宜的に決定していくほかはない。しかし、だからといって、カルナップは、「物理学的な世界」と「知覚的な世界」がまったく異なる領

域であると主張しているわけではない。むしろ、どちらの世界のなかにも「論理的な対象」がかたちづくる「構造」が存在しているから、両者は、本質的には同じ領域である。しかし、二つの世界のあいだで「構造」がかならずしも一致するとはかぎらない。だからこそ、わたしたちは、認識主観として、二つの世界のあいだを往復し、二つの世界の「構造」をすり合わせていかなければならないのである。

おわりに

本章では、「物理学的な世界」と「知覚的な世界」とが「論理的対象」から成り立っている点を示して、二つの世界の同質性を強調しながら、カルナップの「検証」が二つの世界での認知に支えていると主張した。

そのために、第2節では、「温かさ」の感覚を取りあげて、知覚的な認知と物理学的な認知とがその対象をどのように捕捉するのかを露わにした。その過程で明らかになったのは、二つの認知がともに、推移性とか非対称性とかを徴標にして「温かさ」を捉えている、ということである。第3節で指摘したように、カルナップの「検証」は、個人的な体験にさまざまな認知を基礎付けて、その認知の確実性を保証するというところみではない。むしろ、「検証」はつぎのように理解しなければならない。すなわち、それは、わたしたちの経験を他の認識主観にも接近可能にさせるための方法である、と。この見方に従えば、たしかに、フリードマンやリチャードソンが唱導している見解、言い換えれば、カルナップの主要な関心事を「相互主観性」に置き、かれを新カント派に連なる哲学者として特徴づけるといふ描像は、基本的には間違っていない。そこで、本章は、その読解に即しながらも、「相互主観性」の内実を「形式的」な関係がかたちづくる「構造」の均一性として析出させた第3章の考察に則って、「物理学的な世界」と「知覚的な世界」とのあいだの同質性を浮き彫りにした。すなわち、わたしたちは、どちらの世界であっても、認識の対象を「論理的な対象」として見定めている。

カルナップの知覚的な対象の「構成」は、その対象を体験に「還元」という企図である。そのところみでカルナップが際立たせているのは、知覚的な対象が体験の内容とし

てではなく、諸体験をとりまとめている「形式的」な秩序としてある、という点である。第2章で示したように、そうした「還元」は、当該の対象にかんする言明に「検証可能性」を付与するように働いている。これらを勘案すると、ある言明にかんする「検証可能性」を開示するためには、その言明が述べている対象を一定の論理的な「構造」として記述しなければならない。すると、わたしたちは、「科学的な認知」、つまり、物理学的な探究に着手しなければならないのである。というのも、第3節で示したように、そうした「構造」を数として体験から単離させて、「構造」それ自体を究明できるのは、物理学であるからである。したがって、「検証可能性」に具体的な実質を与えているのは、物理学である。

「構成」による「還元」というカルナップの考えを支えているのは、心理学の「ゲシュタルト理論」である。かくして、つぎのように言える。カルナップは、「検証可能性」を結節点としながら、互いに切り離されがちな心理学と物理学を連関させて、それらを一体的に捉えられる視座を『世界の論理的構築』のなかで提示している、と。この知見の背景にあるのは、うえで述べた、「知覚的な世界」と「物理学的な世界」とが同質であるという事実である。すなわち、これら二つの世界がたんに協約的につながっているのではなく、それぞれが「論理的な対象」から成り立っているという本質的な同等性を確認できるからこそ、物理学と心理学を連関させるという統一的な見方が可能となるのである。

ツーは、「カルナップの『構築』における概念の正当化」という論文のなかで、『世界の論理的構築』の企図を概念の客観性の担保と経験主義的な正当化のふたつの局面に仕分けたうえで、この著作の真のねらいが「客観性から正当化を鑄直すところにある」(JCC 678, 2003)と主張している。かれがカルナップの客観性として際だたせているのは、ある「構成体系」のなかで当該の概念の位置づけを形式的に特定できるという点である(JCC 675-676, 2003)。すなわち、ある概念的な「形成体」がなにであるのかにかんして、わたしたちと異なった主観とが同意に至るためには、ある「構成体系」のなかでその形成体がどのような定義を経て導き出せるのかを詳らかにしなければならない。

なるほど、ツーのこの視点は、第1節で述べた「基本的体験」に基づく「合理的再構成」に焦点を絞り、あくまで「検証」を基軸にしながら、「知覚の世界」のなかでの秩序づけ

の客観性を際立たせることによって、カルナップ研究者たちのあいだで議論になる、還元による正当化と知識にかんする客観性の担保という対立図式をうまく折衷させてはいる。しかし、そのツーンにしても、カルナップの言う「検証」が、「知覚の世界」だけではなく、その世界と「物理学の世界」とが協働して成立するという図式を捉えきっていない。本論の視角からすれば、これらふたつの世界の連携を洗い出し、それぞれの世界の機能を解き明かしてようやく、カルナップの「検証」の全容を把握できるのである。

終章

本論では、カルナップの言う客観性が「相互主観性」である点を確認して、わたしたちの経験がなぜ「相互主観性」を保有できるのか、という問いにたいしてカルナップの採っている方略を追跡した。

ここで等閑視できないのは、カルナップがわたしたちの体験を「基本的体験」として定位するときに浮上してくる課題である。すなわち、混沌とした一つの全体としての感覚的な印象についてどのようにして語るができるのであろうか。それゆえ、第1章では、その応答としてカルナップが提起している「構成」を精査した。

これを受けてつぎに究明しなければならないのは、感覚的な性質にかんする概念がどのようにして「物理学的な世界」のなかに割りあてられるのか、という問題である。というのも、カルナップによれば、このような割りあてこそ「相互主観的」であるからである。そこで、第2章では、その論拠を物理学の「脱主観化」に求めながら、論理学が協約の所産であるというカルナップの見解を確認した。しかしながら、カルナップの洞察にあるように、このような「相互主観的」な割りあては、一对多の対応しか担保できない。すなわち、わたしたちが「物理学的な世界」の特定の点に一定の物理学的な状態量を定めれば、わたしたちにどのような感覚的な性質が生じるのかは、一意的に決まる。とはいえ、逆に、さきに「感覚の質」を「物理学的な世界」の点に配列したとしても、その割りあては、その点にどのような物理学的な状態量が当てはまるのかを決定できない。

この難点にたいしてカルナップはどのように応答するのであろうか。第3章では、「物理学的な世界」と「知覚的な世界」とのあいだにある、このような非対称的な結びつきの原因を洗い出して、カルナップの言う「辞書」を、当の非対称性を補填するための外挿的な協約的装置として位置づけた。こうした考究によって、くだんの非対称性を招来させる主要因を、「物理学的な世界」とわたしたちが知覚的に捉えている外的な世界とのあいだにある違い、すなわち、法則的な決定性の有無として析出させた。

第4章では、さいごに、「相互主観性」の観点から、一見したところ切り離されて見える、「物理学的な世界」と「知覚的な世界」との同質性を主張した。すなわち、「物理学的な世界」にせよ、「知覚的な世界」にせよ、両者の世界には形式的な「構造」が貫いており、わたしたちは、そうした「構造」を媒介にして、合意に至ることができるのである。この観点から、カルナップの言う「検証」の実相を、他の主観にたいする経験可能性の担

保として際立たせた。

カルナップ研究者であるエッブスは、カルナップを「ヴィトゲンシュタインに触発された、革命的な哲学者」¹と評価している。すなわち、エッブスに従えば、カルナップが他の哲学者と大きく異なるのは、哲学をいわゆる形而上学から解放しようともくろんでいる点にある。エッブスが指摘しているカルナップのこのような哲学観は、もとよりカルナップ個人だけが抱いていたのではなく、カルナップが身を置いていた思想潮流、すなわち、「論理的経験主義」全体を特徴づける考え方であると言える。すなわち、カルナップも在籍していた、この思想潮流の源流である「ヴィーン学派」(Wiener Kreis)は、その発足のさいの綱領のなかで、「科学的な世界把握」を打ち出し、こう明言している。「科学的な世界把握によって、形而上学的な哲学は拒絶される」(WW 13, 1929)²、と。

「ヴィーン学派」がそのように宣言できるのは、いわゆる形而上学がみずからの提題にかんして「経験的所与についてのもっとも単純な言明へと戻る」(WW 12, 1929)ことを認められないからである。言い換えれば、いわゆる形而上学者たちは、経験科学が到達できない領域にある超経験的な知識の探究をこころみようとしているけれども、「ヴィーン学派」に言わせれば、そうした知識は知識ではない。むしろ、「ヴィーン学派」にあつては、知識は、体験という「所与」へと「還元」できる認知的対象である。このような知識観は、第2章で示したように、認知的な対象の「構成」をとおしてその対象をわたしたち自身の体験に引き戻そうとするカルナップの枠組みと合致する。このような脈絡からすれば、カルナップの言う「構成」には、わたしたちの手元にある知識を体験に結びつけるやり方を示しながら、当の方略が適用できない知識をみせかけの知識として炙り出す機能がある。だから、カルナップは、「構成」のねらいは、認知の「正当化」(SP 1, 1928)にあると言える。実際、カルナップは、認識論の課題が認知の「認知を正当化するための方法」(*Ibid.*)を打ち立ちることとしている。

このように、カルナップをはじめとした「ヴィーン学派」は、一致して、どのようにして知識を正当化するのかという問いに取り組み、その方略として体験という「所与」への「還元」を推し進めている。しかし、そのようにして「正当化」できる知識をどのように

特徴付けるかという点にかんして、カルナップは、他の「ヴィーン学派」とは異なる見解に到達している。たとえば、「ヴィーン学派」の指導者であるシュリックが「認識論の基礎づけに関わるあらゆる偉大な探究は、人間の知識の確実性に関する問いから現れている」³と述べているように、「ヴィーン学派」の基本的な問題意識は、知識の本性を明証性とか自明性とかに求めながら、そうした特性がどこにあるのかを探究するところにある。このような発想に従えば、「ヴィーン学派」が体験という認知的な出発点への遡及をわたしたちに要求しているとき、かれらは、当の所与には疑いえない確実性が内在していると考えていることになる。

しかし、第2章の考察から分かるように、カルナップが「構成」という視点からわたしたちの認知を体験から組み立てたとき、カルナップの関心は、体験それ自体には向かっていない。むしろ、カルナップが暴いているように、わたしたちのどのような認知も、体験だけでは立ち現われこない。というのも、わたしたちの体験は、「ゲシュタルト理論」に従えば、わたしたちにどのような情報も開示しない、認知的に空虚な点のようにあるからである。カルナップの「構成」が明らかにしているのは、「形式的」な関係性が与えられてようやく、わたしたちのさまざまな認知が生起してくる、という点である。だから、カルナップにとっての「認知の正当化」は、わたしたちの知識の体験への基礎付けではなく、むしろ、知識を形式的な関係性の網の目のなかに組み込もうとするところみである。すなわち、カルナップに従えば、ある認知が正当性をもつのは、それと論理的な関係のもとでたがいに結びつきあっている既存の認知とのあいだに論理的な連絡が出来上がるときである。

第4章の考究に基づけば、物理学の任務は、数という装置を駆使して論理的な「構造」を発見するところにある。すなわち、物理学は、あらたな認知と既存の認知とを結び合わせるための論理的な回路を見つけ出そうとしている。そのような結びつきを発見して、ようやく、「構成」による「還元」が「検証可能性」の保証として機能する。

カルナップの主要な関心は、経験的知識にかんする「合理的再構築」である。「合理的再構築」の基本的な枠組みは、経験的知識に関するいっそう高次の概念をいっそう低次の

概念へとひとつずつ還元していくことである。この試みは、たしかに、基礎づけ主義的な「科学的な世界把握」を連想させるし、しかも、カルナップのはじめの主著である『世界の論理的構築』では、「経験的所与」を基底に据えて、そこから順次、高次の概念を構成してもいる。しかし、カルナップのここでの「合理的再構築」のねらいは、「経験的所与」に関する概念からいくらかのものを基本的な概念として選ぶとすると、「視覚」とか「色」とかに関する概念をどのように構成できるのかという問題の解決にあるのであって、「経験的所与」があらゆる経験のための盤石な基盤であるということを証示しようとしたのではない。

科学的知識を成立させているもろもろの概念の「形式的」な関係性を分析し、そのようにして明らかにした結びつきによって、諸概念をひとつの組織系統にまとめあげる「合理的再構築」は、カルナップによれば、科学のねらいである、認知に関わる対象の真なるもろもろの言明を見いだすこと、および秩序づけることに欠かせない。というのは、「ある時間にある場所にカンガルーがいる」という言明の真偽を確かめるには、カンガルーの位置に関する経験的な測定をしなければならないけれども、そのためには、「座標」とそのなかに位置づけられる対象という概念的な関係理解がまず固まっていなければならないからである。したがって、カルナップが「論理的構文論」ではっきりと打ち出している、言語体系の「規則」が取り結んでいる論理的関係の重視の要因は、経験的言明の真理条件の確定が、わたしたちがもろもろの経験的な真なる言明を捕捉するのに不可欠な認識論的な基盤であるという洞察にある。

本論では、こうして、「科学的な世界把握」の基礎づけ主義的な特徴とカルナップの「合理的再構築」という哲学の方向性との違いを明らかにした。カルナップの「合理的再構築」は、「経験的所与」を土台にしてもろもろの経験的知識を構成することに目的があるのではなく、むしろ、体験を論理的な形式によって組織化するところにある。

第1章で確認したように、わたしたちの経験には「相互主観性」が備わっている。言い換えれば、体験が「形式的」な「構造」のなかでひとつの組織になると、わたしたちは、そうした体験をたがいにやりとりできるようになる。だから、うえで述べてきた組織化は、

カルナップの枠組みでは、「相互主観性」と密接にかかわっている。このような観点があるからこそ、科学が打ち立てるさまざまな検査の条件は客観性を保つのである。

カルナップに従えば、理論的枠組みをどのように選ぶかの決定は、かれがその基準を「寛容の原理」(Toleranz Prinzip) (LSS 44, 1934)と言いつけているように、まったくの任意である。しかし、その措定からどのような帰結が生じるかは「理論的」に探究できる。カルナップは、この探究を「論理学」の仕事として位置づけている。

たとえば、「Aであるとき、そのとき Bである」と「Bではない」というふたつの言明から出発して「Aではない」という結論に至る演繹的な推論、つまり、後件否定式は、「(Aであるとき、そのとき、Bである)であるとき、そのとき、(Bではないとき、そのとき、Aではない)である」というひとつの論理的な言明に集約できる。この推論の「Aであるとき、そのとき Bである」を既知の自然法則とし、「Bではない」を知覚による観察の結果とすれば、後件否定式は、陽表的には現れていなかったある事実にかんする「予測」(FLM 143, 1938)をわたしたちにもたらしめている。しかも、「Aではない」という事実が先に発見されている場合には、わたしたちは、「予測」を導きだすのと同じ演繹的な手続きに準拠して、その事実がなぜ起こったのかの「説明」(*Ibid.*)を与えられる。つまり、「論理的構文論」のなかで規定できる論理的な言明は、経験科学のなかで、経験的な言明を演繹的に組織化し、科学的な「予測」と「説明」とを同時に成立させているのである。

しかしながら、「有意味性」の基準に則れば、「科学の論理学」の土台である「論理的構文論」は、「無意味」であると言わなければならない。というのも、カルナップの洞察にあるように、後件否定式のような「トートロジー」(Tautologie)からは、「現実についてなにも聞き知ることはできない」(AN 76, 1930)からである。別言すれば、「論理的構文論」に帰属している言明はわたしたちの知覚についてなにも語っておらず、それゆえ、そうした言明の内容は正当化できない。したがって、「論理的構文論」は、「形而上学」と同じように、「無意味」な言明の寄せあつめであるはずである。それにもかかわらず、カルナップは、「トートロジー」を、「有意味」な言明のなかに数え入れている(ÜP 102, 1932)。

カルナップによれば、「トートロジー」の真理性は、それが備えている「形式」に依存

している(*Ibid.*)。別言すれば、この言明の真理性は、ある一定の「事態の表象」には依拠していない。たとえば、「(p ではない、かつ、q ではない) か、あるいは、(p であるか、あるいは、q である) である」という「トートロジー」は、「ではない」と「かつ」と「あるいは」のみつつの論理的結合子が組み合わさってできる「形式」によって、p と q が言及しているどのような状況であっても、真になる(AN 75, 1930)。

それゆえ、「トートロジー」から「現実についてなにも聞き知ることはできない」(AN 76, 1930)要因は、わたしたちがどのような「事態の表象」を経験しようとも真であるという、「トートロジー」の特異な真理性にある。「トートロジー」は、わたしたちが一定の「事態の表象」に基づいてその真理性を確認するまでもなく、それが内蔵している「形式」によって、すでに真理性を確保しているのである。だから、「トートロジー」は、経験の水準で正当化できないのではなく、むしろ、正当化する必要がないのである。

実際、カルナップは、『言語の論理的構文論』のなかでつぎのように主張している。すなわち、科学を「トートロジー」によって編成していくし方にかんしては、「正当化にかんするどんな問題も生じない」(LSS V, 1934)、と。このように、論理学を絶対的な規範から解放したうえで、カルナップは、「トートロジー」をかたちづくっていく方針を、「ある一定のもろもろの実際的な方法論的視座（たとえば、単純さ、合目的性、およびある一定の課題での実り多さという諸傾向）」(LSS 248, 1934)に置く。言いかえれば、わたしたちが「論理的構文論」のなかで「トートロジー」をかたちづくるやり方には絶対的な拘束は存在しないけれども、「トートロジー」は、後件否定式のように、もろもろの経験的な言明を演繹的な推論的機構のなかに組み込んで、それらを科学的な言語というひとつの組織的な系統に仕立てるという任務がある。だからこそ、「論理的構文論」は、その科学的な言語で取り組む「実際的」な目的にふさわしい論理的な言明を産生しなければならないのである。

「論理的構文論」の仕事は、一般的に「構文論」と呼ばれる、記号の種類や順序に関する規則を定めるだけに留まらない。というのは、カルナップは、「論理学も、文を形式的に取扱う、という見解」(LSS 2, 1934)をうち出し、論理学も、構文論と同じように、「形

式性」を備えている点を強調しているからである。すなわち、「論理的構文論」は、構文論的な側面だけではなく、推論の組み立てや「論理的真理性」を探究するという、論理的な側面もあわせ持つ理説でもあるのである。しかし、推論を組み立てるさいには、たとえば、「 $A \vee \sim A$ 」という文を演繹するために、まず「 \vee 」と「 \sim 」のそれぞれに「または」と「ではない」という「意味」を与え、その真理性を確認してから、この文を導くための推論規則を固めるという方策をとれもする。換言すれば、論理的結合子の「意味」という非「形式的」要因が「論理的真理性」と推論規則を支配している、という考え方も認められるはずである。それにもかかわらず、なぜ、カルナップは、このような考え方を拒否し、推論の組み立てが「形式的」と主張するのであろうか。

カルナップは、「意味」に従って規則を選定するという手順に対して、つぎのように言明している。すなわち、「原初文も推論規則も任意に選ばれてよい。すると、この選択によって、生起する論理的な原初記号がどのような意味をもつのが判明する」(LSS V, 1934)、と。「論理的な原初記号」には、たとえば、「 \vee 」とか「 \sim 」とかといった論理的結合子が含まれている点を勘案すると(LSS 15, 1934)、カルナップは、この言明で、「または」とか「ではない」とかといった、論理的結合子の「意味」が原初文や推論規則を選ぶことで定まる、と立言している。つまり、わたしたちの推論を規制していると考えられる「意味」は、むしろ、逆に、推論の組み立て方に基づいて決定できるのである。とはいえ、カルナップは、「論理的構文論」の枠組みのなかで、この言説をどのように証示していくのであろうか。「論理的構文論」による「意味」の形式的把握がつぎの課題として浮かび上がってきている。

¹ Gary Ebbs. "Carnap and Quine on Truth by Convention." *Mind*. Vol. 120, No. 478. 2011. p. 213.

² Verein Ernst Mach. "Wissenschaftliche Weltauffassung. Der Wiener Kreis." 1929. Hrsg. Michael Stöltzner und Thomas Uebel. *Wiener Kreis: Texte zur wissenschaftlichen Weltauffassung von Rudolf Carnap, Otto Neurath, Moritz Schlick, Philipp Frank, Hans Hahn, Karl Menger, Edgar Zilsel und Gustav Bergmann*. Hamburg: Felix Meiner, 2006. 本論文からの引用と参照にかんしては、本論文を WW と略記し、該当箇所の頁数を明示して、本文中に挿入する。

³ Moritz Schlick. "Über das Fundament der Erkenntnis." 1934. Hrsg. Michael Stöltzner und Thomas Uebel. *Wiener Kreis: Texte zur wissenschaftlichen Weltauffassung von Rudolf Carnap, Otto Neurath, Moritz Schlick, Philipp Frank, Hans Hahn, Karl Menger, Edgar Zilsel und Gustav Bergmann*. Hamburg: Felix Meiner, 2006. S. 430.

文献一覧

引用・参照文献

Adolf Loos. “Zwei Aufsätze und eine Zuschrift über das Haus auf dem Michaelerplatz.”

Hrsg. Franz Glück. *Sämtliche Schriften*. Wien: Herold, 1962. S. 293-301.

Alan W. Richardson. *Carnap's Construction of the World*. Cambridge: Cambridge University Press, 1998.

Allan Janik and Stephen Toulmin. *Wittgenstein's Vienna*. New York: Simon and Schuster, 1973.

Bertrand Russell. *Our knowledge of the External World as a Field for Scientific Method in Philosophy*. 5th edition. London: George Allen and Unwin, 1961.

Clarence Irving Lewis. “Experience and Meaning.” *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association*. Vol. 7, No. 125. 1933. pp. 125-146

Gary Ebbs. “Carnap and Quine on Truth by Convention.” *Mind*. Vol. 120, No. 478. 2011. pp.193-237.

Gottfried Gabriel. “Carnap and Frage.” *The Cambridge Companion to Carnap*. Eds.

Michael Friedman and Richard Creath. Cambridge: Cambridge University Press, 2007. pp. 65-80.

Greg Frost-Arnold. “The Large Scale Structure of Logical Empiricism: Unity of Science and the Elimination of Metaphysics.” *Philosophy of Science*. Vol. 72, No. 5. 2005. pp. 826-838.

Jonathan Y. Tsou. “The Justification of Concepts in Carnap's *Aufbau*.” *Philosophy of Science*. Vol. 70, No. 4. 2003. pp. 671-689.

Michael Friedman. “Carnap's *Aufbau* Reconsidered.” 1987. *Reconsidering Logical Positivism*. Cambridge: Cambridge University Press. 1999. pp. 89-113.

- Rudolf Carnap. "Über die Aufgabe der Physik und die Anwendung des Grundsatzes der Einfachstheit." *Kant-Studien*. Bd. 28, H. 1. 1923. S. 90-107.
- _____. "Dreidimensionalität des Raumes und Kausalität Eine Untersuchung über den logischen Zusammenhang zweier Funktionen." *Annalen der Philosophie und philosophischen Kritik*. Bd.4, H.3. 1924. S. 105-130.
- _____. *Physikalische Begriffsbildung*. Karlsruhe: Braun. 1926.
- _____. *Der logische Aufbau der Welt*. 1928. Hamburg: Felix Meiner, 1998.
- _____. "Scheinprobleme in der Philosophie." 1928. Hrsg. Thomas Mormann. *Scheinprobleme in der Philosophie und andere metaphysikkritische Schriften*. Hamburg: Felix Meiner, 2004. S. 3-48.
- _____. *Abriss der Logistik, mit besonderer Berücksichtigung der Relationstheorie und ihrer Anwendungen*. Wien: Springer, 1929.
- _____. "Die alte und die neue Logik." 1930. Hrsg. Thomas Mormann. *Scheinprobleme in der Philosophie und andere metaphysikkritische Schriften*. Hamburg: Felix Meiner, 2004. S. 63-80.
- _____. "Überwindung der Metaphysik durch logische Analyse der Sprach." 1932. Hrsg. Thomas Mormann. *Scheinprobleme in der Philosophie und andere metaphysikkritische Schriften*. Hamburg: Felix Meiner, 2004. S.81-110.
- _____. "Intellectual Autobiography." Ed. Paul Arthur Schilpp. *The Philosophy of Rudolf Carnap*. La Salle: Open Court, 1963. pp. 3-84.
- Verein Ernst Mach. "Wissenschaftliche Weltauffassung. Der Wiener Kreis." 1929. Hrsg. Michael Stöltzner und Thomas Uebel. *Wiener Kreis: Texte zur wissenschaftlichen Weltauffassung von Rudolf Carnap, Otto Neurath, Moritz Schlick, Philipp Frank, Hans Hahn, Karl Menger, Edgar Zilsel und Gustav Bergmann*. Hamburg: Felix Meiner, 2006. S. 3-29.
- Willard van Orman Quine. "Two Dogmas of Empiricism." 1951. Ed. Roger F. Gibson, Jr.

Quintessence: Basic Readings from the Philosophy of W.V. Quine. Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press, 2008. pp. 31-53.

_____. "Epistemology Naturalized." 1969. Ed. Roger F. Gibson, Jr. *Quintessence: Basic Readings from the Philosophy of W.V. Quine*. Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press, 2008. pp. 259-274.

参考文献

Adolf Loos. "Zwei Aufsätze und eine Zusage über das Haus auf dem Michaelerplatz." Hrsg. Franz Glück. *Sämtliche Schriften*. Wien: Herold, 1962. S. 293-301.

Alan W. Richardson. "Logical Idealism and Carnap's Construction of the World." *Synthese: An International Journal for Epistemology, Methodology and Philosophy of Science*. Vol. 93. 1992. pp. 59-92.

_____. *Carnap's Construction of the World*. Cambridge: Cambridge University Press, 1998.

_____. "Carnapian Pragmatism." Eds. Michael Friedman and Richard Creath. *The Cambridge Companion to Carnap*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007. pp. 295-315.

Alan Gewirth. "The Distinction between Analytic and Synthetic Truth." *Journal of Philosophy*. Vol. 50, No. 14. 1953. pp. 397-425.

Albert Coffa "Carnap, Tarski, and the Search for Truth." *Noûs*. Vol. 21, No. 4. 1987. pp. 547-572.

Alex Orenstein. *W. V. Quine*. Princeton: Princeton University Press, 2002.

Alexander George. "On Washing the Fur Without Wetting It: Quine, Carnap, and Analyticity." *Mind*. Vol. 109, No. 433. 2000. pp. 1-24.

Alexander Miller. "Realism and Antirealism." Eds. Ernst Lepore and Barry C. Smith.

- The Oxford Handbook of Philosophy of Language*. Oxford: Oxford University Press, 2006. pp. 983-1005.
- Alfred Jules Ayer. "Verification and Experience." Ed. Alfred Jules Ayer. *Logical Positivism*. New York: Free Press, 1959. pp. 228-246.
- _____. *Language, Truth and Logic*. London: Victor Gollancz, 1936.
- Allan Janik and Stephen Toulmin. *Wittgenstein's Vienna*. New York: Simon and Schuster, 1973.
- Andre. W. Carus. *Carnap and Twentieth-Century Thought Explication as Enlightenment*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.
- _____. "Carnap's Intellectual Development." Eds. Michael Friedman and Richard Creath. *The Cambridge Companion to Carnap*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007. pp. 19-42.
- Åsa Maria Wikforss. "An *A posteriori* Conception of Analyticity?" *Grazer Philosophische Studien*. Vol. 66, No. 1. 2003. pp. 119-139.
- Bertrand Russell. *Our knowledge of the External World as a Field for Scientific Method in Philosophy*. 5th edition. London: George Allen and Unwin, 1961.
- _____. "Logical Atomism." 1924. Ed. Robert Charles Marsh. *Logic and Knowledge: Essays 1901-1950*. London: George Allen and Unwin, 1956. pp. 321-344.
- Brian G. Norton. "On the Metatheoretical Nature of Carnap's Philosophy." *Philosophy of Science*. Vol. 44, No. 1. 1977. pp. 65-85.
- Carl G. Hempel. "The Theoretician's Dilemma: A Study in the Logic of Theory Construction." Eds. Herbert Feigl and Michael Scriven. *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*. Vol. 2. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1958. pp. 37-98.
- Carl G. Hempel and Paul Oppenheim. "Studies in the Logic of Explanation."

- Philosophy of Science*. Vol.15, No.2. 1948. pp. 135-175.
- Carlos Ulises Moulines. "Making Sense of Carnap's *Aufbau*." *Erkenntnis: An International Journal of Analytic Philosophy*. Vol. 35. 1991. pp. 263-286.
- Christian Nimtz. "Analytic Truths: Still Harmless After All These Years?" *Grazer Philosophische Studien*. Vol. 66, No. 1. 2003. pp. 91-118.
- Christopher Pincock. "A Reserved Reading of Carnap's *Aufbau*." *Pacific Philosophical Quarterly*. Vol. 86, Issue 4. 2005. pp. 518-543.
- _____. "Carnap's Logical Structure of the World." *Philosophy Compass*. Vol. 4, No. 6. 2009. pp. 951-961.
- _____. "Russell's Influence on Carnap's *Aufbau*." *Synthese: An International Journal for Epistemology, Methodology and Philosophy of Science*. Vol. 131. 2002. pp. 1-37.
- _____. "Carnap and the Unity of Science: 1921-1928." Ed. Thomas Bonk. *Language, Truth and Knowledge: Contributions to the Philosophy of Rudolf Carnap*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers. 2003. pp. 87-96.
- Clarence Irving Lewis. "Experience and Meaning." *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association*. Vol. 7, No. 125. 1933. pp. 125-146
- David Walter Hamlyn. "Analytic Truths." *Mind*, Vol. 65, No. 259. 1956. pp. 359-367.
- Edmund Runggaldier. *Carnap's Early Conventionalism: An Inquiry into the Historical Background of the Vienna Circle*. Amsterdam: Rodopi, 1984.
- Franz von Kutschera. "Carnap und der Physikalismus." Ed. Wolfgang Spohn. *Erkenntnis Orientated: A Centennial Volume for Rudolf Carnap and Hans Reichenbach*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 1991. S. 305-324.
- Gary Ebbs. "Carnap and Quine on Truth by Convention." *Mind*. Vol. 120, No. 478. 2011. pp. 193-237.
- George D. Romanos. *Quine and Analytic Philosophy*. Cambridge, MA: The MIT Press, 1983.

- Gilbert Harman. "Analyticity Regained?" *Noûs*. Vol. 30, No. 3. 1996. pp. 392-400.
- Gottfried Gabriel. "Carnap and Frage." *The Cambridge Companion to Carnap*. Eds. Michael Friedman and Richard Creath. Cambridge: Cambridge University Press, 2007. pp. 65-80.
- Gottlob Frege. "Über Sinn und Bedeutung." 1892. Hrsg. Ignacio Angelelli. *Kleine Schriften*. 2te Auflage. Hildensheim: GeorgeOlms, 1990. S. 143-162.
- Greg Frost-Arnold. "The Large Scale Structure of Logical Empiricism: Unity of Science and the Elimination of Metaphysics." *Philosophy of Science*. Vol. 72, No. 5. 2005. pp. 826-838.
- Gregory Lavers. "Carnap, Semantics and Ontology." *Erkenntnis: An International Journal of Analytic Philosophy*. Vol.60, No.3. 2004. pp. 295-316.
- Gustav Bergmann. *The Metaphysics of Logical Positivism*. 2nd edition. Madison: The University of Wisconsin Press, 1967.
- Gustav Theodor Fechner. *Elemente der Psychophysik, erster Theil*. Leipzig: Breitkopf und Härtel, 1860.
- _____. *Elemente der Psychophysik, zweiter Theil*. Leipzig: Breitkopf und Härtel, 1860.
- Hans Reichenbach. *Relativitätstheorie und Erkenntnis A priori*. Berlin: Springer, 1920.
- Hans Reichenbach. *The Theory of Relativity and A priori Knowledge*. Ed. and Trans. Maria Reichenbach. Berkeley: University of California Press, 1965.
- Howard Stein. "Was Carnap Entirely Wrong, After All?" *Synthese: An International Journal for Epistemology, Methodology and Philosophy of Science*. Vol. 93. 1992. pp. 275-295.
- Jaakko Hintikka. "Are Logical Truths Analytic?" *Philosophical Review* Vol. 74, No. 2.

1965. pp. 178-203.

_____. "Carnap, the Universality of Language and Extremality Axioms." Ed. Wolfgang Spohn. *Erkenntnis Orientated: A Centennial Volume for Rudolf Carnap and Hans Reichenbach*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 1991. pp. 325-336.

Joëlle Proust. *Question of Form Logic and the Analytic Proposition from Kant to Carnap*. Trans. Anastasios Albert Brenner. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1986.

Joia Lewis. "Hidden Agendas: Knowledge and Verification." Ed. Sahotra Sarkar.

The Legacy of the Vienna Circle: Modern Reappraisals. London: Routledge, 1996.
pp. 21-30

Jonathan Y. Tsou. "The Justification of Concepts in Carnap's *Aufbau*." *Philosophy of Science*. Vol. 70, No. 4. 2003. pp. 671-689.

Marian David. "Analyticity, Carnap, Quine, and Truth." *Philosophical Perspectives*. Vol. 10. 1996. pp. 281-296.

Marian Przełęcki and Ryszard Wójcicki. "The Problem of Analyticity." *Synthese: An International Journal for Epistemology, Methodology and Philosophy of Science*. Vol. 19. 1969. pp. 374-399.

Marcus Giaquinto. "Non-Analytic Conceptual Knowledge." *Mind*. Vol. 105, No. 418. 1996. pp. 249-268.

Matthias Jakob Schleiden. *Grundzüge der wissenschaftlichen Botanik : nebst einer methodologischen Einleitung als anleitung zum Studium der Pflanze*. Leipzig: Willhelm Engelmann, 1861.

Michael Friedman. "Carnap's *Aufbau* Reconsidered." 1987. *Reconsidering Logical Positivism*. Cambridge: Cambridge University Press. 1999. pp. 89-113.

_____. "Tolerance and Analyticity in Carnap's Philosophy of Mathematics." *Reconsidering Logical Positivism*. Cambridge: Cambridge University Press, 1999. pp. 198-234.

- _____. "Wissenschaftslogik: The Role of Logic in the Philosophy of Science." *Synthese: An International Journal for Epistemology, Methodology and Philosophy of Science*. Vol. 4. 2008. pp. 385-400.
- Morris Weitz. "Analytic Statements." *Mind*. Vol. 63, No. 252. 1954. pp. 487-494.
- Nicholas Rescher. *The Heritage of Logical Positivism*. Lanham: University Press of America, 1985.
- Oswald Hanfling. *Logical Positivism*. Oxford: Blackwell, 1981.
- Paul Gregory. "Two Dogmas'—All Bark and No Bite? Carnap and Quine on Analyticity." *Philosophy and Phenomenological Studies*. Vol. 67, No. 3. 2003. pp. 633-648.
- Paul Needham. "Duhem and Quine." *Dialectica: International Journal of Philosophy of Knowledge*. Vol. 54, No. 2. 2000. pp. 109-132.
- Paul O'Grady. "Carnap and Two Dogmas of Empiricism." *Philosophy and Phenomenological Research*. Vol. 67, No. 4. 1999. pp. 1015-1027.
- Peter Hylton. *Quine*. New York: Routledge, 2007.
- Peter Pagin. "A Quinean Definition of Synonymy." *Erkenntnis: An International Journal of Analytic Philosophy*. Vol. 55. 2001. pp. 7-32.
- . "Quine and the Problem of Synonymy." *Grazer Philosophische Studien*. Vol. 66, No. 1. 2003. pp. 171-197.
- Raimo Tuomela. *Theoretical Concepts*. Wien: Springer, 1973.
- Ramon Cirera. *Carnap and the Vienna Circle: Empiricism and Logical Syntax*. Trans. Dick Edelstein. Amsterdam: Rodopi, 1994.
- Richard Creath. "Carnap's Move to Semantics: Gains and Losses." Eds. Jan Wolenski and Eckehart Köhler. *Alfred Tarski and the Vienna Circle: Austro-Polish Connections in Logical Empiricism*. Berlin: Springer, 1999. pp. 65-76.
- Richard Milton Martin. "On Analytic." *Philosophical Studies*. Vol. 3, No. 3. 1952.

pp. 42-47.

Richard von Mises. *Positivism: A Study in Human Understanding*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1951.

Robert J. Fogelin "Aspects of Quine's Naturalized Epistemology." Ed. Roger F. Gibson. *The Cambridge Companion to Quine*. Cambridge: Cambridge University Press, 2004. pp. 19-46.

Rudolf Carnap. "Über die Aufgabe der Physik und die Anwendung des Grundsatzes der Einfachstheit." *Kant-Studien*. Bd. 28, H. 1. 1923. S. 90-107.

_____. "Dreidimensionalität des Raumes und Kausalität Eine Untersuchung über den logischen Zusammenhang zweier Funktionen." *Annalen der Philosophie und philosophischen Kritik*. Bd.4, H.3. 1924. S. 105-130.

_____. *Physikalische Begriffsbildung*. Karlsruhe: Braun. 1926.

_____. *Der logische Aufbau der Welt*. 1928. Hamburg: Felix Meiner, 1998.

_____. "Scheinprobleme in der Philosophie." 1928. Hrsg. Thomas Mormann. *Scheinprobleme in der Philosophie und andere metaphysikkritische Schriften*. Hamburg: Felix Meiner, 2004. S. 3-48.

_____. *Abriss der Logistik, mit besonderer Berücksichtigung der Relationstheorie und ihrer Anwendungen*. Wien: Springer, 1929.

_____. "Die alte und die neue Logik." 1930. Hrsg. Thomas Mormann. *Scheinprobleme in der Philosophie und andere metaphysikkritische Schriften*. Hamburg: Felix Meiner, 2004. S. 63-80.

_____. "Überwindung der Metaphysik durch logische Analyse der Sprach." 1932. Hrsg. Thomas Mormann. *Scheinprobleme in der Philosophie und andere metaphysikkritische Schriften*. Hamburg: Felix Meiner, 2004. S. 81-110.

_____. *Logisch Syntax der Sprach*. 1934. Wien: Springer, 1968.

_____. *Philosophy and Logical Syntax*. London: Kegan Paul, 1935.

- _____. "Von der Erkenntnistheorie zur Wissenschaftslogik." 1936. Hrsg. Michael Stöltzner und Thomas Uebel. *Wiener Kreis: Texte zur wissenschaftlichen Weltauffassung von Rudolf Carnap, Otto Neurath, Moritz Schlick, Philipp Frank, Hans Hahn, Karl Menger, Edgar Zilsel und Gustav Bergmann*. Hamburg: Felix Meiner, 2006. S. 260-268.
- _____. "Testability and Meaning." *Philosophy of Science*. Vol. 3, No. 4. 1936. pp. 419-471.
- _____. "Testability and Meaning — continued." *Philosophy of Science*. Vol. 4, No. 1. 1937. pp. 1-40.
- _____. *Logical Syntax of Language*. 1937. Trans. Amethe Smeathon. London: Routledge, 2010.
- _____. *Foundation of Logic and Mathematics*. Chicago: University of Chicago Press, 1939.
- _____. *Introduction to Semantics*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1942.
- _____. *Formalization of Logic*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1943.
- _____. *Meaning and Necessity: a Study in Semantics and Modal Logic*. Chicago: University of Chicago Press, 1947.
- _____. "The Methodological Character of Theoretical Concepts." Eds. Herbert Feigl and Michael Scriven. *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*. Vol. 1. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1956. pp. 38-76.
- _____. "Intellectual Autobiography." Ed. Paul Arthur Schilpp. *The Philosophy of Rudolf Carnap*. La Salle: Open Court, 1963. pp. 3-84.
- _____. *Introduction to the Philosophy of Science: Philosophical Foundations of Physics*. Ed. Martin Gardner. New York: Basic Books, 1966.
- _____. *The Logical Structure of the World and Pseudoproblems*. 1969. Trans. Rolf A. George. La Salle: Open Court, 2003.
- Rudolf Haller. "The First Vienna Circle." Ed. Sahotra Sarkar. *The Legacy of the Vienna Circle: Modern Reappraisals*. New York: Garland Publishing, 1996. pp. 31-44.

- Sahotra Sarkar. *Decline and Obsolescence of Logical Empiricism: Carnap vs. Quine and the Critics*. New York: Garland Publishing, 1996.
- Samira Okasha. "Holism about Meaning and about Evidence: In Defence of W. V. Quine." *Erkenntnis: An International Journal of Analytic Philosophy*. Vol. 52, No. 1. 2000. pp. 39-61.
- Stanley Muntas. *The Analytic-Synthetic Distinction*. Belmont, CA: Wadsworth Publishing, 1971.
- Stephen Francis Barker. "Logical Positivism and the Philosophy of Mathematics." Eds. Peter Achinstein and Stephen Francis Barker. *The Legacy of Logical Positivism: Studies in the Philosophy of Science*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1969. pp. 229-257.
- Steve Awodey. "Carnap's Quest for Analyticity: The Studies in Semantics." Eds. Michael Friedman and Richard Creath. *The Cambridge Companion to Carnap*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007. pp. 226-247.
- Steve Awodey and Andre W. Carus. "The Turning Point and the Revolution: Philosophy of Mathematics in Logical Empiricism from *Tractatus* to *Logical Syntax*." Eds. Alan Richadrson and Thomas Uebel. *The Cambridge Companion to Logical Empiricism*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007. pp. 165-192.
- Thomas Baldwin. "Philosophy of Language in the Twentieth Century." Eds. Ernst Lepore and Barry C. Smith. *The Oxford Handbook of Philosophy of Language*. Oxford: Oxford University Press, 2006. pp. 60-99.
- Thomas Mormann. *Rudolf Carnap*. München: C. H. Beck, 2007.
- Thomas Ricketts. "Carnap's Principle of Tolerance, Empiricism, and Conventionalism." Eds. Peter Clark and Bob Hale. *Readings Putnam*. Oxford: Blackwell. 1994. pp. 176-200.
- . "Carnap: From Logical Syntax to Semantics." Eds. Ronald E. Giere and

- Alan W. Richardson. *Origins of Logical Empiricism— Minnesota Studies in the Philosophy of Science XVI*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press, 1996. pp.231-250.
- Thomas Uebel. *Empiricism at the Crossroads: The Vienna Circle's Protocol Sentence Debate*. La Salle: Open Court, 2007.
- Verein Ernst Mach. "Wissenschaftliche Weltauffassung. Der Wiener Kreis." 1929. Hrsg. Michael Stöltzner und Thomas Uebel. *Wiener Kreis: Texte zur wissenschaftlichen Weltauffassung von Rudolf Carnap, Otto Neurath, Moritz Schlick, Philipp Frank, Hans Hahn, Karl Menger, Edgar Zilsel und Gustav Bergmann*. Hamburg: Felix Meiner, 2006. S. 3-29.
- Verena Mayer. "Implicit Thoughts: Quine, Frege and Kant on Analytic Propositions." *Grazer Philosophische Studien*. Vol. 66, Issue. 1. 2003. pp. 61-90.
- Victor Kraft. *The Vienna Circle: The Origin of Neo-positivism, A Chapter in the History of Recent Philosophy*. New York: Greenwood Press, 1953.
- Werner Sauer. "On the Kantian Background of Neopositivism." Ed. Sahotra Sarkar. *The Legacy of the Vienna Circle: Modern Reappraisals*. London: Routledge, 1996. pp. 1-10.
- Wilhelm Max Wundt. *Gustav Theodor Fechner. Rede zur Feir seines hundertjährigen Geburtstages*. Leibzig: Wilhelm Engelman, 1901.
- Willard van Orman Quine. "Two Dogmas of Empiricism." 1951. Ed. Roger F. Gibson, Jr. *Quintessence: Basic Readings from the Philosophy of W.V. Quine*. Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press, 2008. pp. 31-53.
- _____. "Epistemology Naturalized." 1969. Ed. Roger F. Gibson, Jr. *Quintessence: Basic Readings from the Philosophy of W.V. Quine*. Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press, 2008. pp. 259-274.
- Yemima Ben-Menahem. *Conventionalism*. Cambridge: Cambridge University Press,

2006.

蟹江洋一「ウィーン学団とカルナップ」、飯田隆編『哲学の歴史 第11巻』、中央公論
新社、2007。